
竜胆の東屋

池本いつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜胆の東屋

【Nコード】

N3689V

【作者名】

池本いつき

【あらすじ】

王宮から離れた、森に程近い位置にある東屋。そこは人が滅多に来ない場所。その東屋の管理を任された少女と、そこへ通う王子の物語。兄と妹のようだった過去を懐かしむだけなのか、それとも新しい関係に気付くのか。逢瀬というには幼すぎる関係の二人の、緩く少しずつ進む季節。

ジレジレを通り越した二人の関係を短編連作風味で書いてみました。

01話 うたた寝姫に目覚めの挨拶を（前書き）

新しく始まりました。ノロノロジレジレ、ときどきイライラする
かもしれませんが、ゆっくりとお付き合いください。

01話 うたた寝姫に目覚めの挨拶を

今日も一人、供もつけず彼女のところへ。この王宮で唯一、心休まる場所へ。

一日で数時間だけ、『王子』から『俺』へ戻れる場所へ。

うたた寝姫に目覚めの挨拶を ―可愛いけど相手をして欲しい―

それは王宮の中でも一際奥まったところにある東屋。

数代前の側室が自殺したとか何とかで、今ではほとんど人が近づかない。しかし全く人がいないというわけでもないのだ。

人が来なくても、そこは紛れもなく王宮の一部であり、その管理はしなくてはいけない。季節折々の花々もあるし、東屋だって定期的に手を入れなければいけないのだ。

たとえば、急に来る来客に備えて。

「まあ、俺みたいな物好き、なかなかいないが」

一人ごちて、ちらりと見えた東屋に足が速くなる。

別に逃げるわけもないのに、つい足が速くなるのを止められない。ふわり、とまだ暑いとは言えない風が花の香りを運んできた。

進むごとに花が増え、東屋へつく頃には一面花畑だ。

「……っと」

ひょいっと外からでも判別できる栗色の髪の持ち主へ声をかけようとして、その名を飲み込む。かくん、とその首が傾き、こくりこくりと揺れたからだ。

気配を消して音を立てないようにして近づくと、案の定健やかな寝息がたっていた。それを見て、声も出さずに笑った。

背を預けるようにして寄りかかっているイスは、雨を凌ぐ程度の造りの東屋に相応しく、少々寝るのには不適切だ。

木でできているそれに寄りかかったままだと、なかなか眠りにく

いだろう。

なのに。

「よく、寝てるな」

揺れる頭に合わせて左右に舞う栗色の髪。今は閉じられているが、
瞼に隠された瞳は深い紫で、その形は未だに丸くて幼い。

初めて会ったときと、彼女はあまり変わらないように思う。

いや、変わったか。身長は伸びてすらりとした。言動も大人びて、
何かを悟ったような口調になっている。それでもそれ以外は、笑顔
も声も何も変わらない。変わっていない、はずだ。

「ああ、でも」

呼び方は変わったか。もうあの頃のように、彼女は親しげに呼ん
でくれない。

「なあ。リゼ」

幼い頃の呼び名で呼びかければ、ぴくりと瞼が震えやがて紫の瞳
が姿を表した。

一度、二度状況を確かめるように瞬き、それからこちらが目に入
ったらしく飛び上がって背筋を伸ばす。

本人曰く『動きやすい』らしい男物の服がひらりと揺れた。目の
端にそれを捕らえ、ゆっくりと笑む。

「よく寝てたな、リゼット」

「なっ。あっ。アルバート様っ!!」

笑って言うと、彼女は可哀想なくらい顔を赤くして押し黙ってし
まう。それからボソボソと『来ていらしたなら、そう言って下され
ばいいのに』と非難めいたことを言ってきた。

袖のところを弄りつつ、目を合わせないのは気まずくて、居た堪
れないせいだろう。

「気持ちよさそうだったから、起こすのもどうかと思ってな。久し
ぶりの寝顔もじっくりと見たかったし」

「そんなもの、じっくり見るものではありません」

お茶を淹れてきます、と少々怒ったように宣言して、東屋の近く

にある管理室へ入ってしまう。

そこは東屋からは見えないように工夫して配置された、東屋の管理者の待機場所だ。

東屋から見えて貴人の機嫌を損ねないように。しかし用事で呼ばれればすぐ馳せ参じれるように。

何と言うか、王族らしい考え方だ、と逆に感心してしまうほど、王族本位に作られたこの『王宮』という空間。

「俺もその一員か」

「アルバート様？ 何ですか？」

「いや、眠り姫の寝顔は特別愛らしかった、と」

ぽんぽん、と栗色の柔らかい髪の毛を撫でてそう言えば、『以後気をつけます』と彼女は肩を落とす。

『可愛らしい』云々の発言に照れる余裕もないらしい。むしろ耳に入っていないのではないだろうか。

こちらの訪れに気付かなかった挙句、寝顔まで見られたことをよほど気にしているらしい。この場合、何と慰めても回復しないことは承知している内容なので、心の中で思うだけにする。

『眠り姫に目覚めの挨拶が出来てよかった』なんて言ったが最後、今度こそ本気で落ち込まれるかもしれないから。

それだけは避けなければいけない事態だろう。そう思いつつ、彼女の髪を掬った。

「あの、気をつけますよ」

「分かってる」

この行為をどう受け取ったのか、彼女は不思議そうに首を傾げた。こちらは何の含みもないので、ただ了解の意を伝えた。

そしてまた、懲りずに彼女の髪を撫でる。

「ああ、言い損ねていたな」

「え？ 何をですか。言い損ねた、なんて」

「おはよう、リゼット」

眠り姫、いやうたた寝姫に目覚めの挨拶をしよう。その瞳に、自

分が映った喜びを込めて。

01話 うたた寝姫に目覚めの挨拶を（後書き）

恋愛じゃないと言い張る王子がすごいと思います。

長々と続けることになると思いますが、最後まで見てくださったら幸いです。

02話 机の向こう側から（前書き）

テスト期間中につき、しばらく予約投稿でお楽しみください。

02話 机の向こう側から

机を挟んだ向こう側の彼女。いつもは楽しそうにこちらへ視線を送ってくれるが、今ばかりはその視線も下の書物へ注がれていた。

机の向こう側から ―何気なく覗いて怒られた―

「リゼット」

「……」

「無視か？」

「……」

「……リゼ？」

何と話しかけても反応がない。

今や『王子が庭師をそのように軽々しく呼ばれてはなりません』と年下の彼女に窘められてしまう、彼女の愛称を口に出してもダメだ。

いつもはしっかりとこちらに向けられる紫の瞳は、好奇心の光を宿して手元の書物に綴られている文字を追っていた。

「書物に負けるというの、な」

そう独り言を言っているのも、彼女の意識から文字情報以外の全てが追い出されていると知っているからだ。

こんなセリフ、いつもなら絶対に口に出さない。妹を書物に取られてしまった兄、というのは頂けない立場だ。

「まあ、書物を持ってきたのは俺自身だから文句を言う相手もないし」

彼女の手になまっているのは薬学の本。それも普通の人間ならまずお目にかかれないほど貴重なものだ。

いつもは王宮の書物庫の奥深くに眠っているはずのそれだったが、今はその黴臭そうな外見にまるで合わない少女の手に納まっている。

それが別段不釣合いでなく、意外にしっくりときていた。

薬効のある草木は知っている方であるが、目の前の彼女の知識はそれを遥かに上回る。元々薬師を目指していたのだが、家庭の事情で諦めざるを得なかったのだと聞いている。

しかし今でもこうして独学ではあるが薬学を学び、自由に手を入れることを許された東屋の管理室の周りにはいくつかの薬草が植えられていた。

そして自分はたまにだがこうして薬学の書物を貸す。

たまに、なのは毎度だとあまりにも会話がなく、手持ち無沙汰になるからだ。

自分も何度か違う本を持ってきたが、書物に目を通す彼女の百面相がおかしく、なかなか集中できない。

だからこういうときは、彼女を観察することになっている。

柔らかそうな、癖のつきやすい栗色の髪の毛は、指に絡ませればすんなりとなじむ。

今は文字を追う大きな瞳は神秘的な紫色で、母王妃が好んで身に着ける紫水晶よりもずっと澄んでいた。

抱き上げれば子供のように細く、軽く、今年で十七になるのが少し信じられないくらいだ。

なのにその小柄な体を包むのは男物の服で、年頃の少女の服装とは言いがたい。むしろ全力で反対したい。

気が向いたとき注意を促してはみるが、本人は笑って流してしまいうので手ごたえは感じられない。

女物の衣を纏う気は全くといってないらしい。確かに、草木の世話をするには不向きではあろうが。

「何が書かれているからそんなに楽しいのか」

知識があるということと、興味があるということは必ずしも一致しない。

自分にとって薬学の知識は、知っていれば便利であるし、役に立つ程度なのだ。彼女のように、心底学びたいようなものではない。

そう思いつつ、彼女の方へ顔を寄せ、そっと覗き込んだ。

たくさんの薬草とその効能が書かれているそれを見つめれば、自然と距離も近くなる。もちろん、彼女との距離が。

「……っ！！ アルバート様っ」

「やっと気付いたのか」

彼女の視線を覆い隠すほど近くなって、やっと彼女から非難の声がかかる。

読書の邪魔をされて怒る、というのとはまた少し違うその声に顔を上げれば、頬の赤くなった彼女の視線とかち合う。

自然、見詰め合う形になりしばらくその紫に瞳をじっと観察した。曇ることなどない、澄んだ瞳。

「人が本を読んでいるときに、覗き込むのはいかがなものかと思えます」

「そうか？ 会議のときなどはよくやるが」

そう嘯けば、一層顔を赤くして反論してくる。その様子は幼い頃からまるで変わっておらず、ほっと息をついた。

「それは仕事中ですし、それにお相手も男性でしょう？！ アルバート様は王子なのですから、私のような卑しい人間にあまり近づかない方がよいに決まっています」

しかし、次の瞬間にざっくりと刺され、一瞬何も口にできなくなってしまう。

まるで何も変わっていないように見えて、実は予想以上に彼女は変わっていた。いつの間に彼女は自分が卑しいと考えるようになったのか。

いつの間に、王子と庭師の身分を気にするようになったのか。

「……いつの間に、『アル』と呼ばなくなったんだらうな、リゼット」

「え？」

そして自分自身は、どうして『リゼット』へと呼び方を変えたのだらう。再会したときは、『リゼ』と呼んでいたのに。

出会った頃は、屈託のない笑顔で接することができたのに。自分は『兄』として。彼女は『妹』として。

まるで兄妹のようだったあの関係は、もうどこにも残ってはいないのだろうか。

03話　そういうのも必要

剣を扱う人間が、生傷を作るのは仕方のないことだ。

そう言ったにも拘らず、彼女はその傷を痛々しい顔で治療する。まるで、自分の傷であるかのように。

そういうのも必要　―多分、傷薬になるからなおさら―

「アルバート様っ。東屋へお戻りください。こんなところにはいけません」

「でもリゼットはもうしばらくここにいるんだろう？」

ここは東屋の管理人に与えられた管理室に程近い、小さな薬草畑だった。

東屋からちやうど見えない位置にあるここには、日常で使われるであろう薬草がいくつも植えられている。

薬草にはいくつか、とても手をかけないと育たないものや、気候の変化に弱いもの、害虫に食べられやすいものなどが存在する。

つまり、薬草畑を持つ者は、常日頃から気を張っていなければならないのだ。彼女もその中の一人。

東屋の管理人の仕事は主に二つある。

一つ目は東屋自体の維持だ。しかし東屋の建物の修理などは専門の技術者がいるので、彼女の役目はその周りに植えられている植物の世話。

二つ目は東屋に来る王族達の相手。もともと、この東屋は悪い噂が絶えないため、今のところ彼女が相手をしているのは自分のみだ。そういう理由から、彼女は常に暇を持て余しているらしい。

こちらとしては、そんな彼女に毎日会いに来ればいいのだが、仕事があるため三日に一度会えればいい方だ。

その代わり、というか、彼女はよくこの薬草畑にいる。

今日は水遣りだけらしいのだが、それぞれ薬草によって水の遣り具合も違うため時間がかかっているのだろう。

仕事が一息ついてここへ来たとき誰もいなかったので、こちらを覗いたら水遣りをしている彼女を見つけたのだ。

「では、私も参りますから東屋へ。水遣りなら後でもできます」

「あと少しのようだし、待つくらいなんてことないが」

彼女を困らせるのは本意ではないものの、一介の王族のせいで薬草が枯れるというのはさらに本意ではない。

彼女が大切に育てているのならばなおさらだ。

「リゼットが困らないなら、手伝うんだが」

彼女の顔色が変わり、すぐさま作業を再開する。

説得するよりも、水遣りを早く終えた方がよいという判断を下したのだろう。しばらくすると、手に持っていた道具を片付け始め、やがて苦笑ってから腰を折った。

年若い庭師がするとは思えない、完璧な所作は昔自分が教えたものだ。

「お待たせいたしました。申し訳ありません、アルバート様」

少々わざとらしいその声には、小さな非難の声も見え隠れしていて、こちらも苦笑いを返してしまう。

それから言い訳をするように口を開いた。

「リゼットの作る傷薬は殊更効くからな。愛用している者として、それが手に入らなくなるのは困る」

「傷薬を愛用しないようにする努力は、しないのですね。私の作るものを使ってはなりませんと、あれほどお願いしているのに、アルバート様は」

王子なのだから、当然専用の医者が付く。

しかし剣を扱うので、生傷は絶えない。その度にあの仰々しい行列が来るのは堪らないので、大抵のときには黙っているのだ。

彼女の作る傷薬を常備していれば、無闇にあの大袈裟な医者達の姿を見せずに済む。それはとてもよいことだと思うのに、彼女はそ

の傷を使うことに賛成しない。

「何故お前の薬を使ってはいけない？　よく効くものは、有効に活用すべきだと思うが」

包帯を巻かれれば、その分動きにくくなるし、何よりそれを換えに来る人間に小言を言われるのは何より避けたい事態である。

「下々の者が使うようなもの、王子たるあなたに渡せようはずありません。それに私がもし刺客であつたらどうするおつもりですか？　薬に毒が入っていたら？」

考えてもみなかったことを言われたが、そんなことで引き下がるなどと思っているのだろうか。

必死になって言い募ろうとすればするほど、彼女の元来の素直さと生真面目さが前面に押し出されるようで、苦い笑みが口の端に宿った。

彼女が刺客などでないことは、自分が誰よりも知っていることだ。一体何年見ているかと思ってるんだ。

「お前を信用してるから、お前の薬を使う。それだけだ。これは俺の判断だから、お前が気に病む必要もない。

分かったか？　お前の責任は、どこにもないんだ。リゼ」

昔のように呼べば、彼女は小さく眉を寄せる。それから薬と布を出して、そしてそっと淡く笑みを浮かべつつこちらに近寄ってきた。

「手を、出してください。数日前、強く打たれたと聞きました」

「……手加減しない將軍が相手だったからな」

袖をめくれば、青くあざになった左腕が現れる。

あの將軍相手にこれだけで済んだ我が身の成長を称えてやりたいが、彼女の顔を見るとそんなことも言えなくなった。

「今日だけです。今日だけですからね。本当に。次からはきちんと主治医の方のところへ行つて、ちゃんとした治療を受けるんですよ。約束、ですよ。アル……さま」

「あー、分かった。努力目標に留まるかもしれないが、努力はしよう。懐かしい名前も、呼んでもらったしな。できれば、元通り呼び

捨てて呼んでほしいが」

「ご冗談を」

塗り薬を塗る手はどこまでも優しく、本当に小さく、だがこんな日もいいのかもしれないと思ってしまった。

03話 そういうのも必要(後書き)

甘くなっていればいいのですが。

04話 彼女を巻き込んで街へ行こうか

王子様は王宮から出たことがない？

とんでもない。一ヶ月に一度の頻度で王宮を抜け出している。たまに彼女を巻き込んで。

彼女を巻き込んで街へ行こうか ―問題児の自覚なし―

王宮から出るというのは、難しそうに見えて実は意外と簡単だったりする。

兄である第一王子に言わせれば、『不可能』であるらしいが、コツとタイミングさえ掴めば最小限の労力で出れたりするのだ。

まあ、ここだけの秘密であり、ばれでもしたら部屋に軟禁、なんてこともありえるのだが。

「コツ、と言っても、抜け道を確保するだけなんだが」

いつもの東屋から程近い、王宮を囲む壁のところで笑う。

古びて人目にも付きにくいそこは、いくつかレンガが外れるようになっており、恰好の抜け道であった。

手早く数個外せば、あっという間に人が一人抜けることができる程度の穴ができる。

……どうして誰も気付かないのか。不思議でならないのだが、こんなことを考える人間がいらないからだろう。

さて、と最後の確認のため自らの身を見回す。

服装は貴族の子息達が行くときのものだ。王宮で過ごすときとあまり変わらない気がするも、腰に剣を佩いていれば自然と目立ってしまう。

どうしたもんか、と思う一方で、そればかりは仕方がないのでそのまま出ようとした。

まさか剣をおいて行くわけにもいかない。もしものときに自分の

身が守れないという事態は、一番避けなければいけないのだ。

「アルバート様!!」

出ようとレンガに足をかけた瞬間、ぐっと後ろから服を引かれた。バランスこそ崩さなかったものの、たたらを踏んで後ろにいる人物に笑いかける。その声を聞き間違えるはずもなかった。

「リゼット。どうかしたか？」

「どうかしたか、ではありません。また抜け出そうとしていらっしやいましたね？」

後ろを振り向けば、むっと眉を寄せて怒っている少女がいた。

意地でも放さない、という決意の表れである手がしっかりと服を握っている。今日はタイミングが悪かったらしい。

「ちよつと街を視察するだけだ」

「ならばきちんと門から出るべきです。こんなところからではなく許可をお取りになって」

言い訳をしようものなら、さらに続くであろうお説教。

どちらが年上なのか分からなくなってくる。彼女のお説教で街へ行くのを辞めるつもりなんて、全くないわけではあるが。

「アルバート様？ 聞いていらっしゃるのですか？ ああ、またこんなところに穴が……。この前他のところを直してもらったばかりなのに」

前回抜け出すのがばれたときに使用した穴は、翌日にはしっかりと塞がれていた。

どうやら彼女がその日のうちに知らせていたらしい。迅速すぎる対応だ。

しかし古い壁にはそんな穴いくらかでもあるわけで、数日もしないうちに新しい穴を見つけていた。何せ街へ行くのは、彼女の東屋へ行く次に楽しみにしていることだ。

「リゼットを連れて行けば、同時に二つの楽しみができるわけか」
「思いもよらぬ名案だったが、彼女が賛同してくれるはずもない。
かくなる上は強行突破だな、と数秒で決心し、彼女の腰に手を回

した。初めて抱き上げたときよりも重いのは確かだったが、未だあの頃抱いたイメージを払拭できずにいる。

弱く、小さく、守ってやらねばならない存在だという思いを、まだ持っていた。

「ちよっ。アルバート様っ。アルっ」

「懐かしいな」

掬うように抱き上げれば、他のことに気を回す余裕がないらしく、呼び方が昔のものに戻る。いつもそれでいいのに、そんなことを思っただけの体を包む。

そのままスピードを上げて走り出せば、きゅっと小さな手が肩口のところを掴んだ。

先ほどのように放さない、と決意したようなものではなく、ただ縋りつくように。それが何だか愛しくて、小さく笑った。

「これでお前も共犯だな。リゼット」

「……共犯と言うよりも、被害者です。アルバート様」

王宮から少し離れてスピードを緩めれば、彼女は拗ねたように横を向いた。

いつの間にか呼び名も元に戻っていて、それをほんの少し寂しいと感じた。それを表に出すのも嫌で、彼女の乱れた髪を梳いてやることで我慢する。

さらさらとした手触りのそれを見ていると、自然と笑みが溢れるから不思議だ。

「あの、そろそろ降ろして下さいませんか。もう、『あの頃』の私ではありませんから」

その言葉に小さく傷ついた自分がいるのは確かだった。

いつまでもあの頃のままの彼女でいてほしいという思いを、頭から否定された気さえた。確かに、もう彼女は足を挫いて泣いていたあの頃のままではない。

自分の背に掴まり、懸命にお礼を紡ごうとしていた彼女はもういないのだ。

「そう、だな。リゼットももう、あの頃の俺の年齢も超えているんだな」

その事実気付かなかったわけではない。

見えていなかったわけではない。

ただ漠然と、変化を認めるのが怖かった。認めてしまえば何かが終わってしまう気がしたんだ。

彼女を降ろす一瞬前。

手を放すことに戸惑いを覚えたことは胸に仕舞っておこうと思う。なかったことにしてしまうのがいいのだと自分に言い聞かせて、そっと手を放した。

心の奥底で、どこか明確には分からないけれど『どこか』で、何かが壊れる音がした。

04話 彼女を巻き込んで街へ行こうか（後書き）

自覚はまだ遠く。

05話 お茶を飲みに東屋へ（前書き）

この辺でティア（『姫と騎士』）との違いを分かっていただけたら。

05話 お茶を飲みに東屋へ

人はよく、第二王子は神出鬼没だとか、サボリ魔だとか勝手なことを言う。許されるなら、声を大にして反論させてもらいたい。

お茶を飲みに東屋へ ―サボってない。彼女のお茶が美味しいだけ―

王族と言うものは、他の人に比べて楽しみが少ない人種であるように思う。

日がな一日中座って書類と睨めっこしてたり、会議に出ていたり。そんな中での楽しみといえば、寝る前の読書だったり、剣や弓の練習だったりする。

街へ出ることも、その中の一つであると言えるだろう。

しかし、何より一番の楽しみは。

「お待たせいたしました。アルバート様」

こう言って差し出されるお茶と、彼女との会話だ。

このためだけに書類と日々向き合い、会議をまとめ上げ、楽しくも何ともない夜会に顔を出すのだ。

そう言い切ったとしても決して過言ではないだろう。

そう思いつつ、差し出されたお茶に手を添えて『ありがとう』と礼を言う。

他の王族や貴族のことは知らないが、少なくとも礼を言うべきところは心得ているつもりだ。使用人に礼を言う必要はない、という人間にはなりたくない。

「アルバート様は神出鬼没らしいですね」

彼女が自分の前にもカップを置き、小さく笑った。

初めの頃は『庭師としてここにいるのですから、以前のように接するなんて滅相もない』と言っていた彼女も、しつこいくらいに誘

えば同じテーブルにつき、お茶を飲むようになった。

もつとも、『リゼットが席につくまで茶は飲まない』とかなり我がままを言ったが。（年が離れているのに、自分の方が子供に見えるときがある）

「そんなつもりは全くないが、何故かよく言われるな」

「この前、側近の方があちこち走り回って探しているのを見ました」普通に歩いて移動しているし、特別おかしいな通路を使っているわけでもないのだが、どうも最近よく言われる。

つい先日、この東屋からの帰り道、午後からずっと探していたらしい側近に真面目に泣かれた。

あと少し遅ければ、護衛する部隊全員で探す段取りだったらしい。それを想像して身震いした。それでこの場所が見つかってしまえば、自分は安らぎの場を一つ失うことになるのだ。

「ここにはお仕事から逃げてきているとか」

ちらり、と非難がましく見てくる彼女に笑顔を返すと、呆れたようにため息を吐かれた。それからカップを手に取り、小さく小首を傾げる。

その仕草は幼子のようだ。

「お茶なら、側近の方が淹れて下さるでしょう？ 侍女たちもそのためにいるのに」

まあな、と返しつつ、次からそうしようと思うわけもない。

第一こちらは、お茶を含む彼女との会話を楽しみに来ているのだ。一人で飲むお茶というものは味気なくて好きではない。

「お前の淹れるものだから美味しいと感じるんだ。それにサボっているつもりもない。やらなくてはいけないことは、ここに来る前にきちんと済ませている」

虚をつかれたように、カップの水面を見つめていた彼女が顔を上げた。

次いで、こちらの言葉を理解したらしく、わずかに顔を赤くした。褒められるのが苦手だと知ってはいたが、未だ治っていないという

のも驚きだ。

確かに、この東屋で仕事をしていたら、そんな機会とも無縁だろうが。

「アルバート様に、褒められるのは苦手です。……ご存知でしょう？」

そう言いつつ、カップをテーブルにおいて顔を手で覆った。

しかし、か細い声が手の間から漏れる。『ありがとう、ごさいます』と消え入りそうな声だったが、はっきり届いた。

しばらくその状態だったが、やがてその手からそろそろ顔を上げる。すっかり赤面は治っていたものの、白い頬は未だ薄い桃色を保っていた。

「お仕事をきちんとしていらっしゃるなら、一介の庭師が言うことは何ありません」

からかわれたと思っているのだろうか。

少し不機嫌そうに返してくる彼女の頭に手を乗せると、もう……と膨れたような声が返ってきた。

口調が崩れるのは嬉しい限りで、そのまま一度、二度と彼女の髪を梳くように撫でた。

「こうすれば、機嫌が直ると？」

「少なくとも、お前が東屋の管理人になる前は、な」

その頃は頭を撫でればくすぐったそうに身をよじりつつ、それでも笑顔を浮かべて名前を呼んでくれていた。

それがいつの間にか『アルバート様』という敬称つきの余所余所しい呼び方になり、敬語がつき、一定の距離をとられるようになった。

訳は十分すぎるほど分かっているので、あえて問い質すこともなかった。

「別に怒ってません。だから、そろそろ」

「ああ、そうだな」

本音を言えば、寂しかったのだ。

妹だと思っていた少女がどこか遠くへ行ってしまうような感覚だった。

しかしそれを本人に伝えても、何も変わらないということを知っていた。だから今の関係で満足しようと思ったのだ。

妹役として、前のように親しくしてほしいとは言えない。

もう前のように、『アル』と呼んでほしいとは頼めない。『王子』として見ないでくれなんて、もう口に出してはいけないんだということくらい、分かっているのだ。

決して欲張らず、一緒にお茶を飲めることこそ、大切なのだ、と。そう言い聞かせる。

彼女も、自分もあの頃のように何も考えずに生きていけるほど幼くはないのだ。これは、仕方のないことなのだ。

彼女の髪から手を離す瞬間、一瞬だけ名残惜しくて指の先にその栗色の髪を絡ませた。

それがするりと離れていくことさえ惜しくて、掴んで引き寄せたくなった。離れたくないと、一瞬でも思った自分を恥じる。

自分は、何をそんなに固執しているのだろうか。

こんな、当たり前のことに対して。

5. 5話 何も言えない（前書き）

リゼ視点。アルは無自覚で人を振り回します。

5. 5話 何も言えない

あの方がいなくなった後の東屋は、いつもぞっとするくらい静かで、思わず眉が下がる。

先ほどまで彼が座っていたところへ腰を下ろし、だらしくも机に突っ伏した。寂しいとか、そういうことではない。

多分、そんな単純な感情ではないのだ。この心に巢食う感情はそれよりもっと複雑で、面倒で、始末に終えない。

「アル」

懐かしい名前を口に出し、くすりと笑って見せた。

もうこの呼び名を、繰り返し繰り返し彼に向かって使うことはない。あの頃の自分よりも大きくなり、分別がついたのだから仕方がないのだ。

この名は、私のような身分の人間が簡単に口に出してよいものではないと知った。

祖父が、そう言ったのだ。その名を二度と口にするな、と。今は亡き祖父の言葉を破るつもりは毛頭ない。

その言葉は、多分私を思っている言葉だから。私が傷つかないようにという、祖父なりの思いだろう。

確かに、今も変わらずその名で彼を呼び続ければ、近いうちに私はきつと傷つくから。

「私は、妹」

そう。彼にとって私はそれだけの存在だ。

可愛くて、幼くて、いつまでも腕の中で囲って守らなければいけないようなそんな存在。

彼と別れて過ごすうちに伸びた背も、丸くなった体も、伸びた髪も、全てがああの頃と違うのに、彼の中に住む私はあの頃のまます分も変わっていないのだ。

この心に宿る想いが、兄への思慕から少しずつ変わったというの

に。

もう私は、彼を『兄』と見れないところまで来ているのに。さらっと自分の髪を撫で付ける。

先ほど彼がしたように、髪を一束二束捕まえてはその手の間から落とす。彼の手つきは柔らかく、慎重で、思わずまどろみそうになるほどだ。

小さい頃もよくそうやって頭を撫でられた。たとえば彼の問いに正しい答えを返せたとき、泣いてしまったとき、こけたとき。

思い出せばきりが無いほど、私の記憶は『アル』一色だ。

彼よりずっと長い間一緒にいた家族の声さえ思い出せなくなっても、私は彼の声を忘れることなどではしないのだろう。

悔しいことに、それほど深く彼の存在は私の中で根を張っている。おそらく、引き抜いたところで成長を止めることもないのだ。

「リゼット、気分でも悪いのか？」

はっと目を開けて、体を起こす。

先ほど去っていったはずの人が、目の前にいて私の顔を覗き込んでいた。一瞬にして顔が赤くなり、喉から声にならない悲鳴が漏れる。

立ち上がって首を振れば、目の前の人はその温かな瞳を緩く細めた。

濃い茶色の瞳は穏やかで、その瞳と同色の髪はサラサラと揺れる。精悍な顔立ちはある頃よりずっと逞しく、甘いというよりもすつきりとした雰囲気醸し出していた。

目を細めれば厳しい印象はなくなり、幼い頃見たような優しい気持ちになれる。形のいい唇が、再び私の名を紡いだ。

「リゼット？ 本当に大丈夫か？」

「はい。アル、バート様」

先ほどの癖でつい『アル』と呼びそうになり、すんでのところで敬称を付け加える。

未だに慣れないその呼び方は、私と彼の間をより一層大きくして

いる気がして、眉が下がった。ただでさえ、私と彼の間には大きな溝がある。

それは仕方のないことだし、今更埋められるものでもない。それでも、悲しいと思うのだ。

「何か、忘れ物ですか？」

「いや、まあそうだな。これを、渡しておきたくて」

差し出されたのは一冊の本で、いつも貸していただく本よりずっと薄かった。

それに、新しいのか表紙の皮がすべすべしている。いつもは年を経て色に変色し、深い色合いを出しているのに。

恐る恐る手にとって、その真意を探ろうと彼の瞳を見つめた。落ち着いた色のその瞳は、わたしの瞳を捉えてまた緩められる。

この瞬間は、いつになっても慣れない。いつも、体の中がどろりと溶けるような感覚に陥るのだ。

「薬草の本だ。好きだろう？」

「それは、好きですが」

おどおどと答える。しかし、いつも貸してくださる本は貴重なものだからその場で読んで返してしまうのだ。

持って帰っていいと言われるが、万が一のことを考えると帰って帰りたいはない。

彼が私を信じてくれていることは分かっているが、それでも嫌なのだ。今回も読んでしまおうとするが、すかさず止められた。

「これは、お前に貸すものだ」

「でも」

「それはな、俺の私物なんだ。で、傷薬なんかの作り方まで書いてある」

それで、と彼は笑った。

この笑顔は、変わらない。そう、あの頃のまま何一つ変わったことなんてない。

私を見て、その顔に笑みを浮かべる瞬間だけ、私はあの頃に戻っ

たような気がする。私が彼をどこかの貴族の息子だと思っていたあの頃に。

彼が王族で、本来なら私と話せるような人ではないと知らないあの頃に。

「しばらく貸してやるから、その代わり打ち身に効く薬を作ってくれ」

「なっ。この間今回だけですと言いました！」

慌てて反論すれば、『気休め程度でいいから』と前置きして、説得される。

曰く、『王宮の医者がかかる薬は効きが悪い』とか、『貰いに行くたびに嫌味を言われる』とか。

それでも作る気にはなれないはずなのに、最後の最後では頷くしかないのだ。彼が笑って『頼む』と言うから。

私でも少しは、役に立てるのではないかと錯覚して。

「私が育てているものの中にあるかどうか」

「大丈夫だろ。お前が育ててるもののほとんどが、切り傷や打撲に効くものばかりだ」

見破られていたのが悔しくて、ぐっと押し黙った。

そもそも薬草を育てだした経緯が、彼の傷を減らしたいと思うものだったのだから、当然といえば当然だ。

手に入りにくい、暑い地方にしか育たないものなんかに手を出しているのは、この人には絶対に教えられない。

何も言えない　――言ったが最期、墓穴を掘ることは目に見えているから――

傷を作らない努力をしない彼だから、せめて傷が早く治るように思った。痛みが少しでも和らげばいいと思った。

その結果、彼はなお一層傷を作らない努力をしなくなった。

5. 5話 何も言えない（後書き）

整数でない話数はアル以外の視点ということで。たまにリゼ以外の視点が交じるかもしれませんが。

06話 宴サボリの常習犯な王子

柔らかな音楽も、人々のざわめきも、心躍るようなものではなくって、ため息を吐く。こんなことなら、始めから来なければよかった。

宴サボリの常習犯な王子　―興味ない。飾られたオヒメサマなんて―

隣に座っている兄をちらりと見やる。

病弱な彼が珍しく夜会に出ると言うので、周りも張り切っているのだろう。そんなことを思いつつ、そっと席を立った。

いつまでここにいたって、楽しいことは起こりそうにない。これなら抜け出しても支障はきたさないだろう。

むしろきつと誰も気付かない。

そう思って、するすると出口の方に向かっていく、が。

「アルバート様。この前の演武、とても素敵でしたわ。剣を扱うのがお得意なのですね？」

「この前、書物庫でお見かけしましたわ」

「あら、わたくしはこの前……」

呼び止められても決して嫌な顔をしてはいけない。

にこやかに応対しつつ、逃げる機会をそっと見つけ出すのだ。笑顔を作って一通りの会話を終えようと、そっと扉から出た。

後で抜け出したと騒がれようが、もう関係ない。

後はいつもの東屋へ向かうだけだ。夜会のある日しか夜には会えないので、貴重な機会なのだ。

走って、動きにくい正装のタイを緩める。道ではないところを突っ切って、自分が知る中で一番の近道を選ぶ。途中で木の枝に服が引っかかるが、そんなこと関係なかった。

「リゼット」

ふわり、とこちらを向く彼女。

その身に纏うのは、今日ばかりは女物だ。東屋の管理人も、この日は仕事が増える。囁き、笑い合う男女が幾組みも東屋へ来ては腰を下ろすから。

もつとも、ここはその会場から離れている上に、例の『側室が自殺した』という噂もあるので、彼女にはあまり関係のないことではあった。

しかし、例外は許されないのだ。どこの東屋も同様に用意しなければいけない。

「アルバート様。どうしてここへいらしているのですか？」

美しく整えられた花や、テーブルに飾られた花瓶。

そしていつもは着ない、スカートの簡素な制服。

夜会があるときの着ることを指示される、東屋の管理人の制服は、深い紺色で袖も膨らんでおらず、レースもついていない。

闇に紛れそうなそれが、わずかに浮かぶのは、暖かな月の光のおかげだった。

「夜会が終わったから、と言えば許してくれるか？」

「嘘をおっしゃらないでください。まだ音楽も人のざわめきも続いています」

慣れないらしい長い裾を持ち上げ、こちらへ近づいてくる。

緩くまとめられている髪が肩で上下し、紺色の制服に色彩を与えた。

先ほど見たどのドレスよりも簡素で目立たないはずなのに、彼女が着ればよく似合っていると素直に思える。

派手すぎず、露出もないそれは、彼女を表しているような気がして、他のドレスよりも好ましく見えた。

どんなに高価なドレスでも、どんなに美しい装飾品でも、似合っていないかどうかにもならないのだ。

「これを機に、普段からドレスを着たらどうだ？ それくらいだっ

たら動きやすいだろう？」

「アルバート様にも同じようにお返しいたします。いつも正装して
いては？」

ちくり、と返され眉を寄せた。

こんな堅苦しいもの、いつも来ていたらいつか酸欠になる。動き
にくい上に馬に乗るのも苦勞する。

ついでに言えば、剣も儀礼用で実用的でない。何から何まで不満
だ。

「無茶を言うな」

「でしたらアルバート様も言わないでください」

不機嫌そうに返す彼女の説得を諦めるように首をすくめた。毎度
似たようなやり取りをしているが、全く進展しないとは一体どうい
うことだろう。

何とかならないものか、といつもは動きやすい男物の服を纏って
いる彼女を見つめた。

反対に彼女は視線をそらしたまま、言葉を紡ぐ。

「せっかくの夜会をどうして途中退席なさるんですか？」

「つまらないからだな。単純に言う。非常につまらん。情報交換
の場としての価値を認めざるを得ないが」

それ以外の役に立とうはずもない。

情報のやり取りだけなら、もっと単純な方法があってもいいだろ
うに。わざわざ夜に、しかも派手な格好をする意味も分からない。

無駄の塊だ。

「お嬢様方のお話なども、楽しみ方の一つだとお聞きしましたが」
「興味ない」

遠慮がちに問いかけてくる彼女の言葉に被せるように言った。

そんなものに、まるで興味はない。飾り立てられたドレスも、美
しく結い上げられた髪も、所詮それだけに過ぎず、意味をなさない。
無邪気を装いつつ、しっかり組み立てられているのだろう策略に
嵌っているようなあの感覚も好きではなかった。

まるで、品定めされているようで。

「オヒメサマに興味ない。そんなものに現を抜かす暇があるなら、ここへ来てお前が淹れてくれる茶を飲みに来る」

自分がどういう位置にいるのか、自覚はしているはずだ。

国王の次男であり、体の弱い兄に次いで王位継承権を持つ。病弱な兄が亡くなれば、国王になるというのも知っている。

彼女らもそれをよくよく知っているから群れるのだ。

第一王子に嫁いでも、一生の安定は得られない、と。

「俺はリゼットと話している方が落ち着く。それに、可愛い女の子と話すのが夜会の楽しみ方と言うなら、今も同じようなことをやってるしな」

からかうように後半部分を付け加えると、夜目にもはつきりと分かるくらいに彼女の頬が赤みを帯びる。

夜会に出ているお嬢様方には絶対出来ない反応だ。顔を真っ赤にさせて、何も言うことができず硬直したままになるなんて。

「夜会に出るより、ずっと有意義だ。そう思わないか？ リゼット」

言葉になってない抗議を受け流し、その両手を取って一回転してみせる。遠くの方で緩やかな音楽が流れていた。

06話 宴サボリの常習犯な王子（後書き）

無自覚のタラシと言ったら怒られるかもしれない。

07話 ダンスをしようか

ゆるゆる流れる音楽にあわせて、ゆっくりとステップを踏み始める。放心状態の彼女を無視して、ただ拙いステップを刻む。

ダンスをしようか ―それも悪くないだろう―

幼い頃に出会った彼女は、少々知識欲がすごかった。

特筆すべき項目は薬学であるが、その他のことでも彼女は大抵興味を持つ。頼られるのが嬉しかったあの頃は、自分の持ち得る全てを彼女に教えた。

礼儀作法、王宮史、狩の仕方まで。

その中にはダンスも入っており、踊るだけならどの令嬢にも引けはとらないだろう。

今ではすっかり頼られることもなくなってしまったので、本を貸す程度のことしかできないわけだが。全く、その知識欲には恐れ入る。

自分にはどうなったってないものだ。断言できる。

「リゼット。ステップを踏まないとそのうち足を踏んでしまう」

「その前に、ダンスをお止めください。こんなのっ」

かろうじて我に返ったらしい彼女が声を上げるが、聞こえないふりをしてステップを続けた。

しばらく無言の攻防戦が続くと、彼女は諦めたように合わせてきた。

呆れたのか、はたまたこれ以上このままでは足を踏まれかねないと危惧したのかは分からないが、こちらにとって好都合であることに変わりはない。

「そう不機嫌そうにしないでいいだろう？ 久しぶりに躍っているのに」

闇に紛れてしまいそうな紫の瞳は、それでもやはり月の光を受けて鮮やかに輝く。

今それは怒りの色を示していたが、変わらず美しかった。

「アルバート様、どうしてダンスなんて。……庭師の制服なのに、私なんて」

ひらりひらりとわずかに膨らむその服は、確かに夜会には適していないだろう。

しかしここはそもそも夜会会場でも何でもないんだから、別に気にすることでもない。むしろその簡素さは逆に好ましいとさえ思っているのに。

動きやすく、無駄の一切ないそれは、まるで彼女自身のように愛しくさえある。

「それにしても、上手くなったな。リゼ」

つい昔の愛称で呼んでしまうのは、あの頃が懐かしすぎるからだ。まだずっと身長も低く、足元が危なっかしく思っていたあの頃。思ったように足が動かず、何度もこけそうになった彼女を支えた。

それでも彼女は泣かず、諦めようとしなかった。

普通に生活をしていれば、彼女には一生なんの役にも立たないものなのに。それでも、少しずつ練習を重ねた。

「足が覚えているようです。今思えば、覚えなくてもいい知識でした」

少しだけ沈む声に『違うだろ』と口を挟めば、彼女は驚くほど目を見開く。

まとめ損ねた後れ毛が、顔にかかって影を作った。幼いと思っていた顔立ちが、それだけでぐっと大人っぽくなる。

確かに、役に立たない知識だった。だからといって、まるきり無駄な知識ではないはずだ。最初から無駄な知識だったなどと、考えたくもなかった。

「リゼが覚えておいてくれたから、今こうやって躍れるんだ。俺はそれが嬉しいし、楽しい。教えてよかったって思った。

それも無駄だと、お前は思うか？」

「いいえ……」

——ただほとんど、使うことがないと思っているだけです。

そう零した声は小さかったが、確かにそう聞いてそれに関しては何も返せなかった。

右へ左へ、ふわふわと音にあわせて躍るそれは穏やかで、心地よかった。

彼女がいれば、夜会にだって一晩中出て、躍り明かせるような気がした。暇さえ、彼女となら感じないだろう。

妹のように見守り、教え、過ごしてきた彼女なので、話すことが尽きることもないだろう。

この前植えたという新しい葉草も、新作の茶菓子の感想も、街で評判の舞台の噂も。

話すことは考えれば考えるだけ出てきて、少しおかしくなった。

貴族のお嬢様との会話は、あんなにも退屈なのに。

「アルバート様は、変わり者なのですね。きっと。こんな私の方がいいなんて」

曲の拍子が一変する。穏やかなそれは一気に激しくなる。

目まぐるしいその音に後押しされるように、足の動きを早めた。

それと共にゆったりと取っていた彼女との距離も縮まって、一瞬彼女の手が強く握られた。

しがみつくようなその動作に、コトリと何かが動く気配がした。

「変わり者？　そうか？　別に普通だと思うが」

「あっ、アルバート、様」

付いて来れなくなり始めた彼女が声を上げるが、止めるつもりはなくまるで抱え込むようにして回る。

今自分の中にあったその予感から、目を逸らすようにその腰を攫って回り、笑い声を漏らす。

もう音楽にあわせる気もなく、くるくると回り続ける。

「アルバート様！！」

「いや、あまりにも一生懸命だから、つい」

やっとその手を離すと、彼女は逃げるように距離をとり、恨めしそうにこちらを見た。

速すぎた回転のせいか、わずかに紅潮した頬が見える。それを見て笑えば、今心の中になった『何か』さえ霞んで、その気配さえなくなってしまう。

思い違いだったのかもしれない。

「リゼット、怒ったか？」

「怒っておりません！！」

——彼女を力いっぱい抱きしめて、一生離したくない、なんて。

07話 ダンスをしようか（後書き）

自覚しそうでしない。でも甘やかしまくる。アルってそういう人間。

08話 落ちる臉も格闘中

一人で東屋で過ごして、初めての発見だった。……話し相手がないと、ここは随分昼寝に適している。いや、適しすぎて不都合なくらいだ。

落ちる臉も格闘中　―待ちくたびれた。だけど退屈じゃない―

今日ここに、彼女はいない。

今日の朝、何気なく手に取った書類で初めて、東屋の管理人たち対象の会議があると知った。

詳しく聞けば、王族や貴族への対応に不備はないか、などということ話を話しているらしい。

彼女のことだから、きっと何も発言しないんだろうが。

彼女は目立つのを著しく嫌うのだ。あんな王宮から離れた、しかもおどろおどろしい噂の絶えないところに行くのは、本物の物好きだろう。

そう思われている方が何かと便利なので、こちらからも口止めしている。

この王宮にその手の噂はごまんとあるので、誰もその真偽を問おうとしないのだ。問うだけ無駄だと思っているらしい。

「ここがばれると厄介だしな」

頬杖をつきつつ、そう呟く。

唯一と言ってよいこの隠れ家がばれば、その日から毎度のように見つかってしまうだろうし、何より壁を直されては困る。

大体彼女が若くして管理人としていられるのも、誰も来ないと皆が知っているからだ。

王子が来ていると知れば、ここの管理人はもっと慣れた人間に変わってしまうだろうことは簡単に思い至った。

適度に手を加えられ、季節の花が咲くこの風景も、ごてごてした王宮仕様になるのかもしれない。

王宮の中心近くの管理人がしっかりと手入れをした、格式高い風景も嫌いではなかったが、どこか人の温かみを残すこちらの方が自分好きだ。

季節によって印象を変えるこの東屋からの風景は、表情豊かな彼女そのものだろう。

暇を持て余し、欠伸を一つかみ殺す。

こんなことなら帰ればよいのだろうが、今日はせっかくの休日サボったわけではないなのだ。一目くらい会う機会があってもいいと思う。

他にも会う理由はあったが、それは別に後日でも構わないものであるし。イスへ腰かけ、読みかけの本を出していよいよ本格的に待つ態勢に入る。

早ければいいんだがな、と呟きつつ、ページをめくり始めた。

あの会議が無駄に長いことで有名なのを、すっかり忘れて。後半刻もしないうちに帰ってくると思っていた。

彼女は書置きを残して行かなかった。

それは俺がここへ来ないと思っていたからだろう。もちろん、いつもなら絶対に来ない時間だし。それについてとやかく言うつもりはない。言うつもりはない、が。

「ここはどうやら読書に適していないらしいな。どうやら」

本を読み始めてすぐ、そのことに気が付いた。

やたら暖かいし、落ち着くし、最適だろうと思っていたのに、蓋を開けてみればそれは睡魔との闘いだった。

剣を振るい、汗を流すことも好きだが、読書をすることも好きなので、まさか睡魔に襲われるとは思ってもみなかった。

読んでいる本の内容も面白いはずなのに、どうも瞼が下がる。

話し相手がいると別なのだろうが、自分以外がない今、ここはとても静かで風のざわめきしか聞こえない。

リゼットが偶に舟を漕ぐのも頷けた。うとうととしてくる意識を

しっかり持とうと努力するも、やることがないのでどこかぼんやりとしたままだ。

もう文字を追う気力もなくなって、本をしまった。

「リゼット、遅いぞ」

独り言を口に出しても、その眠気は一向に治まる気配を見せず、うつらうつらと首が揺れていることが分かった。

逆らえないそれに目を閉じれば、ふわりと花の香りが強くなり、風の音がより身近に感じた。

王子が外でうたた寝なんて、前代未聞だろうと己を笑うが、もう意識を手放しかけていた。

「アル、バート、さま？」

確かめるようなその声に、意識は一瞬で引き上げられた。

それに従って目を開けば、目の前に驚いた彼女がいる。

「遅かったな」

「いらっしやると分かっていたれば、あの会議にも出なかったですよ」
いてもいなくても変わりませんからね、とイタズラするような顔でこちらを見つめ、次いで少し真剣な顔で首を傾げた。

「寝てらっしゃいましたか？」

「いいや。かろうじで起きてた。……すごく眠いが」

髪をかきあげて笑えば、安心したように息を吐かれる。

それから困ったように眉を寄せ、彼女はこちらへ近寄ってきた。
まだ頭が働いていないらしく、ぼんやりとそれを見つめる。

「外で、うたた寝しないでください。王宮から少し離れていますから、警備も万全とは言えません。」

私がいれば盾になるくらいしますが、今日はいませんでしたし」

「リゼットを盾にするくらいなら、大人しくやられる。うたた寝しないのが一番得策だとは思うが」

思ってもみないことを言われ、少々面を食らった。

今まで一度も思いつかなかったが、本来それはごく普通の考え方なのだと気付き、面を伏せる。絶対、させたくはないことだが、彼

女ならやりかねないと思うと心の底から冷えた。

そんなことになるくらいなら、自分が傷つけばいい。

「……やられてはいけません。アルバート様はこの国の王子ですから」

「リゼットはこの東屋の管理人で、俺の友人兼妹役だろう？　そこに護衛の役は含まれていないんだ。

盾になるなんて、言うもんじゃない。もう、二度と言うな」

半分冗談交じりに軽い調子で笑うが、それはこちらが真剣になればなるだけ、彼女が意固地になるからだ。

それを見越してか、彼女は頷かなかった。

09話 髪飾りを贈る（前書き）

順調にストックが減ってます。

09話 髪飾りを贈る

思慮深い、とかそういう類の褒め言葉は、今までに幾つかもらったことがある。しかし、実際ここまで頭を悩ませたことなど今までなかった。これも思慮のうちに入るんだろうか。

髪飾りを贈る ―君を想って選ぶ―

彼女が喜ぶものは知っているつもりだ。

『葉学の本』

これに尽きる。

しかし今回ばかりはそれを贈るわけにもいかない。というか、そもそも『何かを贈ろう』と思ったわけではなく、『あれを贈ろう』と物が始めに決まっているのだ。

だから余計に難しいと言えば難しい。他に選択肢はないわけだから。

きっかけは先日の夜会だった。

普段縛るようにまとめている髪は、そのときでさえ同じように薄い布でまとめられていた。

せめてリボンにすればいいのに、と零せば、汚してしまうかもしれないから、とあっけらかんと笑われた。

確かに、と頷く自分も自分ではあるが、年頃の少女がそれではあんまりだろう。

そこで考えた。いつもの礼に髪留めを贈ろう、と。

とは言え彼女のことだ。華美なものは引き出しの肥しになる可能性が大きい。

……そもそも受け取ってもらえないかもしれない、と今しがた気が付いた。

「……面倒だな。贈り物というのは」

「殿下もついにそんな年頃になりましたか」

ぽつんと呟けば、側近であるノース・ハノーバーは安心したようにため息を吐いた。

ノース・ハノーバーは父の元侍従で、信頼厚い功臣。そして彼自身とは血の繋がりはないが、血族でもある。血筋に頼らない優秀な人材だが、その実態は王族に振り回される星の元に生まれた超絶苦労人だ。

若い頃は父に、年老いてからは自分に、そして彼自身の息子にさえ振り回されている。気の毒には感じるが、脱走を止めようとは思わない。

「ノース。勘違いだ。友人に髪留めを贈ろうとしているだけであつて」

「髪留めですか。相手の髪色をお聞きしても？」

弁解しても無駄だ、と思ったときはすでに遅く、一人で『これを機に落ち着いてくだされば』とか、『どこのご令嬢ですか？ 王への挨拶は？』とか妄想を膨らませている。

ノースには悪いが、放っておくのが一番だろう。

この苦労体質の側近の夢は、俺の子供の顔を見ることらしいので、仕方ないのかもしれないが。

「で、何が面倒なのですか？」

「相手はそういうものを好んで身に着けようとしなない。手軽でなるべく受け取りやすいものを、と思っているんだが」

できれば壊れにくく、長く使えるものがいい。

派手ではないが少しでも女性らしいものを選びたい。植物が好きだから、そういう意匠のものがいいだろう。

そこまでは考えられるのだが、いざ求めるとなると、どうしても迷いが先に立つ。

果たして受け取ってくれるのか、と。そんな考えても仕方のないことばかり。

「珍しいご令嬢ですね。装飾品をあまり身に着けないとは。」

そうですね、我が愚息を使つては？ お恥ずかしい話ですが、そういうのが得意なのはあやつでしょう」

ああ、と呟く。

頭に浮かぶのは、長い付き合いの悪友だ。淡い茶色の髪と瞳こそ父親に似ているものの、その容姿は王族出身の母親譲りで整っている。

そして苦勞人でありつつ真面目な父とは、正反対の性格を持っていた。

物怖じせず、探究心は旺盛で気さく。ついでに悪巧みが好き。自分の性格も似たり寄ったりとのことなので、似ている者同士馬が合うということか。

背格好や顔立ちが似ているので、よく身代わりを頼む。

が、髪色はこちらの方が少し濃いのが唯一の難点だ。

「そうだな。レオンに頼めば、間違いはないだろう」

「何か気がかりでも？」

この手のことに興味のない自分より、レオンに任せた方がよいことは分かっている。

『恋人の数？ 数えたことがないから分からないけど、近衛兵より多いよ』（近衛兵は普通、三十人程度）と笑って答えるようなやつなので、まず失敗はないし、リゼットの性格を伝えれば、喜びそうなものを誂えて来るだろう。

しかし。

「やはり、自分で選ぶことにする。私がお礼をしたいんだから」

ノースの前では、『私』だ。

間違えてはいけない。今は『アルバート・シーモア・フミラトイ』。この国の第二王子であり、文武に長けた優秀な王位継承権第二位の人間。

少し困ったところもあるが、概ね人気で将来を嘱望されているそんな王子様であって、『アル』である俺ではないのだ。

「そうですね。職人を呼びますか？ 今丁度、お后様のところに来

ていますので」

「そうだな。頼む」

父の後（母だが）含む女人達はどれもこの手のものが好きらしい。リゼットに見習わせたいと思うような知識量だ。ドレスの流行や数々の宝石の名、果てはそれにまつわる御伽噺まで。

よくもまあ、それだけ、と思わずにはいられないものだ。リゼットに言っても、ただの知識としてでしか認識されないのだろうか。

「今、そのご令嬢のことを思い出していらっしやいましたね。殿下」
「どうしてそう思う？」

思いもかけなかったその言葉に慌てて返せば、ノースは優しく微笑みながらこちらを見つめる。

過保護な保護者兼側近は、こちらの成長を見つけたとき、このように笑うのだ。

慈愛に満ちた、父性の塊のような人間の目で。まるで我が子を見るような目で。

「すぐに分かりますよ。殿下は分かりやすい。今の殿下はとても優しく微笑んでいらっしやる。どれだけその方を想っているのか、この私にははつきりと分かりました」

誤解だ、と言ったところで譲らないのは明白だ。

それに彼女を『想って』いるのは事実だ。そう思って、口を閉じた。

09話 髪飾りを贈る（後書き）

アルの友人であるレオンもたくさん出していきたいと思う、今日この頃です。

10話 その髪を飾るのは

この髪には何度も触れた。褒めるために、慰めるために、何度も撫でた。だがこんな風に触れたことは、ただの一度もなかった。

その髪を飾るのは ― 一生これだけでいいのに ―

「あの、アルバート様。これは？」

「日頃の感謝を込めて、というよりは、お前に少女らしさを身に着けてほしくて」

彼女の手には箱を落とすと、案の定彼女は首を傾げた。

職人に『箱も作りましようか？』と聞かれたが、そんなことをするといよいよ引き出しに仕舞いこんで、使わなくなりそうだったので、厚紙の簡素なものに入れた。

こちらの発言の真意を測りかねたらしい彼女は眉を寄せるも、『開けないのか？』というこちらの言葉に恐る恐る箱を開く。

「髪、飾り？」

「そうだな。そう見えてくれると嬉しい」

中から現れたのは、薄紫色を基調とした髪留めだ。

彼女の瞳の色より少し薄いそれは、髪に着ければ瞳をよく映えさせるだろう。モチーフにされている花は『竜胆』で、根が薬にもなるそれは、彼女が好んで育てている花だ。

しっかりとしている造りを前に彼女は首を振った。わずかに眉を寄せている。

「受け取れません」

「まあ、予想はしていたが」

全く、予想を裏切らないにもほどがある。

喜ぶ顔が見たいのに、そんな表情を映さない。おまけに困ったような表情さえ浮かべられて、流石に落ち込みそうになった。

「リゼットは、この花が嫌いかな？」

「いいえ、大好きです。とても、キレイ」

そつと言われた言葉に、この意匠が気に入らないわけではないらしいと安心する。

なら後は何の問題もないだろう。

「派手でもないし、丈夫に作ってある。宝石の類もついていないから、少々乱暴に扱ったところで壊れない。しっかりお前の髪を留める。それだけのものだ」

「でも、私は庭師ですからどこかに引っ掛けるかもしれないですし、土で汚れるかも。やはり受け取るわけにはっ」

それに、高価そうだし、と付け加えられる。

強情なのはよくよく知っているが、ここまでとは、と思わずため息を吐きたくなる。何が悲しくて、悩んで選んだものを付き返されなければいけないんだ。

「台座分だけだから、そこまで高いというわけでもない。お前の場合、もう少し自分を飾るべきだ。これはその手始め。

いつも旨い茶を入れてくれるお礼だ。ああ、心配なら無用だ。これは水でも洗えるし、長くもつものだから」

着ければ着けるだけ味が出るらしい。十年以上使えるぞ、と繰り返し説得すれば、少しだけ心惹かれたらしい。

「ほら、着けてやるからじつとしてろよ。まとめにくいからな」

将軍仕込みの素早い動作が、こんなときに使えようとは思っててもみなかった。

彼女の頭を固定すると、抵抗もなくなる。柔らかな栗色の髪を掬い、髪留めで固定した。これで大分動きやすくなるだろうし、緩むこともないので安心だ。

「悪いな、リゼット。俺の周りに『紫』を持つ者はいないんだ。

それに、これは俺がリゼットに贈りたいと思ったものだ。他の者にやれない。お前が受け取ってくれなければ、使い道がないんだがな」
「アルバート様が、そうおっしゃるなら。……ありがたく、いただ

きます。ありがとうございます、アルバート様」

ちらり、と見えた横顔は、ほんの少しだけ緩んでいた。

上気した頬で気に入ったことを知ると、もっときちんとまとめてやればよかったと思い、髪を一度ほどいた。

「リゼ、櫛」

「へ？」

「櫛だ。きちんと結ってやるから、櫛」

思わず昔の呼び方に戻った。

手を差し出せば、おずおずと出される。黒くて安っぽいそれは、使い勝手のよさだけが追求されたもので少女の持ち物ではない。

むっと眉を寄せて次の機会には、櫛と鏡を一緒にして贈ろうかと計画する。櫛を受け取って髪を梳いていると、つい五、六年まではこれが日常だったと思い出す。

こうやって髪を結うことも頭を撫でることもその頃は普通で、何らおかしいことはないと思っていた。今の二人からは想像さえできないのに。

「相変わらず、器用ですね」

「そうか？ 久しぶりだから、案外緊張してるんだが」
本当は、それだけではないけれど。

こんなふうに、彼女を『女の子』だと思って接するのは初めてだから。ずっと妹として接してきていたから。妙に緊張しているのは仕方のないことだと言い聞かせた。

「ありがとうございます。私でも、女の子らしくなれた気がします」
「お前の瞳に負けはしないかと心配してたんだが、杞憂のようだったな。よく似合ってる」

こちらを向いて礼を言う彼女に笑いかけ、改めて彼女を見た。

濃い色の髪に負けて、全く目立たないのではないかと思っていた髪留めは、少し大きめに作ったおかげで存在感がある。

しかし、かと言って目立つかと問われれば、そんなことはなく控えめに彼女の髪を彩っていた。思っていた以上に自分の見立てが正

しく、少々浮かれた。

だから、気付かなかった。

その格好も、表情も、彼女が子供でないと示しているのだと。女の子、でもなく、すでに女性になりかけているんだと。

そんな当たり前のようなことに気付かなかった。気付かない、ふりをした。

10話 その髪を飾るのは（後書き）

一話一話が短いながら、少しずつ進展してきている気が……しま
せんかね、やっぱり。

10. 5話 贈られたもの（前書き）

髪留め贈られて、ちょっと戸惑うリゼット。こんなに恋心駄々漏れなのに、どうしてアルに届かないんだ！

10. 5話 贈られたもの

一日の仕事が終わり、ほうと息を吐いて自分の部屋に入った。

官舎の中にある、ごく狭い一室。庭師としては紅一点なので、個人の部屋になりつつあるその部屋に入ってまたため息を吐いた。

祖父に与えられていた一室はもっと立派だったような気がしたけど、<ここに>来た当初は思っていた。今なら分かる。

単純に、階級の差だと。

確かに、祖父はあの森の管理人であった。他にも理由はあるのだが、これは公にできない理由だから、あまり部屋とは関係ないのかもしれない。

そんなことを思いつつ、自分の体にまとわりつく男物の衣服を脱ぎ捨てた。これを着ている間、私は私自身が年頃の少女であるということを忘れることができるのだ。

一時、忘れることができるだけだ。

何をするのも億劫で、ベッドに横になりごろりと寝返りをうとうとする。

しかし髪がベッドに引っかかり、上手くいかなかった。疲れた体を叱責して体を起こすと、自分の髪が肩に触れた。髪留め、ああそうか。

「こんな、素敵なもの。本当に貰ってよかったの？」

今更ながらその思いが強くなってくる。

しかしあの方の顔を思い出せば、その迷いも無用なのではないかと思いはじめた。あの方が自分のことを思ってくれた。

それだけで、心臓が止まってしまうくらい嬉しい。

どうしよう、と口の中で呟いて、頭からそっと髪留めを引き抜いた。紫色のそれはとても綺麗で、心惹かれたのは事実だった。

花をあしらった意匠はとても繊細で、宝石なんかついていなくても十分に高価そうなのが分かる。

自分には不釣合いのものだったが、使えば使うほど味が出るといわれたので、使いたいと思った。

十年間、ずっと使い続けられいずれ自分にも合うような気がした。たとえ彼が、誰かと一緒になっても、これさえあれば救われる気がした。

結ってくれた手は、相変わらず優しかった。

まどろんでしまいそうになるくらいそっと、私の髪を掬ってくれる。

相変わらず器用なその手先に笑ってしまう一方で、自分の立場が変わらず妹であることを知った。知っていることだったが、改めてそうされるとやはり傷ついている自分がいた。

『相変わらず、器用ですね』というセリフは、半分嫌味だったのに、彼は気付いていないようだった。

つまらない感情を彼にぶつけてしまったことに後悔したが、伝わらなかったのならいいと思う。

「リゼットー。入っていい？」

手の中で髪留めを弄んでいると、外からノックと声が聞こえた。身近にあった服をまとった。少女らしいその服は、両親から贈られたものだった。

「いいよ、どうしたの？」

声を聞けば見知った人間の声だったので、すぐに声を返す。すると扉が開いて、印象的な赤毛が覗いた。

その中から青い目が覗き、私は微笑む。この王宮で、最初にできた友人だった。

赤くて長い髪は、遠くからでもよく分かってとても綺麗。自分にはない色合いに惹かれた。

「どうしたのってー。理由がなく来ちゃダメ？」

「そうじゃないけど……」

小さい頃はずっと、王宮の中で彼と遊んでいたから、友人ができた試しもなかった。祖父が亡くなると両親は王都から出てしまった。

私は私で薬師になりかったから、勉強ばかりしていたし、薬師を諦めた後も庭師になろうと本を読み漁っていた。

同じ年の女の子と遊んだことなんてないから、いまいち距離感が掴めなかった。

「リゼット、珍しいー。あなたが髪留めなんて！　すごく綺麗。目の色に合うし、細工も素敵ね」

「あ、うん。友人が、お茶を淹れてくれるお礼にっ」

彼女には、アルバート様のことを言えなかった。

当然のように、この関係は秘されるべきことだから。だけど、問われるままに彼のことを何度か話題に出したことがある。

幼い頃に知り合って、つい最近再会したのだと。とても、優しく賢くて、いつも妹のように可愛がってくれるのだと。

「あ！　例のお兄様ね」

彼女は彼のことを、『例のお兄様』と呼ぶ。

何でも、聞いた限り高貴な雰囲気があるからだとか。確かに、間違っではないのだが、アルバート様が王子だと知っている私にしてみれば不敬以外の何ものでもない。

「その呼び方はやめてちょうだい」

「でも髪留めを贈るなんて、その方、本当にリゼットのことが好きで仕方がないのね」

ドキッとするような言葉を、時々友人は何でもないように口に出す。

私が、彼に恋していることを知っていて言っているとは思えないその言い方に、毎回息が止まる思いがする。

「確かに、大切にしていただいてはいるけど」

「違うわよー。リゼットは何も分かってないのね」

殿方が女性に装飾品を贈るなんて、理由は限られてるのよ？

「そっ、そんな方ではないもの！」

顔が赤い。

ばれているのは明白らしい。こんなに分かりやすいのに、どう

してアルだけ分らないの！

叫びだしそうになりながら、手の中の髪留めを握った。こんなに嬉しいのは、私だってどこかで期待しているからだ。

愚か者だと、誰かに罵られたい。そうすれば目が覚めると思う。でも、彼があまりにも似合うと言ってくれるから。

「でも、褒めてもらったんでしょう？」

「それは、そうけど……でも。本当に私、妹みたいなので。彼は、すごく優しい人で」

優しいのは、彼がお兄さん役だからだ。

ずっと変わらず、そう思わなければいけない。ばれてはいけないのだ。誰にも、彼にさえ。この友人にさえ。

ばれてしまえば、今のようなお茶会はできなくなってしまう。

贈られたもの――それは、あまりにも唐突で――

少女らしきなんて身につけなくてよかったのだ。身につけてしまえば、私はその中に恋を宿す。

届かない想いを、何度もその身に刻む。こんなことなら、ずっと男物の衣類でいいとさえ思った。どうか私の中の『女』を見ないで。

10. 5話 贈られたもの（後書き）

アルは朴念仁。女心の理解度はほぼ0！ レオンに『君、男が好きな？』とか偶に聞かれて、『何でそうなる？！』とか言っちゃう。

読書と武術とリゼットにしか興味がないだけなのに。

11話 馬で遠乗り（前書き）

レオンさんがちょっとだけ出てきます。

11話 馬で遠乗り

身に纏うのは暑さをわずかに孕んだ風で、その勢いはマントをひつきりなしにはためかすほどだ。その激しさに負けた彼女は、ただ身を固めて息を止めていた。

馬で遠乗り ― 逢引というよりむしろ子守―

きっかけ、というには少々普通過ぎる出来事が今回の始まりだ。つまりは兄の体調がよく、こちらの仕事がつっそりと減ってしまった。いつも任せてばかりで悪いから、と任せられていた仕事の半分以上を取られてしまったのだ。

事務方がどちらかと言えば苦手なこっちは違い、兄は大変出来がよい。ゆえに遠慮なくもって行ってもらった。

そしてその足で馬小屋へ行き、自らの愛馬の体調を確認。

大切な馬なので、結構な頻度で見に来るが、いつも来られるわけではない。いつもは人に任せている。その毛並みはいつもどおり美しかった。

黒っぽい毛の艶やかさは王宮でも有名で、こちらとしても鼻が高い。

芸術肌の兄には理解されないようだが。

「ノース、今日は森へ入ってもよかっただろうか」

「はい、殿下。奥へ入らなければ心配ない」と

天気もいいし、風もそんなに暑さを孕んでいない。絶好の遠乗り日和だ。

一番に思い出したのは森（森、と言っても王宮内だが）の中に湖で、その周りに珍しい薬草がたくさんあった。

それにあそこは思い出の場所でもある。

彼女を連れて行くにはうってつけだろう。そう思って馬に跨った。

喜ばしいことに、ノースは乗馬が苦手なのだ。

「今日は供をつけずに森へ行く。誰も近づけさせないでくれ。任せただ、ノース」

「え、あっ。お、お待ちください、殿下!!」

呼びかける声はすでに遠い。

ぐんぐんと速度を上げる愛馬は、乗り手の意思を正しく理解していた。大して手綱を引いたわけでもないのに、目的地へ向かって行く。

これから間もなく一人の男が忍んで町へ出ようとする。

近衛兵もノースもそいつを追いかけるだろう。『森へ行くというのは嘘で、街へ行くのが目的だ』と思って。残念ながらそれは王子ではなく、王子の影なのだが。

「レオンに借りを作ったが、まあいいだろう」

一旦木が生い茂った林に愛馬共々身を潜め、耳を澄ます。

ほどなくして野太い声が遠くの方で響いた。護衛隊の追尾はもう少し遅くなると踏んでいたので、思わず唸った。流石と言うか、何と言うか。

レオンに囨を頼んでおいてよかった。

後に起こるであろう、彼からの詮索も、あの手強い兵の相手に比べれば易しいことだろう。

『外だ！ 森ではない。街へ先回りしろ！ 見失うな!!』

「街へ降りて、奴らがレオンに勝てると思えないが」

レオンの持つ街の知識はそこら辺の庶民よりずっと多い。

街の出身ではあるが、ほとんど戻ることのないリゼットなんて足元にも及ばないことだろう。

ましていいところの坊ちゃん中心で、四六時中王宮の中で訓練している近衛兵を撒くなんて、彼にとっては朝飯前。

ニタリ、と笑って任せておいてください、と言ったあの顔が忘れられない。

計画を立てたのは随分と前だったのに、ペンで三回机を叩くとい

う合図にも、素早く目配せで反応してきた。

さすが悪友、もとい影武者殿だ。全く恐れ入る。

「さて、そろそろリゼットのところへ行くか」

林から出て再び愛馬に跨る。ここからあの東屋は意外に近いのだ。そしてその東屋は王宮の端にあるので、森にも近い。いい場所だ、と勝手に思いつつ馬を走らせた。すぐに林が見慣れた花壇に変わっていく。

東屋の屋根が見えるところで愛馬を休め、花や葉草を踏みつけないように注意深く歩かせた。

元々賢い馬なので、すぐに察したらしくすすい土の部分歩いていく。首を叩いて労うと、嘶きを一落とした。

そして目的の人物を見つけると、最小限の動きで迫る。その時間はわずか数秒で、その間リゼットは一度として後ろを振り向かなかった。

「リゼット」

「へ？ って、わぁっ」

振り向いた彼女を馬上から掬い上げる。

あまりの驚きで動かない彼女に救われて、楽に引き上げることが出来た。すっぽりと腕に収まる彼女はやはり小さくて、先ほど抱き上げたときの軽さを思い出した。

比較対象がないので分からないが、『女』という生き物の重みは、こんなにも心もとなく、不安を煽るようなものなのだろうか。

言い知れない揺らぎを感じて、思わず彼女を囲う腕に力を込めた。

「アルバート様っ」

「久しぶりの遠乗りだ。飛ばすぞ」

一応忠告を口に出す。

彼女はそれを当然知っているので、こちらが言う前に手綱をきゅっと握った。彼女を落とすことだけはないように、体と腕でしっかりと挟み込む。

何度かすでに遠乗りしたことがあるので、まあ大丈夫だろう。

「口、開くなよ」

そう言ってもあの將軍仕込みの乗馬は、本来戦場でのみ発揮されるべきものだ。

少なくとも少女を乗せてやることではない、ということは分かる。しかしゆっくり走れば真面目な彼女らしいといえばらしい、ちくちくとした小言が降って来るに違いない。

せっかくの遠乗りで、それは嫌だ。

できるなら到着した後にしてもraitたい。（というか、してほしくない）

そんなことを考えて、少し早めに馬を走らせ始める。彼女曰く『荒々しいと言うしかない』らしい乗り方だが、これでも大分抑えているつもりだった。

ふと下を向けば、文字通り彼女は固まっっていて、そんな彼女を見つめると、苦勞して側近を撒いた甲斐があつたと思わざるを得なかった。

11話 馬で遠乗り（後書き）

王子とその影武者は、基本的に周りを振り回すことが好きです。

12話 思い出の場所へ(前書き)

過去にかすったり

12話 思い出の場所へ

勉強に飽きればいつもここへ来ていた。親や兄、側近や悪友にさえ教えていない、とっておきの読書場所。それを知っているのは二人だけ。

思い出の場所へ――湖のほとり、そこで出会った――

馬を止め、抱き上げるようにして下ろすと、『相変わらず、ですね』と疲れたように声が落ちてきた。

わざとらしく首を傾げて見せれば、むっと眉を寄せられる。

「速さが足りなかったか？」

「アルバート様、ご冗談をおっしゃらないでください」

ため息を吐かれて反論されてしまい、謝る代わりに頭を撫でようとする。

しかし今更だが、彼女の髪はきちんとまとめてあり、そうすることができないことに気が付く。

仕事の邪魔にならないように、とまとめられている髪を留めているのは、先日贈った紫の髪留め。馬に乗せたときにもあったのだろうが、今の今まで気付かなかった。

こういうところでレオンとの違いを痛感する。モテる男は伊達ではないのだ。少女達が持つ一つ一つを褒めるその着眼点に恐れ入る。持ち物一つ褒めるのは、気を遣うし面倒だと思っていた。礼を欠かなければいいんじゃないか？　と思っていた自分が申し訳なくなる。

「使ってるんだな」

「はい。使ってみるととても使い易くて。アルバート様が来たら、すぐお礼を言おうと」

思っていたのに、いきなり馬に乗せられるし、と不機嫌そうに続

けられた。

その言葉からポロポロと敬語が抜け落ちていき、その原因がこの場所にあるのだと唐突に気が付いた。

「大切に、使います。ずっと」

髪留めに手をやりつつ笑う彼女を見て、目を見開かざるを得なかった。

年頃の少女らしくないと、そう思っていたのにこちらに向けられた笑顔があまりに『少女』だったから。

少女、というより女性と言っても差し支えなかった。

それくらいの笑顔に、小さな不安感が募った。もう彼女に、安易に触れてはいけないという、そんな感覚。

「あと、これも渡そうと思ってました」

「ん？ 何だ？」

お礼と言うほどでもありませんが、と前置きされて懷から出てくる紙のようなそれ。

手渡されるままに受け取って、初めてその使い道を知る。彼女らしく、俺に必要なもの、使いやすいものだ。

「葉、か」

「ここへ来て、よく本を読んでいらしたから」

薄い青紫の紙に張られているのは、今彼女の髪を飾っている竜胆の押し花だ。

しっとりとした色合いもそのままなそれは、見ていて彼女の瞳を思い出させる。

「季節はまだだろう？」

「去年のものです。綺麗に出来ていたのでお渡ししたくて」
確かに、と呟いてそれに魅入る。

仕事の合間に読んで、身近に葉がないので閉じてどこまで読んだか分からなくなる、というのはもはや日常茶飯事だ。

昔はここで本を開き、その辺にある落ち葉を挟んでノースに説教されたこともあった。たまたまとても貴重な本だったのだ。

それを思い出して、思わず手にした葉を見て笑った。

「いいお返しをもらってしまったな。思いもかけず」

「昔から、というか出会ったときからお好きでしたよね、アルは」
あっと小さく声を上げて、彼女は口を押さえる。それから顔を赤くして、頭を下げつつ謝罪した。

「あの、申し訳ございませんでした。こんな、一介の庭師が恐れ多い」

「気にしてないし、むしろ嬉しいんだが」

懐かしい呼び方に、胸の奥で燦っていた不安が消えていった。

どんなに成長しても、彼女は彼女で、可愛い妹役の『リゼ』なのだ。大人になったとしても、それが変わることはない。

「なあ、リゼ。戻ろう」

意味が分からない、と首を傾げる彼女に笑いかける。

ここは二人だけの場所だ。他の人間の形跡もなく、あの頃のまま。時が止まったように、変化を止めている。

ここでなら、戻れると思った。

まだ彼女がこちらの身分も知らず、大した敬語も使えなかったあの頃に。

『王子』という身分を忘れ、偶々知り合った『リゼ』という少女を妹のように可愛がっていたあの頃に。

時の流れから逸れた、ここなら。自分も彼女も、一番楽しかったあの頃へ戻り、笑い合えると思った。

ここ以外では、もう元になど戻れないし、元に戻ろうとも頼めない。それが彼女のためにならないことなど、とつくに知っている。だけど。ここだけなら……。

「ここにいる間だけでいい。頼むから、王子として接しないでくれ。俺は、リゼにだけはそんな接し方してほしくない」

「でも、アルは王子です。もう、私はあの頃の子供ではありません。何も知らなかった頃には、もう戻れないんです」

眉を寄せて、泣き出しそうな顔をされて、初めて自分が勝手なこ

とを言っていると自覚した。

自分のことばかり考えて、リゼット自身のこととは何も考えていなかった。彼女なりの考えも、悩みも苦しみもあるだろうに。

今こうして会うことでさえ、彼女にとっては難しいことなのかもしれないのに。

「困らせた、らしいな」

「ちがっ、違うんです。嫌だとかそういうことじゃなくって！ただ、私が戸惑っているだけなんです」

アルは、変わらないのに。

私だけが変わっているような気がする。

「アルが、私を大切にしてくれるように、私も、この関係が大好きだから大切にしたいのに」

方法が分からないと言われて、伸ばしかけていた手が止まった。

そんなこと、自分にだって分からないんだから。どうしたら今までどおり、大切にできるか、なんて。

12話 思い出の場所へ（後書き）

リゼットの『この関係を大切にしたい』は、恋心を見抜かないでほしいということなんですけど。アルにはそこまで伝わらないジレンマ。

方法が分からない。恋心を封印する方法が。

……アルはそんなこと、思ってもみないわけですが。ただアルは、大切にしたいという思いが全て『親愛の情』だと疑ってはいないわけです。いつか、痛い目に遭います。

13話 過去（前書き）

過去話。アルはポエマーになることが、偶にあります。

13話 過去

柔らかそうな栗色の髪。明るい紫色の瞳。ふわりと膨らむ袖から伸びる手が、足首を押さえていた。

唇をかみ締めて、涙をこらえている様子は不謹慎ながら可愛らしく、天使のようだと思ったことは秘密だ。

過去 ― 偶然であれば幸運、必然であれば運命? ―

その出会いはひどく唐突だった。

授業をサボり、側近の目をかいくぐって森へ逃げ込んだ。

剣や弓、乗馬の訓練も、歴史書を読むことも普通に好きだが、かといって長い間していられるかと問われれば答えは否、なわけ。

退屈すぎる日々の繰り返しに、刺激を求めて外へ出た。

前から潜り込んでいた森へ。そこは絶好の隠れ場所で、湖の近くにある開けた場所だ。木陰に体を寄せれば直射日光も遮られ、穏やかな空気に包まれる。

用意していた本を開こうとしたとき、森の奥で小さな呼び声がした気がした。

いや、確かに声が聞こえて、思わず持っていた本を取り落としてしまったのだ。それくらい、驚いた。

「誰だっ?!」

一応の基礎はあるが、まだまだ使いこなしているとは言いがたい剣を抜く。

気休め程度に持たされていた護身用の剣を抜く日がこんなに早く来ようとは思ってもいなかった。

「……けて」

「誰だ、ここは王宮の中だ」

今にして思えば、命知らずな行為だと思う。

命をも狙われる地位にしながら、正体不明の人間に近づくなんて考えられない。しかしあの時は呼び寄せられるように足を進めた。

声の方へ向かって草を掻き分け、その主を探す。

近づいたり、遠のいたりする声を探して、やっと再び開けたところを見つけた。

そして、それと共に声の主を見つけて呆然とする。そこへいたのは不審者でも何でもなく、ただの女の子一人だった。

城下に住む人間が着ているような服を着て、脇に小さな籠を置いて座り込んでいる。泣き出しそうな瞳がこちらを見て、ぱちっと一度瞬きをされた。

「人、いないのかと思っ……。よかった」

庶民の女の子らしい彼女は、足首を擦りつつ息を吐いた。

一方こちらは状況が飲み込めず、一応危険ではないらしいと剣はしまった。しかし最低限の警戒心は解かない。

それくらいは、幼心にも気をつけていた。

「ここで、何をしていた？」

自分より小さな子を相手にしたことがなかった。

ゆえにどう接してよいのか分からず、戸惑いながら声をかける。

小さな子がどうしてこんな森に、しかも奥へいるんだろう。

どうやって入ったのかも見当がつかず、首を傾げて女の子を見た。

どこからどう見たって、『普通』の女の子にしか見えない。まさ

かこんな子が侍女見習いなわけもないだろう。第一服装が違う。それに侍女見習いは森へ入ることなどない。

「おじいちゃん、はぐれちゃって」

「……えっと、君の祖父殿は誰か聞いてもいいか？ いや、君の名から聞こう」

おじいちゃん、が彼女を連れてきたのか。

しかし森へ入れるのは、王宮の中でも決められたほんの一握りの人間のはずだ。

部外者が入る隙などない警備なのだから、もしかしたらこの子は

すぐく身分が高いのかもしれない。

「貴族の人は、皆、人の名を聞くととき、ご自分の名を言わないのです、か？」

訝しげにひそめられた眉と、使い慣れてなさそうな敬語。

こちらを貴族だ、と思っっているらしい。こんな子供に礼儀云々を言われるとは思ってもなかったが、正論だろうと思って口を開く。

「これは、失礼した。俺はアルという。君の名を聞いてもいいかな、お嬢さん？」

「リゼ、です。お嬢さんじゃありません。えっと、アル、さん？」

「アルで構わない」

迷った末に呼ばれた呼び方は新鮮だったが、敬称が好きではないので訂正する。こんなところに来て敬称なんて。

「で、君の祖父殿はどうしてこの森へ入ってるんだ？」

「ここの、庭師だから」

そこでようやく合点が言った。

この森は幾人かの庭師が共同で管理しているのだ。ある程度人手もいるから、身内がいても不思議ではない。

まあ、小さな女の子のする仕事ではないと思うが。

「薬草取りに来て、はぐれちゃって。足も挫いて。……どうしていか分かんなくって、です」

不自然に付けられた敬語に口元が綻ぶ。

自分を王子だと知らず接してくれる彼女の態度は、心の奥を擦るようで少し居心地も悪い。

しかし何とも言えない喜びもあって、つい笑いそうになるのを慌てて引き締めた。

「とりあえず、足の手当てをするか。あっちに湖があるから、そこで冷やそう」

籠を彼女に持たせて掬い上げる。腕の中の彼女はひどく小さかった。こんな子供の腕に収まるくらい小さくて、弱い。

「あの、アル？ 歩くよ？」

「足、痛みが長引く」

その後、森の入り口まで負ぶって行くことになるのだ。

背中の重みは、彼女が生きている証のようだと思った。そして、週に一度、あの森で出会うようになる。

彼女は俺が誰か知らぬまま、森の中でだけ友人で居続けた。その数年後、彼女の祖父が亡くなるまで。友人として、兄妹のような温かくて、安定した関係がずっと、続いた。

彼女の祖父が亡くなり、彼女がこの王都を出るまでずっと。その後一度として出会わなかったが、自分たちはこうやって再会を果たした。

それはとても、素敵な偶然なのかもしれない。

それはほんの少しの間だと感じてしまうくらい楽しくて、毎回別れるのが惜しかった。

自分の身分を偽っている負い目さえ感じなくなるくらい、離れがたかった。

13話 過去（後書き）

こうして、リゼットの脳内にアルヒーローの図式が出来上がっていくわけです。

14話 剣を振るう（前書き）

アルは女性に興味がなさ過ぎて、周りにすごく心配されています、
実は。側近のノースさんの心労は続く。

14話 剣を振るう

兄王子に勝るところが一つでもあるとすれば、それは武芸の腕だろうと思う。体の弱い兄に代わって武芸に励むことが自らの役割だと思っていたから。

剣を振るう ―何も考えず、何も感じず―

ガン、と重たい音がして腕に痺れが走った。

押し返そうと力を込めるも、まるで刃が立たずに慌てて剣を凪いだ。まともにやっては体力が根こそぎ奪われてしまう。

それに隙もできやすい。

「殿下。逃げ腰は感心しませんぞ？」

「將軍の一振りを受け止めただけでも、進歩だと思う、がっ」

息つく間もなく続けざまに剣を振り下ろされる。

相手が、剣先を潰し、更に（当たったときに軽症で済むように）

軽量化された訓練用の剣を使っているとはいえ、まともに喰らえば酷い有様になることはとくに分かっている。

自分の持っている剣は実際のものとはほぼ変わらないので、振り回すには重過ぎるというのも逃げ切れない一因だ。

……かと言って、相手に実際の重さの剣を使われてしまえば、きつと受け流すこともできないだろう。

どっちにしろ、敵わないということだ。

「將軍っ。あまり振り回すな」

「殿下の御身を案じて、軽いものにしていのです。速さは慣れればいいだけのこと」

度重なる攻撃は容赦というものをまるで知らない。

息を詰めて応戦するも、すでに腕が痺れて感覚がなくなっていた。悔しいことに、一日中書類を捌くことが多い自分と、日々鍛錬に

勤しむ相手とでは、天と地ほどの差がある。

若さと体力だけでは勝てないのだ、と実感して唇をかんだ。小さい頃からの剣の師を見つめて息が出る。

「馬鹿力め！」

「今更ですなっと」

掛け声と共に力を込められ、均衡を保っていた剣が揺らいだ。

痺れている手は呆気なく剣を零し、からんと空しくそれは転がる。今日はもう少し時間を使うと思っていたのに。

「最近、特に上達しておられますな」

「將軍相手だと、己の力の成長なぞ分らないがな」

軽口を叩きつつも、落ちてしまった剣を拾い腰に佩く。

そして頭を下げると、相手も同じように礼を返した。さっさと自分の剣を仕舞うところを見ると、今日はもう終わらしい。

助かったと思う反面、もっと訓練を続けたいとも思う。

知識も剣の技術も足りない自分は、もっと努力を重ねていかなければならないのだ。

「いや、お強くなりました。ああ、そうそう。ところで殿下には想い人がいらっしゃるとか」

何気なく、いやそれを装いつつも目を輝かせて、こちらを見つめてくる。

『はあ？』と語尾を上げて反論の意を示すと、がっちりとした体つきの男は『違うのですか？』と聞いてくる。

「誰に聞いたか知らないが、根も葉もないな、それ。俺が一番驚いたぞ」

「おかしいですな。ハノーバー親子が口を揃えたはずなのですが」
ああ、と納得する。

リゼットと森から帰って、それからレオンに礼を言おうとしたとき問い詰められたな。

あまりに執拗な追求だったので、髪留めを渡したのだと白状した。ノースは、まだ誤解をしたままなのかもしれない。

「友人に髪飾り、というか髪留めを贈っただけだ。何の含みもない」
「ほう。殿下が髪飾りを、女性に」

にやにやとどこか楽しそうに笑う将軍へ眉を寄せる。

何故全員同じ反応なのか。レオンにいたってはそれに加えて、『
あ、やっぱり女性が好きなんだね、安心したよ』と言われた。

何がだ。

「大人になりましたなあ。私も嬉しいですけど、殿下。是非連れて
おいでなさい。お顔を拝見したい」

何故連れてこなければならぬ。

しかも友人としてではなく想い人として。大切な友人は、レオン
にもノースにも、そしてこの将軍にさえ隠しておきたくなる。

特にレオンには絶対に会わせたくない。

「想い人ではなく、友人だ」

「ではそのご友人を連れてきてください」

その含み笑いから逃げたくなって剣を抜いた。

しっかりとした重量感を手で感じ、そのままゆっくりと回して水
平に突き出す。

低い姿勢から足を元に戻し、次の型に移ろうと体重を後ろ足にか
けて体を引いた。

足運びと素早い重心の移動、これが意外に難しく、幼い頃はすぐ
バランスを崩して倒れていた。

「殿下」

「何だ」

戦場でも訓練場でも、どこにいても遠くまで響くだみ声で、将軍
は逃げ出そうとした俺を呼び止めた。

「集中して何も考えないことは、よいことばかりではありません。
想い、というものは形を持たぬ不確かなもの。

それに悴を与えてしまうと、その想いはいつか消えてしまえますぞ。
気付かなければ、いえ気付こうとしなければ、つかめないものは案
外多い」

「俺はあの空気を好いているんだ変化を望んではいけない。もちろん、消失もだ」

望むことは恒久の平穏であり、温かいだけのあの関係。

そこに友情や親愛以外の感情は必要ない。抑えの利かない熱情や、汚れた劣情などの塊でしかないモノなどに、何の特がある？

そんなもの、抱いてもいないし抱くつもりもない。

ただ、側にいて安心したいだけなのだ。

「何よりも大切な、友人なんだ」

再び剣を振るい始める自分は、何も考えず無心になれる方法を探していた。

胸に宿る焦燥感に、戸惑いに、気付かないふりをしたくて。

14話 剣を振るう（後書き）

何だかんだで、お節介さんが多い。將軍とアルの剣術練習は書いて楽しいです。

15話 過保護な王子

窓から見えた彼女に声をかけようと腰を浮かす。しかし目の前に悪友がいることを思い出して、慌てて席へつこうとした。それを奴が見逃すはずもないのに。

過保護な王子 ―心配するのは当たり前―

「へえ、あの子のこと、知ってるの？」

「レオン、仕事中だ」

「アルバート様、あの娘をご存知なのですか？」

言葉遣いを変えても、仕事中にする話ではない事実は変わらないだろうとつつこむも、『いいじゃない』と一蹴された。

仕事中、とは言っても、庭が見渡せるソファに身を沈めて、これから使う書類の整理をしていたので、その仕事はあってないようなものだと思う。

普段は窓を背にして座っているものだから、彼女がこの前を通るとは知らなかった。

そう思いつつ、そっと下にいる彼女を見た。

毎日通っているんだろうかと思いつつ、書類を捌くことも忘れないう。その一方で、悪友は聞きだそうと言葉を連ねていた。

「あの子、最年少で東屋の管理を任せられた子だね。リゼット・デイズレーリ、だっけ？ 森の管理人の一人として有名だった庭師の孫娘だ」

つらつらとよくもまあ、そんなことまで覚えてられるかと呆れる。その頭の中に、一体何人分の情報が入っているのか少々気になる。ところではあったが無視した。

この悪友に、これ以上の情報を与えるわけにはいかない。うかつに話せば、根掘り葉掘り聞かれるに違いないのだから。

「新人だから『あの』東屋を任せられてはいるけど、そのうち他のところを任せられるんじゃないかと噂だよ。庭師たちの間では、結構有名人らしいね」

無視だ、無視。

相手をしたら、こっちが馬鹿を見るに違いない。関わらない方がいいんだ。だから返事はしない。

「何か神秘的だし、黙々と仕事をこなしてるけど、笑ったら可愛んだろうな。話したいね」

お前にしてみれば、性別さえ女なら何だって可愛んだろう？
そうつつこみたい。

むしろ、リゼットに話しかけたいとか言ってほしくない。何か妹を汚されてるみたいだ。

「今度話しかけてみようかなあ。あ、東屋に直接行くのも」
「レオン、いい加減にしろ」

口に出した瞬間、やってしまったという自覚が広がる。

罠に引っかった。まんまと彼の張った罠に。

いつもなら、絶対はまらないようなものに。

「ふうん。ダメなんだ」

ニコニコと楽しげにこちらを向き、分かりきった疑問を飛ばす。
手元にあったサイン用のペンを容赦なく投げると、幼馴染に酷いなーと苛つくくらいのにびりとした言葉が返ってきた。

ついでに言えば、ペンはしっかりとやつの手の中だ。

避けなければ壁に傷でもつけていただろう。もっとも、彼に突き刺さっていたかもしれない。

「彼女をお前の毒牙にかけるわけにはいかない。友人として当たり前だろう？」

「友人として、ねー。それにしても、僕の扱いヒドくない？」
そんな会話をしているうちに、彼女は東屋の方へ消えていってしまふ。

残念ではあったが、こいつに晒されるくらいならまだましだろう

と思う。

こいつの女関係はすごい。曜日ごとにどころか、日にちごとに恋人が決まっていそうな感じだ。……むしろ日にちごとどころじゃないかもしれないとさえ思う。

「心配しすぎなんじゃないの？」

「俺は彼女が幼い頃から知ってるんだ。心配するのは当たり前だろ？」

兄と妹みたいなものだと付け加えると、悪友は何とも言えない顔をして笑った。

何を含んだ顔かは分からないが、いいものではないということは断言できる。

「心配性のお兄ちゃん役ってわけだね。過保護」

「何とでも言え、今年でようやく十七だぞ」

この国の成人年齢を忘れてるんじゃないの、アル。

相手が珍しく、仕事中でも拘わらずこちらを愛称で呼んだ。友人の口調で『アル』を責めていた。

「十六を過ぎれば立派な女性だよ？　もう彼女は妹でも、女の子でもないんだ。そこんとこ、ちゃんと分かってる？」

「いくつになってもリゼットは変わらない。……妹みたいな友人だ」
無茶を言っている自覚は一応あった。

王族で十七歳と言え、もう結婚の適齢期だ。

事実従姉は十六歳になってすぐ隣国に嫁いだし、今年十六歳になるその妹にも、あちらこちらから縁談が沸いているらしい。

貴族も似たりよったりといったところだろう。十七歳は立派な大人だ。

「そう言い張るんならいいけど。後で悔いると思うよ？　こういうことはタイミングを逃すと面倒だからね」

「お前もノースも、將軍でさえ、これを色恋沙汰にしたいらしいな。どうしてすぐにそこへ結び付けるんだ？」

お前と違って俺は恋に落ちにくいぞ」

——結び付けさせてんでしょ、君のその態度が。知らないよ、取られたりしても。ちよつと僕も興味湧いちゃったし？

「お兄ちゃんの目を盗んで行ってみようかな」

誰かに取られる？ リゼを？

そう思った瞬間に感じた痛みと苛立ちの名前を、未だ付けずにいた。

15話 過保護な王子（後書き）

自覚を嫌がるアルは、あと20話ほど認めようとしません。（かなり粘る）

15. 5話 義務感だろうか（前書き）

レオンさん視点。これからどんどんからんでいく、かもしれない
彼です。

15. 5話 義務感だろうか

やれやれと首を振り、友人が出て行った扉を見つめた。どうやら少し、突っつき過ぎたらしいと反省しながら自分も部屋から出る。

預けられた書類を所定の位置に戻してから、ぐるりと辺りを見渡した。近くにアルがいなくてところを見ると、どうやらどこかへ消えてしまったらしい。

……先ほどの会話から、それはここから離れた東屋でないかと勝手に予想した。元々彼は神出鬼没だ。どこへ行ったか分からないことなど珍しくない。

彼とは貴族の子弟達が通う学校で知り合ったが、その頃はどこか何かを諦めていたようだった。去年なんかは本当に酷くて、このまま彼は壊れてしまうんじゃないかと思った。

秋ぐらいから回復していたようだったけれど、それは彼女のおかげだろうか。それだったら、喜ばしい限りなんだけど。

まだしっかりと顔を合わせてないのに好感を抱いた。

「おお、レオン。どうした？ アルバート様なら来てないが」

「いえ、アルバート様は今どこかに隠れておいででしょう」

仕事もひと段落着いたので、休憩がてら王宮に程近い庭の中を歩いていると、向こうの方から声をかけられた。

大きな体躯に、がっしりとした筋肉。野太い、少し掠れた声だったがその威力は十分だ。近くにいた侍女たちが小さな悲鳴を上げて瞬く間に逃げてしまった。

残念、声をかけようと機会を伺っていたのに。

「そうそう、アルバート様の想い人はどうやら『友人』らしいぞ？」友人の剣の師であり、学生時代の怖い先生でもある將軍は、にやりとした笑みを浮かべてこちらを見た。

それは『友人』というアルの言葉を信じているというよりは、新しい情報がほしいという顔だった。確かに、あんな態度をされては

その友人という言葉も信憑性は薄れてしまう。

どこからどう見たって、恋しているようにしか見えないだろうに。

「アルは繊細だから、あんまりつつこむと自覚する前に逃げますよ」

「そうだな、あの方は存外、自分が王族であることに拘っておられるようだ。……クライヴ様のこともあるしな」

クライヴ様。

友人の兄であり、この国の第一王子であり、いずれこの国を背負うかもしれない人。

だけど体が弱くて、負担が大きい王の責務をいつまで果たせるのか分からない人。

だからこそ、人はアルを縛り付ける。第二王子だが、いつでも責務を果たせるように、第一王子同様に育てられているはずだ。

彼にとって、それは苦痛でしかないが。

「アルバート様は、その方をとても想っておられるのだろうか？」

「大切にしていることは事実ですね」

それが恋かどうかは、本人にも分からないようですが、と付け加えておく。

アルは色々と考えすぎているのだろうと思った。恋なんて、そんなに難しく考えるものではないと思うのだが、やはり彼にとっては違いのだろう。

彼の恋人はそのまま婚約者になり、王子の妃になり、そしてもしかすると……王妃になるかもしれないのだ。

だからだろう、彼は恋人を作らないし、作りたいとも思っていなかった。恋などというものに、現を抜かすこともなかった。

知っている限り、ただの一度も、である。学生時代からずっとだ。周りの仲間にかかわれても、何を言われても。

「アルバート様は、そういうことは考えたくないらしいが。お相手が、上流階級の間人ではないからだろうか」

「それもあるでしょうけど、でも彼は」

そう彼は、ただ認めたくないだけだ。

自らの心にそんなものがあるということ。恋を邪だなんて一体誰が決めたと言うのか。彼は恋心が彼女を傷つけると思っているようだ。

そんなこと、絶対にありえないというのに。少なくとも、アルならばそんなことは絶対ないと言い切れるのに。

それでも彼は、今の関係が壊れることを恐れている。

「恐れているようです、二人の関係の変化を。臆病にも、彼女を傷つけてでも、そこから動きたくないのでしょうか」

からん、と足元に剣を投げつけられた。

木剣だったが、それを手に持つのはためらわれる。こんなところで、將軍の相手をする趣味などあるわけない。

随分と年上であるが、その肉体は衰えを知らないらしく、未だかつてアルにも負けたことがないのだとか。

つまり、自分が勝つ可能性など皆無なのだ。こちらもアルに勝つたことはない。

「將軍。何がしたいのか、僕にはさっぱりです」

「それで？ お前は どうする、レオン・ハノーバー」

フルネームで呼ぶとき、將軍は本気だ。目も笑ってない。どういう意味だろうと考えるまでもなく、つい笑いが零れた。

言われなくても、分かっているつもりだ。僕は、アルを仕える人間に決めているのだ。アルになら、仕えてもいいと思ったのだ。

だから、望むことは唯一つ。

アルが、アルのままであること。

「そうですね、もしアルが諦めるなら。僕が引き受けましょうかね
っ」

言うが早いのか、こちらが木剣に手を伸ばす暇もなく目の前すれすれを剣が通った。

前髪が横に靡くのは、剣が額をかするくらい近いからだ。思った

よりも速い攻撃に舌打ちを打ちつつ、足元にあった木剣の先を踏みつけ、蹴り上げる。

浮いた木剣を手にしながら重心を後ろへと移動し、仰け反るようにして剣を避けた。

がっ、と剣の先が木剣を打つ。

「アルが幸せにしたくて、幸せにできないなら、僕が引き受ければいい。違いますか？」

掌で木剣を返し、剣を弾き返す。

すぐさま振り下ろされる剣を避けて、一步二歩と後ろへ逃げる。立ち向かえないなら、逃げるしかない。自分の腕ではこの人には勝てない。

だから避ける。避けて、逃げて、たった一回の隙を見つける。

「違うな、レオン・ハノーバー。お前は確かに器用だが、そればかりはできない。アルバート様に殺されるぞ」

足元を払う剣を飛ぶようにして避け、がら空きになった肩を狙う。剣を持ってないようにしてしまえばいい。そんなこと、相手に読まれているのは当然で。將軍は半歩だけずらして木剣を避けた。

鈍い音が響いて地面を打つ。それはこちらの隙に十分なりえて、將軍は低い体勢になったこちらを無造作に蹴り上げた。

随分と成長したはずの自分の体は、大した抵抗もなく地面に転がった。軽々と転がってしまった我が身を嘲笑いつつ、鈍く疼く体を起き上がらせた。

「手酷いですね」

「お前ができないことを言うからだ。お前がアルバート様に『アル』のままであることを望むなら、その女性は隣にいないといけないだろう。彼女はすでに、あの方の一部だ」

当を得すぎているその言葉に、返す言葉もなかった。

義務感だろうか　―馬鹿なことと言われるけど―

にやりとこちらを見て笑う將軍を睨みつければ、『馬鹿なことは
考えないことだ』と言われた。馬鹿なことだろうか。友人の好きな
人間を、代わりに引き受けようとするだなんて。

15. 5話 義務感だろうか（後書き）

将軍・レオン・アル。この三人の剣術は書いて楽しい。レオンさんは常識人だけど、それを表に出さない人です。だけど誰よりも階級や王族の意味を分かってます。自分は気にしてないくせにね。

16話 手の荒れと薬（前書き）

甘いⅡスキップ過多、だと思っている私は、とことん恋愛モノに向いてない。

16話 手の荒れと薬

無理やり引き寄せて、その右手を包んだ。わずかに冷たいその手は驚くほど小さくて、細くて……繊細な造りをしていた。自分の手と、同じ『手』と呼んでいいのか戸惑うくらいに違っていた。

手の荒れと薬 ―女の子なのに、と思う―

自分の知っている女人の手というのは、白くて細い。

すべらかで、自分のものとは明らかに違うものだった。……まあ、蝶よ花よと育てられ、何の苦勞も知らないまま生活している母の手を見て育ったのだから、ある意味当然だと思う。

乳母や侍女も最低限の手入れはしているらしく、酷く荒れているという印象を持つことはなかった。

「なのに」

この前何気なく見た彼女の手は、それらの手と明らかに違っていた。

確かに小さい手であったが、あちこちに傷が入って赤くなっていた。痛々しい傷からは血こそ出ていなかったものの、いつかぱっくりと肌が裂けてしまいうるだった。

水を草木に与えたり、冬でも丁寧に薬草を育てているからか、かさかさとしていて吸い付くような質感もなくなっていた。

春から夏にかけては、あまり気にもしなかったのに。

『大したことありませんよ』と笑う彼女に、何も返せず口を閉じた。

今まで考えたこともない自分が、彼女との距離を知らしめる。それが嫌で久々に乳母だったマリアに会いに行った。

こういうことは女性に聞いた方がいいだろうと思ったし、マリアはいわば母親代わりで信用もおける。母に聞くよりいい気がした。

「肌の荒れにはどうしたらいい？」

「まあ、殿下。久々にいらっしゃったと思ったら、唐突に何を言い出すんですか」

お茶を出しつつマリアが笑う。

少し決まりが悪くてモゴモゴと『友人が』と言うと、まあと口を押さえて微笑まれた。何だか負けたような気がするが、これは気のせいだろうか。

「女の子ですか」

「いや、まあ、そう、だが……」

「お薬を塗って差し上げればよろしいのに」

ごそごそと彼女が棚を探り、一つの容器を差し出してきた。

白く小さいそれを開けば、中からとろりとした液体が見える。お世辞にも美しいとは言えない緑色だ。あえて言うなら、沼色……だろうか。

「マ、マリア？」

「自作の塗り薬です。色と匂いはよろしくありませんが、効能はありますのよ」

そう言われて送り出された。

ゆっくりと時間をかけて塗りこんでくださいとも言われた。そしていつもの東屋へ来ていた。彼女を探して視線を滑らせれば、すぐに彼女を見つけることができる。

それに安堵にも似た感覚が広がった。そして同じように相手もこちらに気が付いたようだ。彼女は小走りにこちらへ駆けてくる。

「アルバート様、いらしてたんですね。気付かず、申し訳ありません」

「いや、今来ただけだから、気にしないでいい。ところでリゼット、少しいいか？」

彼女の手を引き、東屋へ入る。慌てる彼女の肩を押さえて座らせ、その隣に自分も座った。

それからマリアにもらった塗り薬を出す。彼女がびくつと怯えた

ように体を引いた。

「あ、あの。アルバート様？」

「沁みるとは、言ってなかったが。心配しなくても、俺の乳母だった人間の自作らしい」

ほら、手を出せ、と彼女を促す。

しかし彼女は驚いたように目を見開き、それから首を振った。この薬を疑っているというよりは、いつもどおり遠慮しているようだった。

「アルバート様に塗っていただくなんてできません。しかもお薬ももらえません。怪我も、しておりませんし」

そっと彼女は、己の手を隠すように机の上においていた手を膝の上におきなおした。

そして恥じるように視線を外す。そんなことで問答するつもりはないので、強硬手段に出ることにした。

彼女と話し合うと余計な時間を使うわりに説得できないからだ。怪我をしている、していないなんてこと、言い争うのは避けたい。

「アルバート様」

「嫌なら自分で肌荒れの薬くらい作れ。得意だろう？」

彼女の膝の上から半ば強引に出した右手へ、緑色の液体を乗せた。とろっと冷たい弾力のある液体が肌を滑る。少し青臭いそれに眉を寄せつつ、そっと伸ばしていく。痛々しい傷の上を、薬が滑っていった。

肩がはねるのを見ると、痛いかもしれない。そんなことを考えつつ、薬を塗りこむ作業を続けた。

「痛いかな？」

「……いいえ」

わずかな間が正直な感想を伝えてきて、小さく笑ってしまう。指一本一本まで塗りこんで、同じように左手を取る。

「あのっ！ 一人でできます。それくらいなら、私だって」

「マリアが塗ってやればいいと言ったし、俺もそうしたいんだから

大人しくしておけ」

彼女の手は小さくて、折れてしまふんじゃないかと思う。

しかし母の手のように美しいだけではなく、確かな強さもそこには含まれていた。真っ白で、傷一つない手よりはしっかりとしていた。

それでも、やはり『女』の手で、ほっそりとしたその手は、自分のものとはまったく違うものだ実感する。

「これくらいしか、してやれないんだ。させてくれ」

懇願のような響きは意図しないものであったが、予想以上の効果があったらしい。

彼女は大人しく手を預けてきた。その赤い頬に改めて性別の違いを自覚し、落ち着かなくなる。

自分たちは兄妹ではなく友人で、そして男と女でもあるのだと否応にも突きつけられた。白い手と、赤い頬。そしてわずかに濡れた瞳のような紫瞳。

全てが彼女を『女』だと示していた。

16話 手の荒れと薬（後書き）

優しいけど、ちょっと強引。今回のヒーローはそれを目指してます、ええ目指してるんです、これでも一応。

17話 不機嫌になったら思い出す顔

条件反射のようなものだ。怒鳴りたくなったら、口の中で彼女の名を呟く。イライラしたら、彼女の顔を思い浮かべる。心が静まる魔法のようだと思った。

不機嫌になったら思い出す顔 ―それは他の誰でもなく彼女―

「最近、抜け出すことが増えてきているようだが？」

「サボリ癖は、今に始まったことではありませんよ。父上」

何のために呼び出されたのかと思えば、そんな用件か。

今更な指摘に苦笑いを返してしまう。授業や仕事から抜け出すのは、今に始まったことではない。

むしろ城外に出る回数は、あの東屋へ正式な管理人が来てからというものの、著しく少なくなっている。

優秀な彼女が次々と穴を塞いでいるのだ。まあ、その代わりと言うか、東屋へ行くことを目的にした抜け出しは増えているんだが。

どっちにしろ、抜け出した回数はそんなに変わっていないだろうに。……目的が変わっただけなのだから。

「お前は、王位継承権第二位の王子である自覚を持っていないのか？」

「持ってますよ、最低限ですが」

父の重たいため息が一つ。

兄とは違い、何かしらトラブルを持ち込むのは、決まって弟である自分なので、父のため息も聞き飽きている。

時間がゆっくり流れるのを感じる。ああ、長くなるな、なんて思った。

懲りないわけではないのだが、その懲りた状態を長く維持できないのだ。だから、同じようなことをして、同じように怒られる。

「……最低限持っていてさえ、それか」

深く深く、眉間に刻まれるしわ。

若々しいと言われる顔に、わずかに浮かぶのは疲労感で、それを見ると流石に申し訳なくなる。申し訳なくなるが、止めようとは思えない。

「仕事の方はやっていますし、街で問題を起こしたことはありません。剣は持っていますし」

「そこは問題ではない！」

苦々しいその言葉に少々むっとしてしまった。普段滅多に話さないのに、こういうときだけ口数が多い。

思い返せば、自分はこの偉大な父とまともに話したことがあまりない。会っても、毎度このように怒られているような気さえする。

兄もそうなんだろうかと一瞬思うが、出来のよいあの人に限って、お叱りを受けるようなことはしないだろうと考え直した。

「街娘に現を抜かしているのではないかと、もっぱらの噂だ」

「現を抜かしているなら、半刻で戻りませんよ」

苦笑いしつつ、反論する。

あの『現を抜かす』というには、穏やか過ぎるお茶会を思い出したからだ。彼女は遅くとも半刻すれば、こちらを追い出してしまおう。それは俺が説教を受けないための気遣いだ。妹役に心配されるというのは少し情けない気もするが、その気遣いが妙に嬉しいのも事実だった。

「ともかく、街へ降りるような真似は二度とするな。分かったな、アルバート」

「街へ、ですか。まあ、努力はします」
今気付いた。

自分は父に愛称である『アル』と呼ばれたこともなかった。母が友が、そして幼い頃の彼女がごくごく自然に呼んでいたその名を、この人は未だ呼んだこともない。

不自然なことなのに、とても自然で今まで気づくこともなかった。

苦笑を通り越して、もはや嘲笑に近い笑いが漏れた。

自分たちは赤の他人より遠い親子なのだ。

「アルバート!!」

「残念ながら、私は兄と違って従順でもなければ、出来もよくない。王族として生きる気も、正直あまりないです」

苛立ちを感じるのは、それでも自分が王族であると知っているからだ。

父や兄のように、高尚な思いを抱いていないのに、自分は第二王位継承者で、いくら足掻いてもそれが変わることはない。

何を学んでもピンとこず、この国や民のことを本当の意味で理解できないにも拘らず、だ。

「しかし、王族でいる限り、最低限の責務は果たすつもりではいます。——お話が以上ならば、私は帰らせていただきます」

乱暴な口調であるのは自覚していた。しかし、口調を抑えることなく部屋を出た。ちよつとした反抗だった。

ばたんと大きな音を立てて扉は閉まり、扉の両側へいた兵士が一瞬目を見開く。そのまま足早にその場を去って、王宮の廊下を歩く。いつの間にか人目の少ない道を歩いていて、その足は確実にあの東屋へ向かっていた。

「リゼット……リゼ」

この苛立ちを何とか抑えたくて、彼女の名を呼んだ。

浮かぶのは、はにかむような笑顔で思わず立ち止まる。へなへなと座り込みそうになりながら、壁に額を押し付ける。

「何してるんだ、俺は。あんなもの、聞き流せばいいだろう」

別に街へ出るなど言う話であれば、ある程度の従順さは保てたはずだ。

なのに真正面から反抗して、父を怒らせた。

理由は分かっている。今の自分の状態を『現を抜かしている』と表現されたからだ。

情けないことに、たったそれだけで苛立ちが募った。彼女との茶

会を、そんな風に見られることが悔しかった。

「王族失格だな。それでもいいが」

彼女の声と顔を思い出して苦笑いする。

それからノロノロと体を引き上げて、心の中の苛立ちを押し殺した。リゼットに会うのに、そんな感情は必要ない。

それからやっと歩き出すことができるようになった。

向かうのは東屋で、会いたいののは彼女。彼女にさえ会えば、この苛立ちも忘れられる気がした。

17話 不機嫌になったら思い出す顔（後書き）

つまり四六時中リゼのことしか考えてないということに……。

18話 実家に帰らない彼女

王宮の外れにある離宮、もとい官舎に部屋を与えられている彼女。毎日、東屋近くの管理室と自室を行き来するだけ。実家に帰ろうとは思わないのだろうか。

実家に帰らない彼女 ―嬉しいけど少し心配―

「実家、ですか？」

「東屋の管理人だって、申請すれば休みは取れるはずだろう？ 帰らないのか？」

疑問に思ったことをそのまま言うと、彼女は不思議そうに首を傾げた。

そんなこと聞かれるとは思っていなかったらしい。しばらくこちらの意図を計るように視線を彷徨わせる。

「わざわざ帰ろうとは思いません。そもそも、ちょっとそこまでというわけにも、いかない距離ですから。祖父がいれば、また違ったのかもしれませんが」

彼女の祖父殿が亡くなって、彼女のご両親は都を出た。

祖父殿が生きていらした頃から商いをしていたので、それ自体はそんなに不思議なことでも驚くことでもない。

「心配、されないのか？」

「さてはいませんね。多分。行き遅れるのを承知でここへ来てますから」

朗らかに笑って、彼女はお茶を淹れ直し始めた。

そこに悩みや負の感情は見受けられない。本当にそう思っているらしい。

……何と言うか。達観しているというか、少女らしくないというか。十六にもなれば、それは立派な年頃の少女で、そろそろ花嫁修

業でも、ということになるくらいだ。

現にこの王宮にも、その『年頃』の少女達が入って花嫁修業をしていた。

もつとも、その少女達は兄ないし自分の嫁へ、という思惑を背負っているので、近づきたくもないのだが。兄もそうなのだろう、どこなく避けていた。

「行き遅れる気満々なのか」

「満々というか、仕方ないかなあと」

柔らかい湯氣を立てて出された紅茶に手をつけて、息を吐いた。仕方ない、か。

朗らかに笑っている彼女とは反対に、こちらは真剣に悩んでしまう。この国で行き遅れというのは悪目立ちしてしまうのだ。

あまり感心もされない。むしろ、『どこかに問題があるのではないか』と思われるしまうのだ。笑いごとではない。

「実家に帰ってみるのも大切だぞ」

「ここにいないと、どこかの王子様が街へ降りて行ってしまいますから」

彼女を諭してみても、やり込めてしまう。

むっとして彼女を見れば、にっこりと笑い返された。年下の妹役に見事に口を噤まされて、思わず笑った。

自分にとって、ここは生まれた土地で死ぬまでここが故郷なのだ。ここ以外に行くところも帰るところもない。それを別段おかしいとも、寂しいとも思っていなかった。

しかし。

「それにアルバート様のお話し相手に、休みはありませんし。身分不相応ですけど、務めさせていただいているんですから、休みたくないです」

彼女と話すようになって、彼女に会いに行くようになって、自分の普通が普通ではないと知った。

ここが寂しい場所で、自分は王族でしかない。

そんなある意味当たり前のことを、彼女に出会ってようやく学んだ。そしてその事実を忌み始めた。王族を自覚するたびに嫌だと思った。

初めて出会ったあのときから、ときどき思うことだ。

「帰らないのか」

「そんなに帰って欲しいんですか？」

「いや、帰らないのなら、そっちの方が俺も嬉しい」

ごく自然に出たそれは本音だった。

実家に帰らない彼女を心配しつつ、その帰らない事実自体は嬉しかった。一人でこの場へいるには、この東屋は寂しすぎる。

そう思って告げると、彼女は不意をつかれたらしい。口を開いてぽかんとした後、見る間に顔を赤らめた。

予想外の反応に、こっちも驚く。

「アルバート様は、ときどき心臓に悪い方です」

「どういう意味だ」

訳も分らず反応すれば、赤い顔そのままに『そのままの意味です』と半ば怒鳴られるような形で言われた。

何で怒られるんだろうと疑問に思ったが、逆撫でしそうなので何も言わないようにする。一体何が気に障ったんだろうか。

嬉しいと伝えたかっただけなんだが。

「リゼット？」

「いえ、私が一方的に色々と考えているだけですから」

その言葉を理解するより早く、リゼットは立ち上がって小さく笑った。

もう怒ってはいないらしい。その横顔がほんの少し翳っているように見えたのは、気のせいだろうか。

その表情をよく見ようとして、彼女の腕を掴んで無意識に引き寄せた。彼女が驚いたように目を見開いて、こちらを見つめる。

それに我へ返って慌てて手を離れた。

「すまん、悪かった。……手、大丈夫か？」

「痛くはありません。あの、びっくりした、だけですから」

どこことなく気まづくなって、視線を逸らす。それは彼女も同じらしく、どこことなく居心地が悪そうにした。

どうしたのか、今日はいつもより全てがぎこちない気がする。いつもどおりお茶を飲み、雑談をしていただけなのに、何も言えない状況になるなんて。

今までなかった状況だった。

「リゼット、悪かった。こっちを向いてくれ」

何とかもとの空気に戻そうと、彼女に声をかけた。

それに従い、彼女はゆっくりとこちらへ向き直る。その拍子にまとめ切れなかった後れ毛が揺れ、まだわずかに赤みが残る顔が見えた。

それに何故かこちらの心が揺れ、首を傾げた。何に心を揺さぶられたのか。どうして動揺したのか。その揺れは何を意味するのか。

——何も分からなかった。

18話 実家に帰らない彼女（後書き）

ストック半分切っちゃった！！ 先はまだまだ長いのに、手書きノートは埋まりません。残り10話くらいになったら一週間ごとの更新になるかもしれません。

あまり1話1話が長くなく、遅々として進展していませんが、お気に入りしてくださっている方々がいらっしゃって、とても嬉しいです。

キリのいい数字になったら、何かしたいですね。（↑いつも願望だけ）

19話 婚約者候補の来訪

自分の運命を恨むことなどなかった。ある程度は変えられるものだと思っていた。自分さえ、行動を起こせば無理やり何かをさせられるなんてことない、と。……そう考えていた時期も、あったはずだ。

婚約者候補の来訪　― いらないし、必要ない ―

視察から帰って来て、その報告をする前にと自室へ向かう。

報告してしまえばこちらのものなので、その足で東屋へ行こうと思っていた。最近妙に開いてしまった彼女との距離を、元に戻したいと考えていたのだ。

一体何が原因かは分からなかったが、どこか違和感が残っているのは事実だ。その違和感さえどうにかすれば、元へ戻れるに違いないと確信していた。

「ノース、今帰っ……」

「あ、お帰りなさい。アルバート」

先に帰って報告書などの準備をしているはずであるノースを呼ぶつもりが、何故か部屋に母がいて驚く。

濃い茶髪は自分とよく似ているし、顔の作りもどちらかと言えば母親似だ。

そんな母がノースを横へ従えて、優雅にお茶を楽しんでいる。正直意味が分からない。そう思った瞬間、奥にもう一つの影を見つけた。

母とノース以外にもいたらしい。

「あの、母上。何事ですか、一体。私の部屋で何をしていらっしゃるのか」

「あら、言ってなかったかしら」

美しい顔も、すべらかな肌も。

政を知ることが嫌がった、母方の祖父によって作られた世間知らずさも。全てが自分に繋がっているのだ。

その白い手を見るたび、穏やかな笑顔を見るたび、ため息を吐きたくなるのだ。

「あなたの婚約者のことなんですけどね。わたくし、この子がいと思うの」

奥にあった影が動いた。

淡いブロンドが揺れて、その動きと同じように翻るドレスが見えた。目の前に出てきて、やっとそれが年若い少女だと分かった。

その少女は、その年には似合わない、ひどく洗練された様子で膝を折り、笑いかけてくる。そしてそっと口を開いた。

「フィルスト侯爵が長女、ラヴィニアです。お見知りおき下さいませ。アルバート様」

にこりと笑った顔とその仕草。

母と懇意なフィルスト侯爵夫人を思い出した。あの人の娘か。確かに似ているが、その印象も一時のものだろう。

明日になれば忘れていく気さえた。

「母上、婚約者の話は保留ではなかったのですか？ 父上からそう聞きましたか」

「あら、そうだったかしら。まあ、いいじゃない。お話するだけなら」

頬に手を当てて、小首を傾げる。

王子の婚約者を独断で決められるわけでもないはずなのに、この人はそんなことを言う。呆れすぎて何も言えず、ただ目の前へいる少女を見つめた。

白い肌によく手入れされた手、流行のドレスに身を包んでいる。夜会にでも出れば、誰も放っておかないだろうということがわかる。しかしその反対に、それだけの印象しか受けなかった。

「アルバート様は書物をお好みになるとか」

返事をする気にもなれず、勧められたイスへ座る。

可愛らしい笑顔と、多分表現できるのであろうその表情に曖昧な返事をした。早く終わってもらいたいが、追いつ返すわけにもいい。

出されたお茶を口に含んで、その味に眉を寄せた。

人を近くに置くことが嫌いな性分なので、大抵のことはこなせるようになってしまった。お茶を淹れるという作業もその一つだ。

それでリゼットにも教えた。なので彼女はそこら辺の侍女よりも上手い気がする。しかしこれは、……誰が淹れた？

「お口に合いませんでした？」

「いえ、ただ少し熱かったのだ」

「ラヴィニアのお茶は美味しいわよ。口に合わないわけがないわ」少女が入れたのか。

素直に不味いとも言えずに誤魔化せば、隣で母が笑った。

この人には高い茶葉で淹れた紅茶を出す必要がないだろうと思うんだが。流し込むようにして飲み干し、席を立った。

茶番だ、こんなの。

不毛以外の何ものでもない。馬鹿らしいと、心の中で思って扉へ向かった。後ろで呼び止める声がある。

「もう、アルったら。照れてるの？」

「まだ早いと思うのですが。兄上の妃も決まっていけないのに。――私にはまだ、必要ありません」

最低限の礼として、二人に向かって会釈した。そして少女の顔を見ないように素早く身を翻す。

見てしまえば、少なからず罪悪感を感じてしまうから。多分彼女は、王子二人の妃候補でもかなり有力な方なのだろう。

無駄のないあの優雅さを見れば、それはすぐに分かった。

おそらく、そのためだけに育てられたのだ。いずれ王族に入るためだけに。彼女が悪いわけじゃない。

むしろ同情さえしてしまう。

あの手の運びも、裾捌きも、一つの目的を果たすためだけのものだと、彼女は自覚しているのだろうか。

分かっていて、それを受け入れているんだろうか。

「馬鹿馬鹿しすぎるだろ」

しかし、自分もその一部なのだとどこかで分かっていた。

今ではなくとも、近い未来、自分はそういう少女達の中から、特に優れているものを選び出し妃にするんだろう。

自分の意思ではなく、父や母そしてその実家、果ては大臣達の思惑が絡んだ決定によって。ここまで来ればまるで人事だなと笑った。まあ、人事の方がまだ公正か。

自分の運命は変えられる気がしていた。兄よりずっと容易くできるものだと思っていた。

しかし、それもまた夢物語のようだ。自分も立派に、王族と言う巨大なからくりを動かす一つの歯車にしか過ぎないのだ。

そこから逃げ出そうとしても、四方八方からしっかり押さえつけられ、身動きも取れない。忌々しい呪縛だと思った。

——呪縛でしかない、気付く王族はいたい何人いるのだろうか。

19話 婚約者候補の来訪（後書き）

人前のアルバートを書くとき緊張します。紳士でなければいけないので……。

冷たい、礼儀を失わない紳士。人前で見せる笑顔は作り物なので、どこか冷たい感じ、というイメージ。

20話 冬になれば（前書き）

冬の東屋なんて、考えただけでも寒い。

20話 冬になれば

暑い日差しに目を細め、足早に東屋へ入る。日陰に入ったことで多少涼しくはなったが、未だ暑さは和らがない。雫になって落ちる汗を拭って、腰を下ろした。

冬になれば ― 会えないかも、なんて―

「それにしても暑いな」

「そうですね、この地域は毎年」

植物を育てる彼女は、気候にも詳しい。

我が国は南に海があるものの、ここ王都は大陸の中だ。元々国境の北、東、西は陸続きなので、国土のほとんどが内陸の気候に属するらしい。

昼夜、夏冬の温度差が大きいと言われている。海側では気候が変わるらしいが、詳しくは知らない。

しかしそこは王都より遠く離れているだけあって、ここより穏やかな気候変化をするらしい。いつか行ってみたいと口に出せば、リゼットに昔笑われた。

四季もあるこの国は実り豊かなことで有名だった。平坦な地が多く、水の便もいいからだろう。

農業が盛んな地域は特に土壌も豊かだから、余計よいのかもしれない。寒さが厳しくなる北の方は、農業が盛んではなかったが、酪農をしているところが多いはずだ。

「今年の冬は、寒い気がします」

ぽつと出し抜けに彼女が呟いた。

「毎年だろう？」

「いえ、特別に」

何を見てそう思ったのか、何を感じたのか彼女は何も語らない。

しかし澄んだその瞳が空を眺めるので、自分もそれに倣った。青い空には雲はほとんどなく、眩しいまでに明るい。

それだけなのだが、彼女にはその他の情報が入っているんだろうか。横目で観察しても、それは分からなかった。

「今年の冬は、管理人が出ることはないかもしれないですね」

特に寒い年の冬、東屋の管理人達は管理室に来なくなる。

王の温情ということで、仕事はしなくてよくなるのだ。まあ、寒いにも拘らず、わざわざ東屋を訪ねる人間もいないだろう。確かに。

「去年の冬は、閉まらなかったな。そう言えば」

「赴任して初めての年で、一番辛かったです。そう言えば」

この東屋で再会したのは、去年の秋のこと。

冬は閉まるものだとばかり思っていた彼女は、相当驚いていた。

確かに、彼女と初めて出会って森で遊んだ数年間は冬が厳しく、森はおろか東屋が全て閉まるほどだったのだから、そう思い込んでいたとしても仕方ない。

それを思い出して笑えば、彼女も苦笑いを返してきた。

「今年は閉まるのか」

「私がきちんと予想しているのであれば、多分」

こんな日が照っていて、暑いのに。

話しているのはもう冬の話。その奇妙さに笑いが漏れた。まだ夏は長く、冬は遠いのに何を考えているのやら。

「そういえば、アルバート様。今日はご視察だったのでは？」

「報告済みだ。だからゆつくりと休んでるんだ」

嘘を吐いた。報告を終えた後、再びあの部屋へ帰るわけもなくここへ向かった。

元々報告した足で向かおうとしていたのだから、そこまではいい。しかしその途中、フィルスト侯爵に捕まってしまったのだ。

「王妃様が探してらしたとか。お帰りになる前から」

「あの人に、俺の視察計画を考慮する優しさはないんだ。残念ながら」

彼女に笑いかけつつ、頭では違うことを考えていた。すぐさま東屋に向かいたかったのに、侯爵は簡単に放してはくれなかった。

繰り返して王族と貴族の調和について語り、それがどれほど重要なことを説いた。曖昧な返事しかないこちらに少々不満げではあったが、それでもしつこく食い下がった。

そんなことは、真面目な兄にでも話していただきたい。

「冬、か。来てほしくないな」

「まだ夏ですよ」

その頃になれば、自分はもう少し成長しているだろうか。

いや、もしかしたら婚約者が決まっているかもしれない。考えるだけで嫌になった。抵抗できないのか、抗えないのか。

しかしそう思うだけで、どうしたらいいのか分からずに立ち止まるしかない。どうすればいいのか、どうしたいのか。

何がそんなに嫌なのか。

「冬が来る前に、アルバート様がお好きな秋が来ます」

「そうだな。この国が一番豊かに、美しくなる季節だ」

この国の四季で一番好きな季節だった。

収穫時期である秋は民の暮らしも楽に、そして景色が美しくなる季節なのだ。あちこちで行われる収穫祭が、その喜びを大きくしている。

穏やかな春も好きではあるが、読書をするのに適していると言う点においても、秋の方が勝っていると言えた。

「読書の季節ですし、これも過ぎやすくなります」

「こう暑いと、読書もする気なくなるしな」

その代わり、剣の鍛錬によく誘われる。この暑い中何をそんなと思うのだが、どうにも暑いと燃える人間が多いらしい。

おかげでクタクタだ。本当に手加減しないのだから嫌になる。

剣を振るうたびに汗が流れてフラフラするが、相手は相手でびくともしなかった。

最近思うが、訓練に誘われるのは、周りにいる人間が暑さでやられて暇をしているせいかもしれない。

「今年の冬はすぐでしようか」

ぼつり、と彼女が小さく呟く。

去年は冬が来るのが早く感じたからこそその問いだろう。確かに、去年は秋から冬までの期間が短いように感じてしまった。そして冬はもっと長かった。

東屋が閉められていなくても、防寒対策のほとんどなされていない東屋で話そうなどとは流石に考えられず、会えない日が続いたから余計そう思うのかもしれない。

「そうだな。でも遅く来て、早く過ぎ去ればいいと思っている。勝手な話だが」

「そう、ですね。私もそう思います」

冬になれば否応にもここから足は遠のく。

自分は平気でも、彼女の細身に寒さは応えるだろうから。会えなくなるのかと思えば、何とも言えない不快感が胸を襲った。

その不快感を治める方法が見つからず、仕方なく彼女の頭を撫でた。何故か不快感は治まらず、一段と酷くなって頭を悩ませた。

20話 冬になれば（後書き）

内陸の気候云々は専門じゃないので、間違いだらけです。湿潤大陸性気候よりちよつと温かいかなあというイメージ。

どちらにしろ、大陸性気候ですけど、雨量は少ないです。海洋性気候もちよこちよこ混じってる感じで。

北の方は思いつきり冷帯な感じ。南の方は温帯（温暖湿潤とか）です。……高校の地理の教科書見ながらぼんやりと考えてました。

20. 5話 あなたは、何を思う？ (前書き)

リゼット視点。この子はときどき、アルが好きすぎて怖い。

20. 5話 あなたは、何を思う？

冬なんて来なければいい。あの寒くて、全てを凍らせる季節など、来なくていい。

冬は隣にいる彼が、来なくなる季節。去年は東屋こそ空いていたけれど、結局そんなに会えるわけではなかった。開いていても、会えないなら開けている意味がなかった。

私を心配して、『ここは寒いから』と苦笑いする彼はどこからどう見ても『王子様』で、私を心配するお兄さんではなかったのが少し辛かった。

『兄と妹』というその関係が、私たちが持つ唯一のつながりではなかったのか。そう思うと、たとえ兄という接し方であってもいいとさえ思った。

会えないくらいなら、妹として、子供として接してもらう方がまだよかった。

「アルバート様」

ゆつくりとこちらの頭を撫で続ける『王子様』は、穏やかな顔をしたまま笑っている。

ちらりとその表情に、一条の違うものが交じった気がしたが、私にはそれが何なのか見当も付かなかった。

この方は昔から、『王族』として育てられてきた。いくら私のような人間と会っていても、彼は王族としての彼自身から逃げられない。

表情は一切外に出さず、笑顔で全てを覆い隠す。

それはある意味完璧すぎるほどで、長年見ている私でさえその感情を深く探ることはできないときがある。……長年見ている、分かる気にいるのはおかしいかもしれないが。

普段一緒にいるときは表情を隠すこともあまりないが、それでも彼はときどき無意識に、私への感情を隠す。

それが何なのか、気になると同時に恐ろしかった。

「ん、何だ、リゼット。嫌か？」

髪を梳いていた手が止まり、髪の手絡めていた指を引き抜こうとする。

すると何だかとても悲しくて、慌てて首を振って否定した。その手が離れていくことを、危惧していた。

『いいえ』と声に出して否定すれば、彼も少しだけ安心したように息をつく。

最近、二人の距離感が掴めずにいるのは彼も同じなのだろう。

その距離感を、壊しているのは多分、私の感情だ。

私の、恋心が少しずつ二人の間に亀裂を入れていくのだ。兄と妹という、じっとしていれば永遠に変わりはないはずの関係を、私は自分の手で壊そうとしている。

何も言わず、何も考えず、ただずっとそうしていれば『妹』としての地位は彼の中にしっかりと存在し続けると知っているのに。

もう、限界なのだ。妹としてでは足りないのだ。

我がままに、恐いもの知らずに、自分は彼の心を欲している。本来ならば、欲することを許されないはずなのに。そんなことを考えることさえ、してはいけないはずなのに。

自分は臆しているのに、止めようとは思わない。

異常、なのだろうと思う。

おかしいのだ、自分は。

きちんと自分たちの関係を理解しているくせに、いつまでもあの頃のまま動こうとしないばかりか、自分の感情に歯止めをかけようともしないなんて。

「長くなったな、髪」

「よく、結ってもらってましたね」

「おかげでかなり上手くなったぞ」

まあ、他にする人間もないから、腕は落ちたかもしれないが。彼は苦く笑って、今度は椅子から立ち上がり、私の真横に座る。

そして私に身振りで向こうを向け、と伝えると自分はさっさと私の髪を弄び始めた。優しい手つきで、私の髪のをゆっくりと手櫛で梳いていく。

甘く心臓が溶けているような、その手つきに私は思わず息をついた。自分でも驚くくらい、甘い吐息だった。

幸いなことに、その零れた音は彼には届かなかったが、思わず自分の口元を押さえつけた。こんな声、妹は出さない。

「確か、こうやって」

「あ、あのっ。アルバート様!!」

「で、こっちのを持ってきて」

私の抗議などどこ吹く風。

彼はいつもどおり自分の好き勝手に行動を始める。その手つきが、近い声が、頬をかする手が、どんなに私の心拍数を上げるか知りもしない。

私がどれだけ、顔を赤くして、目を瞑っているかなんて。

きっと、彼は一生分からないんだろう。こんなに、彼のことしか考えていないのに。いつまで経っても伝わらないのだ。

「んー、なかなか綺麗にできないな、さすがに。リゼ、櫛」

「お、お止めくださっ」

髪をいくつかに分けて編みこみ、下のほうで固定する。

リボンも髪留めもいつの間にかきちんと机の上におかれていた。随分と前に解かれていたのだろう。

でなければ、きちんとまとめていたはずの髪の毛に、指を絡ませるなんてできないはずだ。どうしてこう、そんなことばかり手先が器用なのだ。

思わず怒りたくなってしまう。

彼は出来上がりが満足できないようで、結っていた髪を一度といくしけずて、癖のついてしまった部分を指で梳くしけずっていた。

「リゼ、櫛だ、櫛」

「ですから!」

リゼ、なんて呼ばないで。あの頃みたいにな、そんなに優しく呼ばないで。

ただでさえ育ちすぎているこの感情に、もう名前も糧も与えたくないのに。

彼の存在一つで、そんなものはいくらでも大きくなってしまいうのだから。

無意識に呼ばれるとどうしても嬉しくて、切なくて、やっぱり諦めるなんてできないのだと思い知るから。

アルにとっては、それがまだ当たり前なのかもしれないけど、もう『アル』は特別な呼び方だと思ってしまうのだから、私は。

「好きだっただろう？　こうやって髪を結われるの」

「あ、アルバート様だって、お好きだったではないですか」

言い訳のようにそう言うと、『そうだったかもな』と笑い声を返された。

顔は見えないけれど、また屈託なく笑っているのかもしれない。

遠くから見るときに、決まって浮かべている薄っすらとした笑みではなく、白い歯を見せて頬を緩ませる真正正銘の笑顔。

心を許した人間にしか見せないのだと、こちらの自慢になってしまいう笑い顔なのだ。

その笑顔をずっと見ていられるなら、この感情を殺してしまっても構わないとさえ思ってしまう。

だけどその笑顔を見るたびに、やはりこの胸に宿る感情を捨てることなどではしれないのだと実感させられる。

矛盾する想いが、矛盾を孕んだままこの胸にあった。

「冬は、お前を連れて執務室に籠るか」

ぽつりと呟かれた言葉に驚いて振り向いた。

結われている途中の髪の毛はぱさりと肩に落ちて、すっかりと元に戻ってしまう。

折角結ってもらっていたのに、と残念に思う余裕などなくってただ彼の目を呆然と見つめていた。

彼も、自分自身で驚いているようで、ただ目を見開いてこちらを見ている。

あなたは、何を思う？ — 無意識に出た言葉の意味を教えて —

それは喜ぶべきことなのか、それとも悲しむべきことなのか。

そんなことさえ考えずに彼の瞳を見つめていた。その鳶色と形容するに相応しい瞳の奥に、真実は隠れているのだろうか。

20. 5話 あなたは、何を思う？（後書き）

無自覚に両片想い。

21話 花束を彼女へ（前書き）

色んなお花に意味を込めてみたりしますので、興味を持っています。ただけたら幸いです。

21話 花束を彼女へ

手の中に収まらないほどの花束を贈れば、彼女は喜んでくれるだろうか。いつも花や木に囲まれている彼女に、それは意味のないことなのかもしれないと思うけど。

花束を彼女へ ―いつも花に囲まれているけれど―

彼女に切花はあげられない。

美しさよりも先に、その命の短さを嘆息するからだ。普通の少女なら喜ぶような花束も、彼女の前ではすぐに枯れてしまう儂いものでしかないのだ。

「だからって、それはないよ、アル。ありえない。王子として、そのセンスは今すぐ捨てたほうがいい。他国に知られたら恥だ」

「煩いぞ、レオン。本当に煩い。人のセンスのあるなしを、お前が判断するな」

執務室の中で繰り広げるには、少々緊張感のない内容だったが、こちらはいたって真剣だった。

机の上においてある鉢植えがこの話の中心で、レオンの非難の的だ。

小さめのその鉢は、どこにでもありそうな地味なもので、その鉢に植えてあるのはラベンダーだった。

匂いもいいし、色々な使い道があるからプレゼントにうってつけだと思ふのだが。

「ラベンダーはリゼットが好きな植物の一つだが？」

「花のチョイス云々じゃないよ。色気のあるなしが問題なんだ」

鉢植えを見つつ、レオンが苦々しく言った。

確かにたくさんの女性を相手にしているお前から見れば、色気の欠片もないだろう。しかし別に色気を求めているわけではない。

むしろ、必要ない。

「鉢植えってねえ、アル。いくらなんでもダメだよ。しかもお洒落って言うか、実用的過ぎるし」

「あえてだ、あえて」

彼から鉢植えを取り上げて、隠すように背へと回す。

どうしてそこまで言われなければいけないんだ。自分はただ、いつも世話になっている彼女のために、植物を贈りたいだけなのに。

「アル。どんな女の子も腕一杯の花束をもらって、嬉しくないなんてことありえないんだよ。一回やってみるといい。あの笑顔が見れるなら、何度でもやれる」

一人で納得して、レオンは頷く。

遊び人の言い方だな、と思った。どこまでも相手に尽くしているくせに、その実全てが自分のためだというところとか。

それをまったく気にせず、表に出しているところとか。

それは彼が女性に感じている『恋』と、自分が彼女に感じている『モノ』の違いだからか。それとも個人の違いか？

「女心が分かってないなあ。だから勝手に婚約者候補を連れて来られるんだよ」

「なっ。お前っ！！どこからそれを?!」

「うーん、どこからっていうか、実しやかにあちこちで囁かれてるって言うか」

リゼちゃんに知られていいの？

婚約者候補がいるって。説明したほうがいいんじゃないの？

「どうしてリゼットが出てくる。説明って、何をだ。……あと、リゼと呼ぶな」

「どう呼ぼうが勝手でしょ？ まあ、まだ会ったことないけど」

そうか。言い訳をしようとしてもしないわけか。アルはつくづくお馬鹿さんだね。

くすくすとレオンが笑った。無性に腹立たしくなって睨みつけるが、レオンはまったく言っていないほど気にしていない。

その証拠に、笑いながらこちらをからかい始めてきた。

王子相手にここまでできるのは、こいつくらいのもんだろう。ただでさえ、婚約者云々の問題で頭を悩ませているのに。

「一度やってみさえすれば分かるよ。まあ、今の君には無理だろうけど。言い訳しようとしてもしないアルには、鉢植えがお似合いだよ」

「今も、この先も、俺は変わらないつもりだが。俺はリゼットが喜ぶものを贈りたい。それだけだ。何も知らないお前に、とやかく言われる筋合いはない」

不機嫌そうな声を取り繕うこともせずに出した。普段は隠せる感情だったが、目の前の男には別だ。手加減する必要もない。

彼女との関係を、誰かにとやかく言われるのは嫌いだ。何もかも知っているというように、口出しされるのも腹立たしい。

自分はただ彼女が大切に、傷つけたくなくて、守りたいだけだ。それなのにどうして皆、他の感情と結びつけるのか。どうしても結び付けなくてはいけないのか。

「何も知らないわけじゃないよ。全てを知っているわけじゃないけど」

何を知っていると言う？ リゼットに会ったこともないのに。

あの不思議な瞳も、優しい笑顔も、何も知らないのに。何も知らない、はずなのに。

「彼女を知らなくても、アルが彼女をどう思っているかは言動で分かる。その『大切』の種類は分からないけど。それでも、『大切』でしょ？」

「当たり前だ。大切に決まってる。だけどそれが」

——それがただ、恋愛感情じゃないだけだ。

恋愛感情にならないだけで、大切に思っていることに変わりはない。恋愛感情でないからといって、この大切さが、恋愛関係においての『大切』に劣るとは思わなかった。

手元にある鉢植えを胸に抱き寄せて、ふわりと息を吐く。

自分も好きなこの香りが、唐突に切なくなった。こんなこと、彼

女の傍にいれば思いつきもしないのに。どうして、無理やりこのことを考えさせようとするのか。

今まで思ってもみないことを突きつけられて、無意味な焦燥感を感じてしまった。ラベンダーの香りも無駄になる。

「その区分はよく変わるからね」

「お前は変わりっぱなしだろう」

ため息を吐いて、近づいてきたレオンを押しつけた。

考えすぎるのはよくないことだ。思考力を使うのは、読書と勉強だけでいい。友人達との会話にまで持ち込みたくはない。

「ちよっとアル、どこ行くの。今休憩してるだけで、仕事が終わったわけじゃないよ。一人でサボるつもりなわけ？」

「いや、休憩時間を延ばす」

手の中にラベンダーの鉢植えを置いたまま、追いかけてくるレオンを避けて扉を開けた。

執務室から出れば空気は澄んでいて、彼女に会えると思うと心の中の不安は消えた。もっと早くこうすればよかったと思う。

考えるのが怖いわけじゃない。戸惑いが大きすぎるだけだ。そう自分に言い聞かせた。

21話 花束を彼女へ（後書き）

ラベンダーの花言葉は、『あなたを待っています』『私に答えてください』です。無自覚でこんなものを選んでいる辺り、アルは侮れません。

22話 傍にいれば身分なんて

頭の中で何かが警鐘を鳴らす。何への警告なのか分からず、それでも焦燥感が増した。一心不乱に東屋へ向かい、彼女を探した。

傍にいれば身分なんて ―考えなくていいのに―

「アルバート様、いかがされました？」

軽く息を吐き出して、彼女と目を合わせた。

息の荒いこちらを見れば、彼女は慌てて走りよってくる。イライラと走るようにして来てしまったので、肩で息をしていた。情けなくなつて、彼女に笑いかける。

上手い笑顔ではないだろうが、笑わないよりはいいだろうと勝手に思った。そして手に持っていた鉢を差し出す。

「いや、早く届けたくつてな」

見る間に綻ぶ彼女の顔に、自分の選択が間違っていないことを知る。

僅かな優越感とともに、ちりちりとした苛立ちも感じた。どうしてだ、喜んでいいはずなのに。

「ラベンダーですね。私、大好きですっ」

「俺も好きだ」

一瞬胸に宿った思いも、彼女の笑顔によって忘れ去られる。彼女に鉢を渡して、こちらもつられるように笑った。

今度は上手く笑えているような気がする。思わず撫でようと彼女の頭に手をおくと、髪をまとめていることに気が付いた。

彼女の栗色の髪をまとめている髪留めに、目が自然と吸い寄せられる。自分が贈ったものが、使われ続けていることに安心する。もしかしたら、使われていないかもしれないなんて考えていた。

「これを贈ったときより嬉しそうだな、リゼット」

からかい半分にそう聞きつつ、髪留めに触れる。

あのときは遠慮ばかりで、とても嬉しそうという印象は受けなかった。今の方がよほど嬉しそうだ。彼女は何を言っているのか、さまざま理解したらしく、頭に手を当てて気まづげに顔を背けた。

それからちらりと視線だけこちらへ寄越す。

淡く色づいたその頬へ手を伸ばしかけた。

「こっちの方が、私にはよく似合います。あまり高価なものは、身に余ってしまいますから」

彼女の言葉で、伸ばしかけていた手が止まる。

今まさに恐れていたことを、考えないようにしていたことを、彼女は口にした。彼女にさえ会えば、解消できると思っていたのに。傍にいて、話さえしていれば、考えなくて済むと思っていたのに。安心のよりどころであるはずだった彼女自身が、事実を突きつけてきた。

「身に、余る、か」

「こんな素敵なものを貰うには、何もかもが足りません」

その紫の髪留めも、ラベンダーの鉢植えも、どちらも変わらずよく似合っているのに。

どちらも関係なく、彼女を想って贈ったのに。どんなに『身分』は関係ないと言っても、そうやって受け取られるのかと思うと嫌になった。

何をして、自分の身分にすぐ繋がられてしまう。それはどうしようもなく空しくて、仕方のないことのようにも映った。

「傍にいれば」

「え？」

傍にいれば、身分なんて考えなくても済む。

そんなこと、酷い思い上がりだった。近くにいても、触れるくらい近づいても、それはあくまで物理的な距離であって、心の距離ではないのだ。

どんなに一方的に近づいても、それは自分自身のことではかない

のだ。急に空虚になって、乾いた笑が出た。

世界が色を失っていく。

彼女の栗色の髪も、紫の瞳も、淡い色の頬も……周りの空気も全てが色を失っていく。

白も黒もなくなる。この世界はこんなにも色あせていたのか。光を失い、色を失い、全てが鮮やかだった世界がくすんでいった。

身分を意識し、遵守し、そうして生きている人間は、こんなに暗い世界で生きているのか。

「いや、とんだ思い上がりだと、そう思っただけだ。悪かったな、リゼット」

この国が王権制なのを忘れたわけではない。まして差がないなどと考えたことはない。

だけど、自分と彼女の間にある壁はもっと低くて、きっと跨いで越えられるものだと思っていた。誰が許すわけでもなく、何か確信があるわけでもないのに。

どうしてか、そんな感じがしていた。

彼女は身分を気にする性質なのは知っている。だけどいざとなれば、易々と越えるものだと思っていた。

否、初めて出会って、彼女の祖父殿が亡くなり、会わなくなるまでは少なくともそうだった。

自分が特別扱いに嫌気が指しているときに限って、身分なんて関係ないというように振舞ってくれた。

彼女はこちらを貴族か何かだと思っていたようだったけど、それがどれだけ自分を救ったか知らないだろう。

「あ、あのっ。アルバート様？ どうしてそんなに悲しいお顔をされるんですか？ あの、私がおか……」

「いや、お前は悪くない」

世界の色を映さなくなった瞳は、いつの間にか表情を表に出していたらしい。

くしゃりと笑って見せて、彼女の栗色だった髪をかき乱す。これ

は幼い頃からの友に、やっていたはずだった。

ずっと、そうだった。『友』に向けていたはずだったのだ。自分だけだったけれど。

「お前は、悪くない」

悪いのは自分だ。

自分一人の考えを信じきって、リゼットの考えを読み取ろうとしなかった。『友達だ』なんて、身分が高い人間が勝手に思ってるだけだ。

実際の身分制度はもっと厳しくて、容赦がない。

そんなことにさえ気付かない自分が恥ずかしくて、下を向いた。合わせる顔がなかった。

彼女より随分年上なのに、無駄に年だけを取っていたらしい。それでも、彼女を友と呼ぶ以外、仕方なかった。

23話 小さな戸惑いに襲われる

自分とどこことなく似ている容姿。髪さえ染めて、手を加えれば身代わりにさえなる男だ。その男がすぐ目の前で笑っていた。彼女の、すぐ前で。

小さな戸惑いに襲われる ― 胸騒ぎの正体は何だろう―

似ているのは当然といえば当然で、彼は血の繋がったはとこだ。実はそうなんだが、彼女は知らないだろう。有名な貴族以下、少しでも貴族というものに名を連ねていれば、誰でも知っていることだろう。

呼びかけようと口を開くが、不意に小さなしこりができた。

呼びかけようと開いた口から声が出ない。何を戸惑う必要があるのか、何を迷う必要があるのか。自分に言い聞かせるのに声が出なかった。

「リゼットさん」

レオンの声が柔らかく、彼女の名を呼んだ。

周りの人間から、一番よく似ているところとして上げられる『声』だったが、自分の声はあんな声だっただろうか。

あんなに穏やかに彼女の名を、呼べていただろうか。

他人の口から出る、自分のものとよく似た声は、それだけで違和感を誘い、落ち着かなくなる。

どうして彼がここへ？

「……で、……？」

「いえ」

遠くて言葉を聞き逃す。

よく聞こえずに苛立つのに、どうしてか足が動かずに立ち尽くした。体が鉛のように重くて、何もできなくなっている。

唯一動いているのは、ゆらゆら揺れて動揺を顕わにする自らの心だけだ。何故揺れているのか、どうしてこんなに動揺してしまうのか、よく分からなくなってしまった。

「……リゼ」

しかし、戸惑いも迷いも動揺さえ、レオンが発した一言で吹き飛んだ。

それでその正体に気づいた。取られるとでも思ったのだろうか。大切な友人を、レオンの毒牙にかけるのは嫌すぎる。

彼女は誰より幸せになってほしいのだ。何よりも大切なものだから、この心ももつともだろう。――無理やりに見える言それい訳を見ないようにした。

「レオン、いい度胸だな」

「何が？ 君は今日来れないっていうことを伝えに来ただけだけど？」

レオンはなんとも楽しそうに笑う。

その笑顔が腹立たしく、足早に彼の元へ行き、リゼットの肩に手をかけた。握る一瞬前に、その線の細さで力を込めるのを戸惑わされる。

しかしそれを押し殺してこちらへ引き倒す。予想以上に彼女の体はこちらへ傾いた。罪悪感とともに彼女の腰を支える。

「あ、アルバート様」

「すまないな、リゼット。この馬鹿の相手なんてさせて」

こちらの胸に頭を持たせかけたリゼットは、焦ったように体を起き上がらせた。

赤くなった頬が彼女の動揺を顕著に表している。それに目を細めていたかったが、いかんせん目の前にはまだ例の馬鹿がいる。

ちらっと視線を上げれば、にこつといい笑顔が返ってきた。リゼットを思いの外気に入ったか？

「レオン、お前」

「気になったんだから、仕方ないでしょ？」

少し離れたリゼットに、その『いい笑顔』を向けてレオンは腕を組む。

彼女は少しだけ気まずそうに視線を逸らし、レオンからの笑顔を流した。万人が虜になるとまで言われる、あの『笑顔』をだ。

その行為に何故だか安心感を覚えた。

どれだけ妹役の彼女を取られたくないのだろうか。

「ノースが呼んでたぞ。さっさと帰れ。で、二度と来るな」

「またお説教かぁ。どうしてさぼったのがばれたのやら」

『二度と来るな』という言葉への反論はなかった。どちらかといえば、聞こえないふりをしているという方が正しいか。

念押ししようと口を開けば、レオンはくるりと踵を返した。

「父が卒倒しないうちに帰るよ。じゃぁね。リゼ」

『リゼ』と彼がりゼットのことを呼んだ。家族以外の人に呼ばれたことがないと、幼い日少しだけ恥ずかしそうにしていたことを思い出す。

それなのに、レオンはりゼットのことをその愛称で呼び、リゼットはそれを拒絶しなかった。ただ顔を赤くして、レオンの方を見る。どうしてそんな目で、奴を見る？

「馴れ馴れしく呼ぶな」

「僕の勝手でしょ、どう呼ぼうが。リゼは嫌がってないし」

大貴族の息子に呼び方が嫌だと言えるわけないだろう。

彼女は自分たちよりよほど色んなことを弁えているし、気を遣える。そんな彼女が名門、ハノーバー家の長男に逆らえるはずもない。レオンの性格を知らないならなおさらだ。それはレオンにも言えるか。レオンも彼女の性格を知らない。

「アル、それならアルがその最たるをいくんじゃない？」

「は……？」

気付かない、わけではなかった。

だけど無意識に目を背けていた。考えないようにしていた。実は自分の言葉こそ、彼女を縛り付ける何よりのものなのだと。

自分の言葉にこそ、彼女は逆らうことができないのだと。考えた
くないその事実を、友人によって突きつけられた。

そして自分は、それを跳ね返すだけの根拠もなく、その言葉を受
け取るしかなかった。

王子の言葉に、逆らえる少女ではないのだ。リゼットは。

24話 どんどん大人になる彼女を

栗色の髪はあの頃より長くてしなやかだ。莖色と表現してもよい、紫の瞳は穏やかに微笑することを覚え、涙を浮かべなくなった。

どんどん大人になる彼女を ― 見ているのは少し辛い ―

子供は成長するものだということは知っていた。数年前までは自らもその、『子供』だった。

成人の儀を迎えてもまだ、自分が立派な大人になれていないことは自覚しているが、少なくとももう子供ではなかった。

それは今年十七歳になる彼女も同じことなのだろう。

随分伸びた背を東屋の中から見つつ、強くなっている日差しの中で輝く彼女を思う。

この強い光に負けず、彼女は座り込んで雑草を抜いていた。こんな暑い中でも植物は逞しいらしく、来るたびに彼女はその作業をしていた。

……必要なものまで抜いてしまいそうなので、自分は大人しく待機中だ。

さっきまで出ていたが、無理やり座らされた。

「暑いだろ」

せめてもの抵抗なのか、体調を気遣ってか、帽子を被っている彼女の頭に手をおく。

まだジリジリとした暑さは緩むことはなく、一層肌を照りつけた。「暑いですけど、仕事ですから」

まとめ切れなかった髪が首筋に張り付き、栗色の筋一本、二本と流れていた。

男物の衣は今日も健在で、深い色の布が彼女を覆っている。日焼けから彼女を守っているのかと思えたが、それにしては布がごつす

ぎる。

気分が悪くなったりしないのだろうか、彼女の服をじっと見つめる。東屋から出たことを非難しようと彼女が振り返る前に、彼女の襟首を引っ張った。

「アルバート様？」

「脱げばいいだろ、汗だくで。今年の夏は猛暑だぞ。何人体力のない大臣が倒れたと思ってる？」

お前まで倒れるぞ、と少しだけ強く言った。

手伝えない（手を出せば二度手間だと分かっている）以上、こういう助言しか与えてやれない。

日が遮ることのできる東屋に戻る気になれず、流れ出る汗を拭って彼女の後ろに立った。少しでも影になればいいのだが、そんな意味はなかった。

彼女より少しは涼しい格好をしているつもりだったが、暑いものは暑い。すごく暑い。目がちかちかする。

「王族の方の前で、一介の庭師が肌を見せるわけには」

「それ以上言うと、東屋に強制連行して脱がせる」

また身分の話をし始めた彼女の言葉を遮った。

振り向いた彼女の顔にこちらにも近づき、しっかりと目が見えるように視線を合わせた。彼女が身を引くが、逃がさないというように肩を掴む。

暑さで倒れでもすれば、こっちの心臓が止まってしまうだろう。

暑さのせいかな、それとも他の理由か、彼女の頬が濃く、はつきりとした色づいた。

「なあ、リゼット。俺は身分やなんかでお前の体調を崩してほしくない。熱に中^あてられて体調を崩すと、命に関わるんだ。

お前は賢い子だから、分かるだろう？」

ゆっくりと言ひ聞かせるように語る。彼女は愚かではないのだから、こちらの言いたいことも分かってくれるだろう。

しばらく沈黙が続いて、それからやっと彼女は口を開いた。

「下は、薄着なんです」

「そうか、よかったな」

じっと見つめられて、首を傾げた。今自分は何か答えることを間違えたか？

その視線の意味が分からず、彼女の視線を受け止め続けると彼女は眉を寄せた。

「アルバート様」

「さっさと脱げ。顔が熱い」
するつと頬を撫でる。

強い日差しに照りつけられている顔は、痛々しく熱を持っていた。何度カリゼットの近くへ行き、その度に東屋へ押し込められていた自分とは大違いだ。

彼女は若干戸惑いながら、男物の衣に手をかけた。体の線を隠すような、裾の長いそれはいくつかのボタンで留められている。

それを一つずつ外しながら、彼女は小さく息を吐いた。未だ身分云々を考えているのだろうか。くいつと反対側から引っ張ってやると、服は呆気なく手の中に落ちた。

「涼しいだろ」

「そう、ですね」

心なしか顔色もよくなる。日陰に誘おうと手を出せば、少しの戸惑いの後にゆっくりと手を預けてきた。

座っていた彼女を引っ張り起こし、東屋へ入る。

日差しを避けるだけでこんなに涼しくなるとは思わず、顎の下を拭いた。いつの間にかひどく汗をかいていたらしい。

「リゼッ」

呼ぼうとして、その声が止まる。

横にいた少女は、落ちてきた髪をまとめ直そうとしているらしかった。流れるような栗色の髪の毛は、彼女の赤い頬やら項やらにかかっている。

体の線が僅かに分かってしまう下の服も、彼女の体がすでに子供

ではないことを示していた。何だか落ち着かず、視線をずらした。
妹の着替えを見ている気分って、こんな微妙な気分なんだろうか。
妹の成長を願いつつも、複雑な気持ちだ。兄とは悲しいものだと、
ため息を吐く。

ずっと幼くいてほしいわけではなかったが、成長を目の辺りにし
て辛くなる。

無邪気に笑っていたあの頃の彼女が、少しずつ消えていく気がし
た。どんどん知らない彼女になる。それが怖くて手を伸ばして、彼
女の頬を捕まえる。

昔は、頬に触れるだけで恥ずかしがることもなかったのに。ちり
ちりとした感情に名前をつけるなら、それは、妹の独り立ちに対す
る寂しさなのだろうか。

24話 どんどん大人になる彼女を（後書き）

妹離れできないお兄ちゃん……よりひどい自覚はないです。

25話 この手を離してしまえば

離せるわけではない。手放せない。――そんなことを心の底から思ったことはなかったはずだ。人並みの執着心はあれど、それ以上でもなかったはずだった。

この手を離してしまえば――いつかきつと、後悔する――

後悔することは分かっている。だから手放せないし、そんなつもりもない。

これが人並みの、友人に対する執着心かどうかなんて考えたこともなかった。いざとなれば手放せるのだろう。

そのほうが互いに、最低でも彼女にとってよいことだと判断すれば。少なくとも、それで彼女が笑っているなら……手を離すなんて造作もない。

自分は彼女の幸せを邪魔する人間ではないのだから。

たとえ、手を離れた結果、自分が王宮で独りになっても。

「リゼット、リゼ」

自分は臆病で、一人ではいられない。

独りになってしまえば、王族の義務に捕らわれて、いつしか抵抗する気もなくなるだろう。いくら本を読んで知識を詰め込み、剣を振るっても、その本質は変わらない。

自分は誰より弱くて、どうしようもない。今だって不安に駆られて、東屋へ向かっていた。

昼の暑さからは想像できない涼しさだ。まだ少し生ぬるいが、真夜中にでもなればもう少し過ごしやすくなるだろう。

しっとりとかいた汗を拭い、そんなことを考える。

東屋の柱に背を預け、床に体を投げ出した。右足だけ立てて、腕を乗せる。ごつんと音を立てて柱に後頭部を当てた。

情けなくて、笑い声が漏れる。

「情けないな。第二王子なのに、強くあらねばならんのに」
ランプの炎をじっと見つめ、息を吐いた。

暗闇の中、静かな東屋は気味が悪い。昼間の明るさが嘘のように冷たくて、小さく首を振った。

来るはずもないことは分かっていたのにどうしてか立ち去る気にはなれず、あと少しと言いついて俯いた。

頭を冷やさなければ、帰っても眠れないだろう。

「アルバート、さま……？」

そのとき、頭上から今まさに求めていた声がした。求めて、それでも聞きたくなかった声が、優しく降り注いで顔を上げる。

見上げれば、心配そうな顔をしたりゼットがいて、その顔は今にも泣き出してしまいそうだった。安心させるように笑みを浮かべる努力もしたが、そんなに上手くいかなかったらしい。

「どこか、お怪我でも？ ああ、誰か呼びますっ」

見る見る歪んでいく目の前の顔に、お前がそんな顔をする必要はないだろうと呟く。

頬に手を伸ばし、それから触れようとして手を止めた。こんなに自然に、自分は彼女の頬へ触れようとする。

泣きそうになれば、それがごく当然のことだというように。

そんな自分が、手放せると？

手を、離せると？

「いや、今日は寝つきが悪くてな。風に当たってるんだ。リゼットはどうした？」

「忘れてしまった本がどうしても気になって」

リゼットの手にはごつい本が一冊。何度も何度も捲られたせいでボロボロになってしまった本は、彼女の祖父殿が形を持って残した数少ない形見の一つで、彼女が大切にしているものだった。

確かに、いつも手元においてあるはずのものがなくなるのは不安だろう。今まさにその気持ちだったので、怒る気も失せた。

いつもなら、こんな時間に出歩くなと小言の一つや二つは言うはずなのに。……まあ、出歩いているのはこちらと同じことなのだが。「そうか、送っていいこう。もう遅い」

「あの、アルバート様。本当に、お体は」

自分は平気だが、ここへいる以上彼女が動くこともないだろう。昼と夜の温度差が一層大きくなる晩夏は体調も崩しやすい。大分落ち着いたし、いつまでもここで膝を抱えたって問題は解決するはずもない。

王宮の敷地内とはいえ、遅い時間であることにも変わりはないのだ。

送っていくのは当然だろう。

「平気だ。心配かけて悪かったな。本当に平気だ。お前がそんな顔をする必要はない」

彼女の手を握り、そっと立ち上がった。

寝巻きに上着一枚引っ掛けただけの姿から、彼女がどれだけ焦って本を探しにきたのか知れた。寒そうだなと思ったが、よくよく考えてみれば、こちらの格好もあまり変わらない。

寝巻きでないことだけが救いか。そう思いつつ、上着を脱いだ。

「リゼット、これを。羽織るだけで違うだろ」

「まだ夏ですよ」

苦笑されるも、彼女の肩に上着をかける。体の造りが違うと分かっただけだが、自分の上着はすっぽりと彼女の体を包み込んだ。

包み込んでも、まだあり余っていた。肩の位置も、袖の長さも、背中の広さも全てが違っている。それを横目で見つつ、上着を脱いだ拍子に離れた手を再び掴んだ。

わずかに反応したが、大した抵抗もされなかったもので、そのまま掴む力に力を込めた。

「後悔する、な」

「何をですか」

「今夜もし、寝つきが悪くなかったら、後悔すると思ったただけだ。」

一人でお前を歩かせたことになっただろう。寝つきの悪さに感謝してたところだ」

手放すことは難しいだろう。

だけど不可能ではない。できる、はずだ。

彼女のためになると知ったならば、きつと。だけど……後悔はするだろう。あとでこの選択は正しかったと独りで言いつつ、それでも後悔はするのだ。

他の選択肢など、取れはしないくせに。

この手を離せばきつと、自分は後悔する。それだけは確かだった。

25話 この手を離してしまえば（後書き）

ここ数話、グダグダしていて申し訳ありません。

25. 5話 作り笑いに騙されて

部屋に帰って、それからようやく大変な忘れ物をしたことに気がついた。いつも身近なところにおいてあるはずのあの本が、どこを探してもない。

管理室においてきたのかもしれないと思い、慌てて立ち上がる。もう夜着に着替えており、再び男物の服に手を通す気にはなれなかった。

仕方がないので夜着の上に手近な上着を着て、部屋から出ようとする。

そのときに、暗い部屋で鏡の中の自分と目が合った。
薄い、体。

まるで十をいくつか過ぎただけの子供のよう。

だからあの方も、薄着になった私を見て何も思わなかったのだろうか。それとなく薄着になることを拒絶してみたりもしたが、あの方は何も考えることなく『脱げ』と言った。

私が異性であることも、年頃の少女であることさえ考えていないようだった。

そこに絶望こそすれ、安心することなどないというのに。どうしてあんなふうに、あの方は私を見れるのだろう。

私だったらきつと動揺すると思う。想っている方の体の線が顕わになるだなんて、考えただけでも動悸が激しくなる。いや、きつと想っているかた以外でも、動揺はするだろうと思った。

それなのに、あの方はどこまでも冷静で何でもないように私に服を脱ぐように促した。

「確かに、動揺するまでもない体ではあるけれど」

振り切るように鏡から視線を外し、部屋から忍び出る。原則夜間の外出は禁じられているが、そんな決まりあってないようなものだと知っていた。

だから音を立てないように廊下を進み、素早く外に通じる扉から出た。分かつてはいるけれど、やはり緊張はするらしく、いけないことをしているのだという不思議な高揚感と恐れがあった。

手元のランプで地面を照らし、真っ暗闇の道を進む。

東屋に近づけば近づくだけ、宮殿の明かりは遠のき、暗闇がより一層近くなる。小さなランプ一つでは、照らされる地面などたかが知れていて、たちまち足元以外を暗闇に飲み込まれてしまった。

ざわざわと少し冷たくなり始めた風が木々の葉を揺らしているのは、ほんの少し気味が悪い。

それでも本を翌日までおいておく気にはなれず、仕方なく足を速めた。

心細さが不安をより一層大きくして、何かに追われているのではないかという錯覚をもたらす。自分の足音だけのはずなのに、どうしてか周りに人がいるような気配を感じてしまった。

逃げ込むように管理室へ入り、部屋の明かりをつける。

そこでようやく息をつけた。

「よかった。あった」

祖父の数少ない形見の本は、もう何十回と読み返しているのでロボロだ。

その本は古いもので、決して正しいだけの知識ではないし、薬学というよりは呪いじみたものも多い。ついでに新しく見つかった効能などは書いていないもので、決して教科書になるようなものではない。

それでも祖父が大切にしていたように、大切にしたかった。

身分が違々と自覚しつつ、それでも先代王に友人として仕えた祖父が羨ましかったのだ。

祖父は王を『良き友人』と呼び、王は祖父を『かけがえのない人間』と呼んだ。

それは今の私からしてみれば、羨ましいという他ない。ずっと傍にいたのだから。ずっと変わらず、その関係を保てたのだから。

羨ましくてたまらない。

私は、我がままだ。

友人でいることさえ難しいこの関係で、さらにそれ以上のことを望もうとしているのだから。欲深くて、醜いのだ。もうずっと、こんな想いを抱えている。

醜いと思うのに、アルを想う気持ちを止められない。

「帰ろう……」

悩んでももう遅い。

ならばひたすら隠して、押し殺して、そうやってあの方の傍にいるしかない。捨てられないなら、ずっと持つ以外ないのだ。

消せないなら、せめてあの方に分かってしまわないようにしなくてはいけない。それがけじめだし、祖父と先代王に対する礼儀だ。

今私に職を与えてくださった、王への礼儀でもある。

ランプを持ち直し、ずれ落ちかけていた上着を引き寄せて管理室から出た。それから真っ暗な闇に覆われている、小さな東屋を見る。そろそろと、足がそこへと向かった。そこは私が唯一あの方に近づける特別な場所。

誰からも干渉されず、あの笑顔を独り占めできる場所。大切な、大切な――何にも替えがたい場所なのだ。

彼がいるはずもない。

いてはいけない。

頭では痛いほど分かっていて、心でもそれを理解はできているのに、どうしても言うことを聞かない足はそこへと向かっていた。

分かっているのに胸は早い心拍を刻み、耳元で心臓が鳴っているようだった。この音が、どうして外に漏れないのかと疑問に思ったのは一度ではない。

暗闇に沈む恐怖ももう感じなくなっていて、ひたすらに暗いその場所へと足を踏み入れた。

外からの視界を遮るように植えた、背の高い植物を抜けたとき、ぼんやりと光が目に入った。ランプの光があったのだ。

それと同時に、ありえない映像が目の前に映し出されて、自分の目を疑った。いるわけもない、はずなのに。どうして。

「アルバート、さま……？」

どうして、いるの。

夢なの？ 現実ではないの？ 私は夢までアルに支配されてるの？
もう、幻を見るくらい自分は追い詰められてしまっているのだろうか。自分が望む像を、まるで目の前にいるように結んでしまうほど、私はアルが好きなのか。

そうまで王や祖父を裏切りたいのか。

そう思った矢先に、アルは小さく私に微笑みかけた。

違う、これは幻なんかじゃない。幻なら、アルはこんな辛い笑いをしない。

こんな——いつも王族として誰かに笑いかけるみたいな笑い方を、私が望んでいるはずもない。ならこれは、本当のアルなのか。

「どこか、お怪我でも？ あ、誰か呼びますっ」

どこかに怪我をしているから、それを隠そうとしているから、そんなに余所余所しい笑顔で私を見つめるの？

そこまで私を遠ざけたい理由は何なの。そんな笑顔、見たくなんてないのに。

そう思う自分とは裏腹に、アルが伸ばしてきた手にどきりとした。普通のことははずなのに、どうしてかその手に自分の肌が触れるのだと思うとどうしようもなくなってしまった。

そして止まってしまったその手に、落胆と安堵を感じるのだ。

作り笑いに騙されて——いっそ、他の人間みたいに誤魔化してほしい——

誤魔化されないことを誇りつつ、何もできずにただ見ているだけの自分が嫌になるんだ。

いっそ騙されたらどんなに楽かと、本当になれば絶対に嫌だと思

う救いを考えるんだ。そしてまた、好きになるんだ。

25. 5話 作り笑いに騙されて（後書き）

ヒーローが病気並みなのは、私にはよくあることなのですが、ロインが病気気味なのは珍しい気が……。

26話 一日一目

部屋へ送っていくまでの道のりをゆっくり歩く。彼女の手を握ったまま、一歩一歩彼女に合わせるようにして。暗闇の中でも、道を違えたりしないように。

一日一目 ―会えれば満足なんて―

「この辺でいいですよ？ わざわざ送っていただかなくなっちゃって」手を繋いだまま彼女は居心地が悪そうに零す。ずり落ちそうな上着を、繋いでいない方の手で押さえつつ、彼女はこちらを見上げた。「俺の気が済むんだ。付き合ってくれ」

手を離す気にはなれず、そのまま小さな宮殿の造りをした官舎の中へ入った。一度か二度ほどしか入ったことのないそこは、元乳母のマリアのいる官舎より古くて狭い。

年季の入った壁や照明が目に入り、どこか落ち着いた。煌びやかな飾りも何もないけれど、温かくて心地よかった。

「今日は、お会いできませんでした」

「そう、だな。今日は忙しかったから」

建物に入れば、瞬く間に夏の暑さが戻ってくるように感じた。

彼女が暑くないか確認しようと隣を向けば、案の定額に汗をかいた彼女が見える。手を繋いでいるから余計に暑いのかもしれない。

じつとりと汗ばんだ手を離せば、少しヒンヤリとした風が手を掠めた。

「脱げばいいだろう？ 上着」

「寒いんです」

「……汗、かいてるぞ」

頑なな口調の、彼女の額を拭いてやる。一瞬身を引いて顔を赤くして、彼女はこちらを見つめた。

意固地になっている理由はわからなかったが、彼女の顔を見ると説得が難しそうだと分かる。こういう顔をするときは、大抵でこでも動かないのだ。

「アルバート様、もう少し上着を貸してください」

離れたままの代わりに、彼女は両手で上着を掴んだ。

そこまで言うので、『ほどほどにしておけよ?』と言いつき聞かせれば、笑顔を返された。最近見ることがなくなっていた満面の笑みが現れ、一瞬体が揺れた。

幼い頃と変わらない表情なのに、その表情を形作る顔は明らかに違っていた。

「最近、お忙しそうですね」

「一応これでも、優秀な王子だからな」

もう一つの理由としては、俺を街へ下ろさないようにしているからなのだが、それは言わないことにした。

「東屋に毎日行きたいんだがな」

「お忙しいなら、仕方ないです」

満面の笑みはもう消えていた。

淡い大人びた笑顔で、まるでこちらを諭すようなことを言う。しかしその顔が僅かに翳っているような気がして、その頭を引き寄せた。

彼女の頭が胸に当たる。思ったよりずっと高い体温がじんわりと広がった。その広がる体温とともに感じる感情はなんだろうか。

「俺が毎日行きたいんだ。楽しみを取ってくれるな」

彼女と会えば、心がひどく落ち着く。

温かくて、離れがたくなる。

その安らぎを求めているのか。彼女の栗色の髪を眺めながら考えた。手の下の髪は柔らかい。黙ったまま胸に頭を預けている彼女は、一体何を考えているんだろうか。

体を傾けて彼女の顔を覗き込めば、赤い顔のまま固まっているのが見えた。

「リゼット？」

「私だって！」

急に彼女が顔を上げた。顔を下げている自分と、上げた彼女の距離が一気に縮まった。

身長差があるのでそんなに近くは感じない。が、動揺したのは事実だ。一方、さっきまで真っ赤だった彼女はそんなことを気にせず口を開く。

彼女の恥ずかしがる基準が分からない。

「私も、楽しみにしてます」

何を言い出すかと思えば、と苦笑した。勢い込んで話すから、何を言われるかと思っていたが。

「そうか、それならいいが」

「はい」

そこでようやく自分たちが、どれほどの距離で会話しているか気付いたらしい。

少し色が治まったと思った頬に、再び熱が灯る。紫の瞳は大きく見開かれ、次いで目にも止まらぬ速さでその場にしゃがみこんだ。

耳まで真っ赤になっていて、どうやら勢い込みすぎて気付かなかっただけで、恥ずかしいことではあるらしい。

「す、すみません。あの、色々一生懸命で」

頬に手を当てて、リゼットは叫ぶように言った。一生懸命なのは、頬を見れば分かった。

「いや、よく伝わったぞ？」

「アルバート様、私をからかってらっしゃいますね？」

むっとしたような彼女の声に、いや？ と否定形で返す。いつの間にか戻っていた空気に、そっと息を吐いた。

26話 一日二目（後書き）

アル視点、その他視点合わせて30話超えました！
先は長いですが、のんびりとお付き合いください。

27話 お手をどうぞ

危なっかしいのは昔からだ。今更咎めることもない。ただ毎度毎度、心臓に悪いのは事実だった。彼女を見ていると命がいくらあっても足りない。

お手をどうぞ ― 危ないから手を繋ぐだけ―

森へ入ると心が静まった。

すうっと頭の中がすっきりとして、最近悩んでいた様々なことが消えていった。隣を見れば、リゼットがオロオロとついてくる。男物の服を着ているのに、フラフラと危なっかしい。

大体、こういうとき素早く動くための、その服装じゃないのか。森の管理人であつた祖父殿の後について歩いていたのだから、慣れでもいいと思うのだが。

まあ、もし慣れていたら森で足を挫くようなことはない、か。

「ア、アルツ、バート様。待って下さい」

躓きつつ、こちらへ進んでくる。こちらは歩いてもいなければ、動いてもいない。

むしろ後ろを振り向いて、いきなりいなくなった彼女を見つけに戻ってきたのだ。手を差し出せば、一瞬躊躇った後に手を預けてきた。

細い指先を掴んでゆっくりと引き寄せる。軽い体はそれだけでこちらに来了。こんなに軽くて大丈夫なんだろうか。

「あの、ありがとうございます」

「危なっかしいな」

獣道を先導しつつ、自然にその手が離れた。するっとごく自然に切れてしまった繋がり、惜しいとは思わなかった。

しかし先程まであつた僅かな温かさを含む手がないことに、小さ

な違和感を感じてしまった。きゅつと空になった手を握り締めて、その感覚を押し殺す。

感じてはいけないモノにしか思えない。

「随分と入り組んでるところだ」

「先王が、この奥に薬草園を作ることをお許しくださいましたから」自分の祖父に当たるその人を、直接には知らない。

しかし彼女の祖父殿とは大分親しかったようだ。草木を愛する友のため、また役に立ちたいと薬草を育て始めてくれた親友のため、先代の王は森の一角を薬草園とした。

そしてその管理を友に任せたのだ。そこそこの年といった王族以下大臣級の間人なら皆知っていることだ。

「守っているのか。お前が」

「祖父と先王の絆、ですから」

祖父殿がなくなって数年後、荒れ果てていたそこを彼女は少しずつ建て直し始めたらしい。

誰も手を入れるべからず、という暗黙の了解を破れたのも、彼女が最も愛された孫娘だったからだろう。

おじいちゃん子だったと言う彼女にしてみれば、手を入れられず荒れ放題になっている薬草園の方が忍びなかったのだ。

「こんな道ですから、アルバート様は東屋でお待ちくださいと」

「祖父の人となりを、知りたかったんだ」

薬草園の存在自体は随分と前から知ってはいた。

しかし行こうにも、正確な道を知っている者はいなかったのだ。

また彼女と再会してからも、彼女がここを建て直していることは知らなかった。

最近やっと知って、ずっと来たいと思っていたのだ。素晴らしいと言われている祖父の姿を、捉えたかった。見たことのない人の姿を。

「くれぐれもお気をつ……きゃ」

そう言ったそばからリゼットはつんのめた。前のめりに倒れこん

だ彼女の腰を、寸でのところで掴まえる。思わずため息が漏れた。腕の中の彼女も安堵したように力を抜く。

「リゼット、気をつけなければならぬのは、多分お前の方だ。前も下も気をつけながら歩け」

そろそろ起き上がった彼女に、怪我がないことを確かめてから手を差し出した。

体勢を直すための助けではなく、初めから倒れないようにする手立てだ。腰を解放された彼女は不思議そうにこちらと手を交互に見つめた。

その様子がじれったくて、半ば無理やりに彼女の手を掴む。

「あっ、あの。アルバート様」

「リゼは危なっかしいから」

言い訳のように聞こえたかもしれない。

わざとらしく幼い頃呼んだように、愛称を口に乗せる。そうしなければ、今手を繋いでいるのは妹ではなく、一人の女性だと思ってしまうそうだった。

改めて掴んだその手は僅かに冷たく、しかし確かに生きている人間特有の温かみを持っていた。あの頃に比べて、よりしなやかに細くなっている。

「こけないように、こうしている方が早いだろう？ 毎回心臓を止めるのも嫌だしな」

「でも」

遠慮する彼女を見て、少しだけ手を離す。手の中にある温かくて、それでも少し冷たい手が一瞬戸惑った。

「お手をどうぞ、お姫様。葉草園までご一緒しましょう。その間、護衛する任をお与えください」

「ふざけないでくださっ」

今度は足元の蔦に引っかかる。頭から落ちる彼女を引っ張り上げ、しっかりと手を掴んだ。冷たかった手が途端に熱を持つ。

「意見なら聞くが？」

「いえ、あの……。よろしくお願いします」

さすがに諦めたらしく、大人しく手を預けてきた。

僅かにぎこちないその手を握り、引っ張らないように注意しながら歩き始めた。何度かこけかけ、その度に握る手の力を強くした。

その繰り返しは幼い頃と変わらずに、安心感を与えてくれる。自分の手の中にある手は、紛れもなく妹役の、少女の手なのだ。女性ではないのだと。

28話 とりあえず

仕事が一段落して立ち上がった。うんと体を伸ばし、窓の外を見やる。いつもの東屋は、王宮の方からあまり見えないのが残念で、森が広がる一体にしか視線を向けることができなかった。

とりあえず ―暇になれば、彼女の事を考えてみたり―

「アル、まだ終わってないよ」

「終わってはいませんが、休憩は必要ですよ、兄上」

書類を兄の机に置き、侍従の淹れてくれたお茶を手取る。真面目な兄はペンを持ったまま、こちらを見て苦笑した。

二十歳を過ぎた男にしては白くて、細い。しかしその頭には、世界各国の知識が入っており、異国の語も話せた。

勉学の才能は他の追隨を許さず、いくら努力しても兄と同じようにできなかった。

真面目な気質は王から信頼を得ており、病弱であるにも拘らず未だ王位継承権第一位の座を守っている。

王になりたくないこちらとしては、願ってもない状況だ。今のままの方がありがたい。

「君は要領がいいね、相変わらず。家庭教師が期待したとおりに育ってる。大臣達も感心してたよ」

「そうでしょうか。雑だと王には呆れられましたか」

「そんなことはないだろう？ アルはとても優秀だと聞いたよ。剣術の腕も上がっているとか。兄としても鼻が高いな」

兄がイスから立ち上がり、ソファの隣に座る。一人分沈んだはずだが、レオンが座ったときに比べればあまり沈んだ感じがしなかった。

この前寝込んだときにまた痩せたか？ と心配してしまう。

口に含んだお茶は、兄の好む茶葉らしい。香りが豊かというわけでもなく、味もどこか控えめだ。口に含んだところでやっと分かるほどの香りは甘く、リゼットの作る茶菓子によく合いそうだ。

「また新しい本を入れたそうですね」

「アルも好きそうだったよ。薬草の本だから、暇になったら行ってみるといい。好きだろう?」

兄もノースも、書物庫の管理人でさえ、俺が薬草学の本が好きだと誤解している。

様々な分野の本に手を出すことは事実であるが、薬草に詳しいわけではない。むしろ身近によほど詳しい人間がいるので、知る必要がないとさえ思っている。

それなのに誤解されるのは、多分持ち出す本がほとんど薬草学の本だからだろう。その本が一人の少女に抱えられていると知っているのは、自分一人だけだ。

一般にもっと開放すればいいのに、とすごく思う。

「ありがとうございます、後で見ます」

新しい本が入ったと知れば、彼女はどんな顔をするだろうか。きつと嬉しそうな顔をして、瞳をこれでもかというくらいに輝かせるんだろう。

抑えきれない好奇心をその顔に映し、そのときばかりは昔のような口調で話す。

そして稀にだが、『アル』と呼ぶこともある。再会して以来、『アル様』と呼ばれることさえ少ない。『アル』になると、もう皆無といって差し支えない頻度だ。

『アル』と呼ばれると、無意識の中で自分が未だ『アル』であるということに、喜びを覚える。

アルバートでもなく、敬称つきでもなく、ただ出会った当時のままの名前。それがどれだけ得がたいものか、彼女は知らない。

自分たち王族が求めても求めても、滅多に手に入れないものであると。知らないからこそ、嬉しい。

「最近、よく笑うようになったね。一年前より、ずっといい顔をしてる」

「兄上の体調がよくなったからでしょう」

彼女と再会する前の夏。兄は重い病に倒れた。

今度こそ駄目かもしれないと言われた。多分、兄の言うようにあまりいい顔はしていなかっただろう。

王位継承権が一気に迫ってきた。兄が苦しんでいるときに、後継者がいなくなると騒ぎ始める人たちが嫌で仕方なく、書物庫に籠ることが多くなった。

兄が回復してもその不信感は治まらず、しばらく仕事も手につかなくなった。今思えば、王族自体への不信感だったのかもしれない。「去年の秋くらいから、だんだん顔色もよくなった。丁度、あの子が来たくらいだよね」

「は……？」

確かに元へ戻り始めたのは、去年の秋くらいからだし、そこに不可欠なのは『彼女』^{リセット}だ。だからって何故、兄がその事実を知っているんだ。

「ほら、あの子。ペーターさんところのお孫さんだろ？」

「リゼットの祖父殿を知ってらっしゃるんですか？」

頭にいくつもの疑問符が浮かぶが、兄は実に清々しく笑った。当たり前じゃないか、と前置きして語り始める。

「あの森の管理人は、大体優秀で経験値もある。当然のように接する機会は色々あっただろう？ それに、あの子は特例だよ」

「はい……？」

暇になって顔を思い浮かべるのは、自分だけのはずだ。話の合間に、何気ない会話に、彼女を結びつけるのは自分だけだと。

それはどうやら違うらしい。

「先代の王が亡くなっても、ずっと守られ続けてきた『あの』葉草園を任せられた、特例中の特例だ。彼女が許さなければ、たとえ王でもそこには入れない。」

まあ、これを知っているのはごく一部の人間だよ。庭師にいたっては、現在の森の管理人、三人しか知らない」

君の友人はそこまでの人物だったってこと、アルは知らなかっただろう？

兄はイタズラを成功させた子供のような顔をして笑った。驚きすぎて声も出ない。

リゼットがそれまでの力を持っているとは知らなかった。いや、隠していたのだろう。存在は知られているが、正確な位置が秘められている薬草園だから。

薬草園に行きたいとふと思った。この前行ったときは、そんなこと知らなかったから。

薬草園に入ることが、そこまで重要なこととは知らず、ただ普通に入ってしまった。

バレたら父になんと言われるか。王でさえ入るのが許可制なのだから。彼女の顔を思い浮かべて笑った。

28話 とりあえず（後書き）

たとえば紅茶に、本に、他人の言葉に。
彼女の影を見出すアルでした。

29話 与えられた資格

仕事が終わってすぐに向かうのは、もちろん東屋だった。夏の氣配がわずかに緩み、少しずつ秋の氣配が増してくるのを感じた。

与えられた資格 ―任せられたのは、二人の形見―

「クライヴ様が、話されたのですか？」

「あのときの驚き具合を教えやりたい」

リゼットに向かってそう言えば、それはそうですねと静かに納得された。そして東屋の近くで座り込み、こちらに背を向けて土いじりをしていた彼女は立ち上がる。

彼女はそのまま膝や手についている土を払い落とし、こちらに視線を合わせて首を傾げながら笑った。

おいてあった水で手を洗い、丁寧に拭いてからこちらに近づいてくる。

「クライヴ様は、私のことをそのように」

「からかわれたぞ」

むすりと返せば、リゼットは再び笑い『行ってみます？』と続けた。

それに頷けば、彼女はこちらに手を向ける。小さい手がこちらの手を掴み、ゆっくりと引っ張ってきた。いつもは触れることさえ『恐れ多い』なんて言うのに。

「よく他の人にバレないな」

「他の人にとって私は、祖父の後を追いかけていた幼子のままですからね」

二年目ですから、本当ならこんな大きな仕事任せられるわけないんですけど。

リゼットが苦く笑って、歩き出す。東屋から程近い森へ入るには

少し歩くので、馬に乗ってくればよかったと思った。

それでも緩く繋がった手を見れば、これでもいいかと思ってしまう。

「どうしても、忍びなかったんです。初めは、立ち入り禁止が暗黙の了解だということを知らなくて、ただ壊れた鉢などを直してたんです」

彼女にしてみれば、その薬草園は小さい頃から出入りしていたところだ。立ち入り禁止で、まして他の人間は場所さえも知らないなどと、思いもしなかったんだろう。

ただ『祖父にとって、かけがえない場所』。そんな印象しか持っていなかったのだろう。

「だけど、王様に呼ばれて、この薬草園を守る仕事をいただきました。すごく、誇らしかったです」

「そう、か。そうだろうな」

「はい」

繋いだ手に力を込められて、思わず彼女を覗き込む。彼女は笑って、より一層繋いだ手に力を込めた。それでも全く痛くなくて、笑ってしまった。

「私が継いだのは、祖父の仕事だけではないんだと」

「仕事、だけではない？」

父が何を思っけてリゼットに薬草園を任せたのかは知らない。

何を思い、王の立ち入りさえ禁ずる権限を与えたのか。それは分からない。

それだけその薬草園を大切にしているんだろうか。実務一辺倒のあの人にしては珍しい。

「私にとって、この薬草園は祖父の数少ない形見の一つで、それは王様にとっても変わらないんだなと。だから、二人分の形見を任せられているんだと」

小さな門に手をかけて、彼女は胸を張った。いつもは身分がどうか、自分には不釣り合いだとか、そんなことばかり言うのに。

この薬草園は、彼女をここまで変える力があるのかと感心した。以前来たときもその物珍しさにあちこちを見回したが、今回もやはりぐるりと辺りを見渡した。

「最初はね、ちよつと迷った。いいのかなって」

口調が幼くなって、思わず驚く。再会したときにはすでに敬語だったので、なおさらだ。

その口調は男物の衣にも、特例と称される庭師の肩書きにも似合わない。だけど懐かしいその話し方は、紛れもなく『リゼ』のもので、心の奥に何かを灯した。

繋いでいない方の手を伸ばし、その頬に触れる。びくりと顔を上げるリゼットに、初めて会ったときの面影を探した。

いくつも見つけられたのに、どれもあの頃のままではなかった。

「アル、バート……様」

「呼び方までは戻らないか」

丸くて柔らかいだけだった頬は、いつの間にか年頃の少女らしい色があった。無闇に触れていいものではないのだと自らに言い聞かせる。

彼女と目が合えば、彼女はふつと視線を下げてこちらから目を外した。伏せられていた目を縁取る睫が、細かく震えている。

「二人分の形見か。責任重大だからな。迷って当然だろう。でも、決めたのはお前だ。やるんだろう？」

「はい、精一杯努めるつもりです」

するつと繋がれた手が離れた。

さっきまで強く握っていたはずの彼女が、手から力を抜いたのだと分かる。離された手は何の抵抗もなく体の横で揺れた。

その手に目をやり、眉を寄せる。

自分の心の変化に、気付いてしまったのだ。気付くべきではない、その変化を。少し前なら何でもなかったはずなのに。

手を繋ぐのも、離すのも、大した心情変化はなかったはずだ。自然だと、信じていたから。妹役の彼女と手を繋ごうが、離そうが、

それは大きなことではないと思っていた。

それなのにどうして今更、離したくないと思っていたのか。
その離れてしまった手を、どうしてまた掴まえたなどと思ってしまったのか。

29話 与えられた資格（後書き）

じわじわと迫る感覚に動揺するアルでした。以前手を繋いで、離れたときには感じなかったのに、みたいな。

30話 彼女より大切

目の前には兄、イスの後ろにはレオン。二人に挟まれて逃げ場がなくなり、思わず肩をすくめた。二人して何がしたいんだ、一体。頭を抱えたくなるような光景だった。

彼女より大切 ―そんな女の子、いるわけない―

「え？ リゼってそんなに特例なんですか？」

「そうだよ。だからレオン、簡単に手を出してはダメ。我らが王様もさすがに怒るかもしれないよ」

始まりは何だったのだろうと思い、思わず額に手をやった。

仕事をしていると兄が来て、三人でお茶をすることになり、何故カリゼットの話になった。

兄とレオンの共通点など色々あるだろうに、狙い済ましたかのようにその話題になった。

二人して似たような笑顔を浮かべてこちらを見るのだから、地獄以外の何ものでもない。（兄と自分は似ているので、当然のように三人とも似たような容姿になる）

「そうか。リゼってそんなにすごいんですね」

「レオンはリゼットさんのことをそんな風に呼んでるの？ 親しいのかな？」

兄に対してレオンは敬語だ。三人の中で一番年上だからだろうか。物心ついたときから敬語だ。同い年のこちらには、そんなことしないのだが。

「いえいえ、アルほどじゃありませんよ」

「アルも親しいんだったね」

二人してこちらを見る。

一人は自分と同じような配色で、自分よりずっと繊細な顔立ちを

している。その瞳に宿るのは、知的に輝く光だった。

もう一人は自分とよく似た造りの顔立ちで、こちらより少し色素の薄い髪と瞳を持っている。その目は好奇心に満ち溢れていて、こちらから何もかもを聞き出そうとしていた。

二人して自分と似ているだけに、どこか不気味だ。

「で、リゼットさんに手を出す気はなくなったかな。レオン」

「いやですね。僕だって普通に恋に落ちることだってあるんですよ？」

同時ににこやかな笑顔を作り出し、お茶に手を出す二人。

形だけ見れば、穏やかな茶会だが、話している内容は聞いても仕方のないことだ。正直、聞いていて気分のいいものではない。むしろ、腹が立ってくる。

どうして兄とレオンの会話に、リゼットが入ってくるんだ。親しくないだろ、二人して。

「レオン、リゼットを気安く呼ぶな。そこまで親しくないだろ」

「アルよか親しいわけじゃないけど。でも、アルよりリゼのこと、分かってると思うよ」

挑戦的な瞳に出会って、ぐっと唇をかみ締めた。

何が言いたいのかわからず、ただ遠回しに非難されていることは分かった。

それは兄も同じようで、いつもはのんびりと構えている人が僅かに眉を寄せていた。何が言いたいんだろうか。二人してそんな顔をして。

「何が言いたい、レオン」

「ねえ、アル。君、本当にリゼットのことを大切に思ってるの？」

ふざけたような、からかうような声色はなりを潜め、レオンはこちらを向いた。

『リゼ』から呼び方が直っていて、その瞳は厳しい色を映している。笑い飛ばすにも、無視するにも真剣すぎて、肩を揺らして戸惑った。

当たり前のことを聞かれた。

それなのにどうしてか、即答できない自分がいる。

「当たり前だろ。おかしいことを聞くな。リゼットは妹みたいな友人だぞ？ 大切以外のどんな言い方が当てはまる？」

彼女より大切な人なんているわけがない。そんな女性も友人も、いるわけがない。レオンでさえ、及ばないと言ってもいい。

彼女は大切な友人だ。

何を悩むことがあると言うんだ。いつもどおりに、これまでどおりに、そう言いさえすればいいはずなのに。

どうして、声が震えてしまいそうなのか。

「ふーん。大切、ね」

「アルの言う大切は、過保護の同義だね」

レオンが席を立ち、イスの後ろに回りこむ。

兄はにつこりと笑ってカップを置いた。過保護だろうか。

あの細い手首や、頼りない肩、軽い体などを見れば、手を貸してやらなければいけないと思わざるを得ないだろう。彼らは違うんだろうか。

——本当に男か？ 騎士の心得なんか、習ってないとも言うつもりか？ どうやったって、彼女らは『守るべき』対象だろう。

「違うよ、アル。それは女の子皆が大切っていう話になっちゃう。

リゼットが、じゃなくなる」

「聞きたいのは、その大切が彼女だけである理由だよ」

彼女だけの理由？

そんなもの、考えたことがなかった。幼い頃会ったからか、アルと呼んでくれたからか。普通に接してくれたから？

そのどれもが、そうだと言えばそうなのかもしれないと思う理由だった。しかしどれも決定的というわけではなく、あやふやなことは変わらない。

「気付いたら大切だった。それだけだ。二人して何が聞き出したいんだ」

苛立ったのは二人にか、自分にか。

逃げるように立ち上がり、部屋を出ようとする。しかし逃げ場である東屋に、この問題の中心である人物がいることを思い出し、再びイスへ座りなおした。

手を伸ばして取ったカップは生ぬるく、口に入った液体は渋い。眉を寄せて二人を見た。

「君の行動は、まるで恋人への接し方だ。そう思わないのかな。僕もレオンも、それが聞きたかっただけだよ」

「ありません。そんなものと一緒にしないで下さい、兄上。王子の恋人ほど、危険な立場はないことをご存知のはずだ。そんなものに、巻き込むつもりはありません」

このとき、どうして自分の口から『恋愛感情ではない』とは言えなかったのか。

恋ではないと否定しさえすればいいなんて、思いつきもしなかった。

30. 5話 立場と心（前書き）

多分名前を覚えてもらえてない、お兄ちゃん視点。ちなみに……私もよく間違えます。

ということで、クライヴ視点。

30. 5話 立場と心

出て行ってしまった自分の弟を見つめながら、自然とため息を吐く。隣のレオンも同じようで、苦笑いを抑えないままこちらに視線を寄越していた。

その視線にこちらも小さな苦笑いで答える。

分かりやすすぎる我が弟の行動が、何だか心配で愛しかった。自分にはどう足掻いても持てないものを、彼は持っているのだと分かってしまう。

「困った弟だ」

「まあ、アルですから」

王子、というその立場は複雑で面倒だ。いくつもの制限に縛られて、自由さえほとんどない。

まして第一王子である自分の体が弱いことから、第二王子である彼にも跡取りとしての教育が施されている。

多分、他の国の第二王子よりは大変な立場に立たされているのだろう。たとえ明日、自分が死んだとしても彼ならやっていけるはずだ。

普通の学校へ行き、剣術を修めようと、彼はどこまでも跡取り候補なのだ。

自分が王位についても、補佐役ではなく王としての仕事を分担させられるのだろう。気の毒であると思う反面、心強く思ってしまうのは少し後ろめたかった。

「アルは、気付いていないらしいね」

「優しい方です。自分のせいでリゼットが傷つくところを見たくないのでしょう」

臆病とは、彼は言わなかった。

「でも、本当は、怖いだけじゃないかな。認めるのが。いや違うな。認めて、離れていかれるのが、だ」

ぽつりと呟いてしまった言葉に、手遅れだと思いつつ苦い顔をする。

つい出た本音は零れたまま戻ることもなく、それを分かっているのに手で口を押さえた。分かっている、口に出してはいけない類のものだったのに。

それはアルにも言えることであるし、自分にも言えることだからだ。言うてはいけなかったことだと悔やんだ。

「彼は、そんな人間ではありませんよ。何より大切な人間の未来を守りたいという人だ。ご自分の変化に気付けないだけで、気付いたらきつとりゼットのためになることをするでしょう。」

それは、私が保証します」

力強いその言葉に、『それもそうだね』と小さく同意した。

彼は強い。心の底からそう思う。

自分より年下で、王族に向いてないのかもしれないと思うような性格で、でもとても優しく強い。自分の弟はそういう人間だ。

そういうふうに、周りの人間が育てたのだ。目の前にいる、彼の友人であるレオンもその一人だろう。

「君たちが、手塩にかけて育てた第二王子だ。自分の保身のためだけに、気持ちを認めないということではないのかもしれないね。」

でもね、レオン。僕は思うんだけど……。一度自覚してしまえば、恐れを抱くのは当然だと思うんだ」

それはアルだけではなくって。全ての人に言えることだとは思わけど。

呟きながら、ぼんやりと弟のことを思い返した。

彼は優しく、強く、とても繊細だ。誰よりも人このことを考える反面、その結果自分が傷つくことがよくある。

兄の自分が病床にいる間、彼がどれだけ傷ついてきたかは何となく分かっていた。だから、彼がこれ以上傷つくのが怖い。

「強くあるとするのは、いい考えだと思うよ。実際、そうじゃないと王族なんてやってられない。」

だけどね、強くあろうとするのと強いことは違うんだ。リゼットさんが傷つくかどうかはさておき、僕は弟が傷つくのを見てられない」庭師の少女を見たのは、何年か前だ。

ペーターさんが生きていた頃に一度会い、そしてこの一年で再会した。印象は変わらず、最初の頃のままだ『可愛い女の子』だった。

好奇心の強そうな目で、聡そうな眼差しで、こちらを見ていたのが印象深い。そしてその印象どおり、彼女は聡かった。

再び会ったときの礼と口上はすべらかで、緊張の欠片も見えなかった。父と対峙してもそれは変わらず、ただ静かな目であの薬草園のことを語った。

その彼女が、アルの話が出ると少しだけ動揺したのだ。

父がどう思ったかは分からないが、近くにいた自分にははっきりとその動揺が伝わった。そして二人つきりで会ったときに確信したのだ。

『彼女はアルに恋をしているのだ』と。

身の程知らずとは思わなかったが、随分と辛い選択をしたものだった。彼女ならば、他に選びようもあるのに、と。

「傷つかず、手に入れられるものは意外に少ないですよ。クライヴ様」

「分かっては、いるけどね」

自覚していない弟と、自覚しつつ隠している彼女。その二人の未来など、自分がどうして計れるだろう。

「『王子の恋人ほど、危険な立場はない』か。確かに事実だ」

面倒なことこの上ないが、自分たちの交際相手や結婚相手は国の将来さえ左右する。

花嫁選びを失敗しようものなら、国はたちまち傾いていくのだ。

そういう例を、自分はいくつも知っている。

そしてそうなるつもりはサラサラない。もちろん、父も母も一緒だろう。そしてそれは、弟も例外ではないのだ。不幸なことに。

「恋してないと、一言言えば済んだのにね」

「巻き込みたくないとも、言ってみましたね」

近いうち、彼は自覚することだろう。

そして、苦しむことだろう。

彼らの運命がどうなるかは分からないが、どう転がろうとも苦しむことは事実だった。それだけ王子という立場は重くて、色んな制約が立ち塞がるのだ。

こういうとき、何もしてやれない自分が歯痒かった。彼が一番傷ついているときも、自分は寝ているだけだったから。

「賛成できないのに、傷ついて欲しくないと願う僕が一番臆病者かな」

立場的に、応援はできない。

傷つかぬよう、彼女を守ることもそんなにできない。

父と母が本気になれば、アルも自分も太刀打ちできないことは目に見えていた。それでも、願ってしまうのだ。どうか二人が傷つかぬようにと。

結ばれることを賛成できないくせに、それでも幸せであるようにと願ってはしまうのだ。どうしようもないことに。

「そういえば、あなたもお優しい方でしたね」

「君には負けるよ」

ここにも一人、優しい人間がいた。

アルの影となり、補佐をする彼も、実はとても優しいのだ。普段は色んな言葉や行動で誤魔化されてしまうけど。

立場と心 ―そのどちらも優先はできない―

王子という立場を捨ててしまえば、楽になるよとアルには言わな
いでおこう。彼は躊躇いもなくそれをやってしまいそうな気がした。
だから相反する願いを口にする。

『叶わぬよう』、『幸せであるよう』と。

31話 恋人ではないけれど

恋ではないと分かっている。いや、恋であってはならないんだ。それを言ってしまうえば、この親愛の情は『恋』だと分けられてしまうのだから。

恋人ではないけれど ― だけど、一番大切 ―

「今日は疲れてらっしゃいますね」

「仕事じゃないことだな」

東屋の机に肘をつき、大きくため息を吐いた。

出てきたお茶を口に入れば、先程とは違いしつかりとした味が舌に沁みて、肩の力を抜く。

同じように机の向かい側にリゼットが座り、お茶に手を伸ばした。ごく普通に彼女が自分と同じ席に座り、お茶を飲む。

これだけのことが日常になるまで、随分と苦労したことを思い出す。

王子と同じ席に着くなんて、お茶を飲むなんて……などなど。彼女が出した言葉を反芻した。それでも今の状況を見れば、その苦労も無駄ではなかったのだと思う。

「リゼ」

「はい？」

この狭い東屋の中で手を伸ばせば、彼女の頬に手が届いた。

さらりと栗色の細い髪をかきあげて、耳から顎にかけての輪郭をなぞる。珍しく呼んだ愛称に彼女は不思議そうな顔をして首を傾げた。

自分がどう言えいいのか分からず、緩く笑って人差し指の背で頬を撫でた。

「リゼはいつか恋をして、それからここを出るんだな。ちょっと、

父親の気分だ」

「なっ、にを……おっしゃっているのか」

かしやんと音を立てて彼女はカップをおいた。冷静さを欠いたその動作に、どう解釈すればいいか迷う。

可愛くて、愛しくて、大切に。

人はそれを『恋』と呼ぶ。いくら否定しても、彼らは断言するのだ。それが嫌で耳を塞ごうにも、彼らはそれを許してはくれない。

この心に宿る彼女への想いは、恋情なんかではないのに。

「なあ、リゼ。俺はお前が好きだし、大切に。一番、大切なんだ」

「そんなのっ」

リゼットが呻いた。俯いて、額に握り締めた右手を当てて、絞り出すようにして声を出した。

肩が細かく震えていて、その頼りなさに胸が締め付けられた。どうして大切にしたいのに、自分はこんなに無力なのか。

この胸に宿る想いは、親愛の情ではないのか。

「私も、同じだよ、アル。アルが、大切に大切に……。でも私、アルが王子だってもう知っ」

その細い体を引き寄せて、その言葉ごと抱き込んだ。

苦しくて、切なくて、彼女を取り込むように腕の中へ閉じ込めた。彼女さえ手に入れることができれば、彼女さえ抱きしめていれば、色んなことを忘れられると思った。抱きしめた体は細くて脆い。

それなのに柔らかくて、温かくて、肩口に顔を埋めた。お互いに無理な体勢だったが、そんなこと気にならなかった。

「大切にする仕方が分からないんだ、リゼット。誰よりも、大切にしたいのに」

出会ったばかりの頃、再会したばかりの頃。

今まで自分はどうやって彼女を大切にしていたんだろうか。いや、どうやって自分が満足の行く形で、彼女を大切にしていたと『思っ
て』いたんだろう。

離れている間も、一日たりとも忘れたことはなかった。厳しい剣

の訓練も、様々な授業も、いつか再会するかもしれない彼女を思い出せば乗り切れた。

あの小さい子を、守りたいと思ったのだ。

「大切に、されてるよ」

「そうは思えない」

「勿体ないくらい、大切にされてるのに」

彼女がゆっくりと動いて、腕から逃げ出した。

腕の中のぬくもりが離れる感覚に眉を寄せれば、彼女は小さく微笑んでこちらに回りこんだ。それからそっと近づいて、背に手を回される。

安堵して、それからまた少し切なくなった。恋情が本当にこんなものならば、世の中の人間はさぞや日々苦しんで生きているのだろう。

そんな皮肉が思い浮かんだ。

「アル、大好き。アルのことが――大、好き」

声も出ず、反応も返せずにただ頷くだけになってしまう。

何か言うべきなのに、何も言えず腕に力を込めた。『妹』からのその言葉は、嬉しいはずなのに。どうしてか胸が詰まった。

『兄』として喜ぶべきことじゃないのか。どうして喜べないのか。それは『兄』に向けられた言葉だからか。

「時間なんて、経ってほしくなかったよ」

時間さえ経たなければ、こんなにも悩むことがなかった。

時間さえ経たなければ、彼女を『妹』として愛することができた。何の疑問も差し挟まず、何の苦悩もなく、抱きしめることも、頬に触れることも躊躇わず、自然にできたはずだ。

それなのに、自分はいつの間にかそこに疑問を感じた。周りの人間が、そうせざるを得ないことしか言わなくなったからなのか。

それともいずれ気付かなければいけないことだったからなのか。そんなことは、分からなかったけれど。

「あのとき、時が止まってしまえばよかった。アルが王子様だって

知らない、あのときで。全部、止まってしまえばよかった。そうしたら、もっと」

リゼットが悲しげに喉を鳴らし、それから小さく息を吐いて言った。

まるで、その言葉を押さえ込むように。押さえ込もうとして、それでも押さえ込めなかった言葉が漏れ出すように。

「もっと、近くにいたことができたのに」

その言葉に、胸を衝かれた。

32話 あのととき、氣付かなければ

彼女と再会したのは一年前の秋だった。

塞ぎこんでいた自分を見かねて、ノースが散歩を勧めたのだ。行く気はあまりなかったが、仕方なしに腰を上げた。後にこのことを心底感謝することになるとも知らずに。

あのととき、氣付かなければ ―きつと一生話せなかった―

庭に出れば侍女に張り付かれ、廊下を歩けば貴族に捕まる。

書物庫に行けば氣遣わしげに見つめられ、劍を持てば追い出された。將軍曰く『殺氣立っている人間に、劍を持たせるわけにはいかないから』らしい。

とりあえず何も聞きたくない。何も話したくない。兄の傍にいればいいのかもしれないが、あそこは母が煩いので行く気もない。行くなら今日の夜頃だろうと勝手に決める。

フラフラとあてどなく彷徨い、あちこちの庭を回る。

任された東屋や庭への評価は、そのまま庭師自らの評価になる。そして庭や東屋は各国の貴族や王族の目にも留まる。

だからか、王宮自体の近くや王族個人の離宮にある東屋は、いつも華やかで美しい。垣間見る管理人である庭師たちの性格にも、興味をそそられて笑った。

左右対称の格式高いものがほとんどだが、植えられている花やその配置によって個性が出る。

また、王宮の情報に精通しつつ、首を突っ込まないように指導されている庭師たちは、最低限の礼儀を取りつつ、積極的に話しかけてくることはなかった。

彼らの仕事は東屋や庭を美しく保つこと。そこへ来た客人をもてなすこと。

彼らの中には派閥争いがないらしい。それは羨ましいことだ。是非とも大臣方に見習ってほしい。そんなことを思いつつ、庭をぐるりと見て回る。

そういえば、特に優秀な庭師は三人で森を管理することになっていた。その三人の権力がそれだけ強いから派閥争いなんてものが無いのかもしれないと無意味なことを考えていた。

そして遠めに見える森を見て、労っていた庭師に尋ねる。

「森の方にも確か、東屋が一つあったな。王宮の宮殿から一番離れている東屋だったか」

「はい、殿下。しかし、あそこは、その」

妙に齒切れが悪い。何かあっただろうかと思考をめぐらせ、遙か昔に言われていたことを思い出した。

あそこは『呪われた東屋』だった、そういえば。

「呪いか？」

「その、万が一にも何かあってはいけませんので。御身に何かありましたら……」

東屋は貴婦人達の社交場だ。

そうであれば『アルバート第二王子』が今どんな立場にいるかなど、噂話でとくに聞いているだろう。だからこそ、止めているのか。

第一王子が病で臥せっている今、第二王子アルバートに何かあれば最悪の場合、この国は跡継ぎを失うことになる。

確かにそれは止めるだろうな。他人事のようにそう思った。

「管理人はいるんだろう？」

「それはそうですが、今年入ったばかりの新人です」

王宮の外れ、離宮も近くにないところにその東屋はある。

森に隣接したそこは、訪れる人が滅多にいない。歩いてすぐというわけでもないが、王宮の中なのでそんなに遠いわけではない。

それでも人が少ないのは、その東屋にまつわる噂が実しやかに囁かれ続けているからだ。数代前の王妃やら側室やらが王の寵愛を失

って絶望し、自ら命を絶ったとか。

確かそんな話だった気がする。が、父の頃も数代前と言われ、そして祖父の頃も数代前と言われていたらしい。

なので、『いつの』数代前なのかははっきりしない。むしろこの噂話自体、いつ頃始まったのか分からず怪しい。

そもそも、あの東屋はそんなに古いのか。

「殿下っ」

「心配するな。様子を見るだけだ。その新人にも会ってみたい。どんな庭師だ？」

何故そんなにその東屋を気にしたのか分からない。

人が来ないということに魅力を感じたのかもしれない。いい隠れ場所になるかもしれない、なんて。

「そうですね、優秀ですが無口ですよ。森の管理人の孫娘だったらしくて、今年入ったばかりですがなかなか慣れてます。仕事も正確ですね」

一瞬にして時が止まった気がした。

その一方で、同じような境遇の娘かもしれないと、自分に言い聞かせる。

幼い頃に出会って以来、祖父殿が亡くなって以来、一度も会っていないあの少女だと確信するにはまだ早い。

それなのに、自分の心は喜びに満ちていて、今すぐ東屋に行きたくなる。

逸る心を抑えて声を出した。違ったとき落胆しないように気をつけつつも、どうしても期待せずにはいられなかった。

ずっと、ずっと探していた。

いつか会えれば、と強く願っていた。

「その庭師の名を、聞いてもいいか？」

「リゼット・ディズレーリですが。で、殿下っ?!」

気付けば走り出していて、ここから少し離れた東屋に向かっていった。

正規の道を使うのも煩わしく、道なき道を突き進んだ。手や顔に枝が当たろうが、足に蔦が絡もうが関係なかった。

目指す先はただ一箇所、それ以外に関心はない。ただひたすら足を動かした。

「リゼット、リゼっ」

一日として忘れたことのなかった名を、切れる息の中で呼んだ。ここ数年、心の中だけで呼んでいた名を口に載せれば、その名はすぐに馴染んだ。

ぎこちなさも照れもなく、毎日呼び慣れているかのように自然だった。あの可愛い『妹』にまた会える。

それだけで嬉しかった。

「リゼ」

心が震えたのは喜びから。笑い出すのは嬉しさから。それだけで十分だった。

32話 あのと看、気付かなければ（後書き）

一年前の、どん底時代のアルでした。彼は男前を目指しつつ、どこまでも繊細な人なのだと思います。

【閑話】 関係が変わる前（前書き）

それはもうずっと昔のことだけど。
二人の過去話。可愛かった頃のお二人です。甘め

【閑話】関係が変わる前

緑深い、日の光も僅かにしか差し込まない森。その中で開けた場所だけは場違いに太陽の光を許し、湖の水面をキラキラと輝かせていた。

そこに人影が一つ、ぼつりと現れた。

何かから逃れるように身をよじり、懸命に暴れているが、それもだんだんと大人しくなりついにはびたりともがくのを止めた。それからしばらくすると、小さな嗚咽が聞こえる。

「アルー。動けないよお」

舌足らずだったが、耳に心地よい少女の声だった。幼いのの高すぎるわけではなく、同じ年頃の少女と比べても落ち着いている。

しかしその声は涙にまみれ、ぐずぐずと鼻を吸る音も混じる。そこへ再びがざりと木々が鳴り、人影が増えた。

「リゼ。やっと見つけた。駄目だろ？ 一人で行ってはいけないと」
まだ声変わりを迎えていない、高めの少年の声だ。

燐と涼やかで、それでもその声には隠しきれない優しさが滲んでいた。よほど走り回ったのか、妙に息が乱れていたが、汗を拭った顔は熱気さえ跳ね除けるようだ。

長く伸びた手足に、まだ筋肉のあまりついていない、しなやかな体。ほっそりとしており若木のようなだったが、その中に軟弱さはなかった。

濃い茶髪が太陽を受けてほんのりと薄くなる。その光を受けて、繊細そうな顔立ちが鮮やかさを増した。

少しだけ寄せられた眉は、少女を見つけるとすぐに解かれる。泣き始めた少女の脇に膝をつき、それから身動きが取れなくなった原因を知った。

少年の手が、下ろされた少女の髪の毛を救った。柔らかそうな栗色の髪はすんなりと彼の手に収まる。

「木に引っかかったんだな」

「剣で切ってー」

「勿体無いだろ。すぐ解けるよ」

少年が笑いながら少女の要求を跳ね除けた。

それから繊細な造りの顔には似合わない、肉刺の目立つ手で少女の髪の毛を木々から外しにかかる。柔らかい髪の毛は絡まりやすくなかなか木の枝から離れてはくれなかった。

「だから言っただろう？ 髪は結っている方がいいと」

「結べないの」

「さすがに僕も結べないな」

どうしたものか、と少年はため息をつきながら、それでも髪の毛を解く手は休めない。

しばらくすると、ぱらりと木の枝から髪の毛が離れた。少し痛んでしまったその毛を指で梳きながら、少年はほっと息をついた。

「やってみよう。案外できるかもしれない」

「できる？」

「何でもやってみないとできないものだ、と將軍が言ってたな」

木から解放された少女は、潤んでいた目のままに少年を見つめた。一方の少年は、少女の持ってきた籠の中に入っていた細身のリボンを見つめながら首を傾げた。

やったことのない行動は、それだけで緊張を共にする。

「座って、リゼ」

リゼ、と呼ばれた少女は、大人しく少年に背を向けて座った。長い髪がふわりと浮いて、少女の動きにあわせて沈む。

その様子を見て口元を緩めた少年は、木に引っかかって乱れてしまった髪の毛を丁寧に手櫛で梳いた。それから紅いリボンを手にし、彼女の髪を掬う。

くるくるとリボン巻きつけて、そっと離すが髪の毛はすぐに解けてしまう。

「世の中の女性は、これを自分ですか？」

「お母さんは自分でしてる」

数度この格闘を繰り返し、少年はぼそりと呟いた。

リゼを気にして緩くしていた口調も、厳しい空気を帯びていた。それでも諦めずに髪の毛をまとめてはリボンで止め、解き、またまとめ……と数度繰り返し返す。

それから息をついて、少年は自分の髪の毛をかき上げた。参ったな、と小さく零し、少女の髪の毛を手で梳いた。明るい栗色の髪がさらっと揺れる。

「もっと長くなれば、髪留めで留めるということもできるのにな」残念そうな声色で言って、少年は少女の髪から手を離す。それから立ち上がり、少女に手を差し出した。

華奢といって差し支えない少年の手とはいえ、少女にとっては大きいと感じれる手の平だった。手を預ければ、ぎゅっと握られて引っ張り上げられる。

危なげもなく持ち上げられて、少女は小さくすすくと笑った。

自分の手を引く少年が、とても大きく見えた。

「アルにもできないことがあるんだ」

「練習してくる」

「え？」

「次はくくれるように、練習してくるよ」

ぐしゃり、と少女の髪の毛を遠慮なしにかき乱して、少年は朗らかに笑った。まだまだ子供らしさの残る、幼い笑顔だった。

そのときばかりは、少年も全てを忘れていた。自分が隠している、自分自身の生まれや環境を。彼女に知られたくない、自分のいるべき『場所』を。

忘れることでしか、笑えなかった。忘れたいと、少年が心底思ったことだった。

「貴族様には必要ないと思うよ」

「できないことがあるのは、好きじゃないんだ」

少年がくしゃりと顔を崩し、『貴族』らしからぬ笑顔を浮かべる。

それから少女の両脇を抱え、ふわりと持ち上げてくると回した。少女の長いスカートが風を孕み、可愛らしく揺れる様子を見て少年はやはり思うのだ。

『ばれたくない』と。自分の正体を知られたくないと。この温かくて柔らかい関係を崩されたくない、崩したくないと心から願った。「来週は、葉草の本を持ってくる」

「え?!」

「読みたがっていただろう? リゼは賢いからすぐ覚えてしまうだろうけど」

少女を下ろして、少年は来週の約束をした。いつもどおり来るであろうと、信じて疑わない声色だった。

少年自身、永遠などありはしないと分かっていた。ずっと続くものなどないと、幼いながら感じていた。

それなのに、来週この場所で再び会うことは疑っていなかった。来ないはずがないと、信じきっていた。

「嬉しいっ。すごく嬉しい」

「そうか、ならよかった。森の外まで送っていいこう。祖父殿が心配しておられるだろうから」

日が長いこの初夏ですら、少年は日が暮れるのを早いと感じた。少女といるといつもそう感じてしまい、そっと息をつく。

それは少女も同じで、いつも帰る時間になると寂しそうに眉を下げた。それから少年の手を握り、ぎゅっと力を込める。

「一日が、もっと長ければいいね。アル」

「そうだな……。もっと、長くていいと思う」

手を繋いでゆっくり歩きながら、二人はそう言い合った。それから歩きたびに楽しげに跳ねる髪を撫でて、その毛先に指を絡ませて巻いた。

くるくると巻きつけ、そっと指を抜き取り、少し癖になった髪の毛を梳いて直す。無意味にも取れるその動作を幾度か繰り返し、それからため息をついたあとに少女の頭に手をおいた。

「次は絶対綺麗に結うから」

「え？」

「折角綺麗な髪をしてるんだ、木に引っ掛けて切るのは勿体無いだろう」

暗くなるから、気をつけて帰るんだ、と少年は少女の肩に手をおいた。

それから少女が森を出て、正しい道を真っ直ぐ歩いて行くのを見送って、そっと息を吸った。これから行くところを思い出して自然と眉を寄せれば、秀麗な顔は自然歪む。

「日暮れは嫌だ」

ポツリと呟いて、それから髪を結う練習の算段を整えようと笑顔を浮かべた。

【閑話】 関係が変わる前（後書き）

素直なんだけど、結構ひねくれてるアルでした。この頃は一人称が『僕』、でも学園に入る頃には『俺』で、外行ではいつでも『私』です。

外面がいいというか、使い分けを強制されてる人です、この人。

【閑話】 自覚の引き金（前書き）

記念第二弾Ⅰ。自覚話。リゼットの。ちなみに閑話は三人称でリゼとアルの呼び名でいきます。

【閑話】自覚の引き金

自覚したのはいつだったのか、とりぜは一人で考えていた。暗いベッドの中で、時折このような考えを抱く。りぜの意識していないところで行われる、定期的なこの確認作業は自分の恋心を消すためか、新たにするためか。

それは本人にさえ分からず、りぜは夜毎悩まされていた。自分にそんなもので悩む資格がないことを知りつつ。

この恋心を自覚したのは、そんなに昔のことではない。少なくとも、庭師になろうと思い立った時点では、アルのことを畏れ多くも兄のようだと思っていたし、頼りにしていた。

りぜにとつて、アルはヒーローだった。どんなときも正しく、強く守ってくれる。その存在が変わったのは、一体いつのことなのだろう。一体いつから、頼りになる兄をそんな目で見ていたのか。

りぜはベッドの中で一人、そんなことを考えていた。

きっかけを挙げるとするならば、祖父にアルと会っていたことがばれたときだろうか。幼いなりに、アルとの出会いは秘すべきことだと感じ、誰にも話さなかったのだと自分の中で確認する。

もう何度も繰り返し返した作業であったが、未だに飽きずに繰り返す。そう、薄々は思っていたのだ。アルは貴族の息子なんかじゃなく、もつと遠い人なのではないかと。森に入ることが簡単ではないことを知っていたいればなおさらだ。

だからりぜはずっと秘密にしていた。週に一度の逢瀬が危険なのだどこかで分かっていた。祖父の病が深刻化し、危険な状態になると森に入ることが減った。それは約束を破ることに他ならず、りぜはそわそわと落ち着きをなくしていた。

そんなときに問われて答えたのだ。アルという貴族子弟と、森の中で会っていたのだと。祖父の驚いた顔は、未だにりぜの心に残っていた。その後に浮かべられる厳しい表情と同じくらい。

そしてそこでアルの正体を知り、以後会うことを禁じられた。アル、と呼ばれることも、それと同時に禁じられた。

一生その名を紡ぐことは許されないのだと。そしてそのとき、自覚したのだ。リゼ自身とアルは生きる世界がそもそも違うのだ、と。そして祖父が亡くなると、王都を出ることになり、もう二度と会わないだろうと思った。それでも、またいつか再会できればどんなにいいかと思った。

頼りになる優しい兄代わりの友に、会えたらどれだけ嬉しいかと。ただそれだけだった。そのとき思ったのはそれだけで、それが何の始まりかなど考えることはなかった。

それから庭師になろうと決めたのだった、とリゼは思い返す。

会いたくて、それでも自分の身分では会えないから。祖父の仕事を引き継ぎたい気持ちも確かにあったが、結局遠くからでもいいいらアルを見たいと思ったのだ。

だから庭師になろうと思った。父と母の反対を押しきり、祖父の仕事仲間に手紙を書いて庭師の空きがないか問うた。たしかそれから自覚したのだ。リゼは一年と少し前のことを思い出す。

どうしても娘を遠い王都に行かせたくなかったデイズレーリ夫妻は、リゼに見合いをさせた。その一帯の中でも特に話しやすく、真面目な少年との話だった。

リゼは目を細めて相手の顔を思い出そうとしばらくの間奮闘してみたが、何の効果もなく止めてしまう。

どんなに思い描こうとしたところで、今頭を支配しているのはただ一人、この国の第二王子だ。秀麗だと言われているのに、本人にはまるで自覚のない顔立ち。王子とは思えないくらいしつかりとした体。

それが今リゼを埋める全てだ。他の人間が入る余地など一切残されていない、それほどアルはリゼの中に根を張っていた。

「あの人と結婚すれば」

多分自分は幸せになれているのだろう、と今あったはずの世界を

言う。

言ったところで後悔の念など浮かぶはずもないが、リゼは口許を歪めた。その人はとても優しく、穏やかで、多分顔だって悪くなかった。真面目で仕事ぶりだって評価されていたはずだ。

穏やかな話し方は、多分アルに似ていた。だから少しだけときめいたはずだ。それなのに、結婚するかもしれない人なのかと考えた瞬間、リゼの胸を占めた思いは落胆だった。

彼は鳶色の髪と瞳ではない。

穏やかな光を灯す目は、私の求めている形じゃない。

鼻はもつと筋が通っているし、唇は薄くもしつかりと綺麗な曲線を描いている。

声はこんなに高くないし、もっと私の名を柔らかく呼んでくれる。手は指が長くて、剣を持つせいで肉刺ばかりできているのだ。

そのわりにすぐく器用で、髪を結えてしまう。ちょっとしたことから全て自分自身で解決してしまう。

本の頁を捲る手つきは慎重だし、背はもっと高い。

分からないけれど、もっと高いはずだ。もう随分と会ってないから、背も、顔も、声も違うだろう。きっと記憶に私の居場所なんてないだろう。

こんなことが、リゼの頭に一瞬で浮かんだ。そして求めている像が、頭の中でしっかりと結ばれる。アルだった。

目の前の男の人が霞むくらい、はつきりと瞼裏に写し出された。だから何も言わずに逃げ出した。父と母をその場において、びっくりしたような顔をした男の人も無視して。

呼び止める声など、聞きたくなかった。誰の顔も、声も、残しなくなかった。自分の中に結ばれた像が消えないように目をつむり、浮かぶ声が他でかき消されないように耳を塞いだ。

そして繰り返し思った。王宮に行きたい。会えなくていいから、一見みたい。見ることができさえすればいい。

記憶の中のアルが、どんなふうにも時を過ごし、あの頃と変わった

のか知りたい。心底そう思った。

「忘れられてると、思ってた。私のことなんて、覚えてないって」
決定打は、再会したときだ。

一年前の秋に、思いもよらず再会したときのことを思い出しなが
らリゼは笑う。名前を呼ばれた。はつきりとした声で。

あの頃より深く、低くなっているのに、変わらずこちらを包み
込んでしまう優しさを持っている声で。

分かってしまった自分を笑う。面影を僅かに残しただけの声なの
に、自分は分かってしまった。リゼは思い出して笑った。聞いた瞬
間自覚したのだ。自分は一生、この人から逃げられないのだと。

兄として振る舞う彼から妹として優しさを受けとる一方で、一生
この気持ちを隠し続けなければいけないのだと。

残酷な自覚だったが、それ以上にどこかスツキリとした。

少しずつ育ち、隠しきれなくなっていたものがようやく外に出て
きたのだと。妙な安心感があつた。もう隠さなくても、自分の中で
だけははつきり出してしまってもいいのだと。

自覚した瞬間芽吹き始めた恋は、終わりを予期していた。枯れる
ことを前提に芽吹いた恋は、終わる瞬間を今か今かとびくびくしな
がら待ち構えている。

早く来てしまえばいい、なるべく遅く来ればいい。リゼには決め
られないその思いは、いつも胸の中にあつた。

多分、ずっとあるのだろう。終わる瞬間をずっとずっと、体を丸
めて待ち続けなければいけない。それは怖い、怖い。

とっても、怖いんだ。

「自覚と失恋が同時だなんて」

ついてない。ついてないし、不幸だと思う。だけど手放したくな
いと思う。幸せだと、言葉を交わすたびに自覚する。

自分はこんなに近く、恋する人を感じられる。温かい愛に守られ
て、大切にされている。

いっそ勿体ないほどの優しさに包まれて、妹として愛されていた。

これを幸せと呼ばずにどうする？

一生叶うことのない恋が、許されない恋が、こんな形であれ育ち続けるのを黙認されているのだ。何にも勝る、幸せなのだと思うなれば。

「罰が当たる」

リゼはベッドの中で身を縮め、繰り返し自分に言い聞かせた。

幸せなのだと、と。たとえば、アルが誰かと結ばれて、自分に見向きもしなくなるときが来ても、今まで大切にされてきた事実が消える訳じゃない。

優しく髪を梳かれ、たくさんの知識を与えられ、守られたことはなくならない。リゼは栗色の髪を見ながら笑った。

綺麗な色だと誉められて以来、身なりに気を遣うことが少ない自分が唯一寝る前の手入れを惜しまないものだった。

荒れることの少なくなった手は、アルが悲しまないようにとクリームを塗り込むようになった。

平らではなくなった胸や柔らかかみを持つようになった体は、自らが女であると示しているようで忌々しかったが、男物の服でそれを隠した。

アルを好きだと自覚する瞬間、リゼは自分が紛れもなく女なのだと分かる。それを隠したくて、気付かれたくなくて。でも知らせたくなって。

奇妙な気持ちに苛まれる。

「アル」

隠すことに慣れたこの言葉は、いつか溢れてしまうだろう。リゼは小さく彼^かの人の名を呼ぶ。言葉にはできそうにない、恋心を込めて。

せめて届かぬ心の出口を見つけるように。

「アル、誰よりも私は」

幸せにしてくれる人ではないのだろう、運命の人ではないのだろう、それでも。

「あなたのことを、誰よりも私は」

愛しているんだと口に出せたなら、どんなによかっただろう。暗がりの中、ようやく体温で暖まってきたベッドに身を横たえ、リゼは微睡みながらそう呟いた。

愛してるなんて言ってしまったら、きっと自分は泣いてしまうだろうと思う。嬉しくて、苦しくて、幸せで、愛しくて……泣いてしまう。

伝えたいとは思うのに、困らせたくないとも思う。

ああだけど、できごと伝えるなら。

「伝えられたら」

精一杯の想いを、伝えたいなあと言った。

【閑話】仮面に隠すは 1 (前書き)

連続更新三弾。リゼは出てきません。学生時代のお話。続き物です。

【閑話】仮面に隠すは 1

名門貴族の子弟を集めた学園の中、一際は雰囲気の違い少年がいた。

整っている顔立ちは黙っていると話しかけにくさを持つが、話してみると人好きのする明るい少年だ。

少年と呼ぶには少々大人になりすぎているものの、友人達と話している様子はまだ子供で純粹そのものだ。そんな彼も今はその顔立ちに似合う格好でイスに静かに座っていた。

「アル、君も一緒にどうだい？」

「何がだ」

人を寄せ付けない空気を醸しながら読書をしていたその少年、アルにもう一人の少年、レオンが話しかける。

よく似た顔立ちだったが、甘さではレオンが、精悍さではアルが勝っていた。アルの持っている本を取り上げ、ぱらぱらとページを捲り、レオンは大きなため息をつく。ついでに芝居がかったように肩をすくめて見せる。

「確かに勉学に励むのはいいことだろうけど。そのうち脳みそにカビが生えないか心配になるよ」

「余計なお世話というものだ。お前達のように遊び惚けるつもりはない。まあ、勉強で脳みそをカビだらけにする気もおきないが」

仲がいいとはとても思えない会話を繰り返し、二人は辛辣な言葉の応酬を楽しんでいた。その証拠に、似通った顔立ちは不敵な笑顔を浮かべていたし、アルは口ほど不機嫌ではなかった。

辛辣な言葉の中にも隠しきれない親密さがにじみ出ており、二人が互いをよい友人と認めていることが分かる。

二人を遠くから心配そうに見つめていた少年達はそっと息を吐いた。この冗談とも本気とも取れる言葉の応酬が周りをヒヤヒヤさせているなど、本人達は知る由もない。

「人間関係を良好にするのも、立派な勉強だと思わないかい？ 王族には必須の技術だと思うけど」

「お前はただ遊びたいだけだろう？ 違うのか？」

「否定はしないけど、それ以外のこともある。別に制服を脱いで抜け出そうとしてるんじゃないよ。正式な手続きで外へ出ようと言ってるんだ。それに」

「抜け出すのを楽しんでるのはアルでしょ、だろ？ お前が言いたいことくらい分かる」

「分かっているのなら、賛成しない？」

なかなか食い下らないレオンを見つめ、それからアルは小さくため息をついた。

諦めたようにレオンから本を奪い取り、胸ポケットから出した栞を本の間に挟む。その様子をじっと見つめていたレオンの目に喜色が輝き、遠くの友人達へ大きく手を振る。

それと同時に向こうの方で小さな歓声が巻き起こり、アルは自分の行動が大きな意味を持っていると知った。

最近、何かにつけてこんな反応を取られていると思って、アルは綺麗に整えられていた髪をくしゃりとかき上げた。

剣術の授業で鍛えられ、最近伸び始めた身長と相まってひどく絵になる格好だったが、残念ながらそれに黄色い声を上げる可愛らしい女性はこの学園にはいない。

周りにいるのは暑苦しいと表現できる男どもだけだ。

「今度は何をした」

「別にー。ただアルが来るかどうかで賭けをしてただけ」

「王子を賭けの対象にするとは、いい度胸だ」

長く座っていたことで寄ってしまった皺を手で直しながら、アルは呆れたように呟く。

どこの国に、自国の王子の行動を賭ける臣下達がいようか。實際目の前にいるので大した文句も言えず、アルはむっと口を閉じた。

それから隣のイスにかけてある外出時の上着を手に取り、校則に

そって正しく着込んだ。ついでに帽子も忘れずに被ると、由緒正しき生徒になる。

整った容姿にきちんとした制服。

どこからどう見ても由緒ある学校の優等生だ。その実、レオンと二人で授業をサボった挙句夜中寮から抜け出そうと画策している生徒には見えない。

それはレオンも同じことで、二人して教師の悩みの種だった。

「様になるね、相変わらず」

「同じ顔をしてるんだ。自分も褒めてることになるぞ、それ」

「僕は自覚してるもの」

「嫌味だ」

校則が厳しいことで有名なこの学園、紳士としての礼儀作法もさることながら、集団生活やスポーツにも力を入れている。

いわばどこから見ても完璧な『紳士』を育てることが目標であるここは、年頃の少年達からすれば息苦しいことこの上ない。

「で、どこへ行くんだ？」

「由緒正しき夜会だよ。仮面舞踏会、マスカレード」

ぴくり、とアルは片眉を上げて疑問を投げる。

そんな彼に全く怯える様子のないレオンは、そこにこやかな顔を崩さないまま、先ほどアルが眉を顰めた言葉をそのまま繰り返した。「だから、夜会。大丈夫。これはきちんとした招待状をもらっている方々しか入れないし、なかなかに格式高い。さすがに夜会へ出るときには制服でいられないけれど、先生方の許可は取ったよ。僕たち、特例だし」

さらりと口に出したレオンの言葉に、アルはより一層不快感を顔わにしながら帽子を脱いだ。

『レオン』と静かに呼びかければ、呆れたようなため息を吐かれる。『やれやれ』という小言も加えられて、アルは苦々しく口を歪めた。

「先生方がよく許したな」

「君のとおこのお母様が直々に頼んできたらしいよ。まさか王妃様の願いを無碍にするわけにもいかないでしょう？」

アルが無言で歩き出す。その横に慌てて並んだレオンが微苦笑しながら、自らも制服を整えて帽子を被った。

きちんとした格好をすればますます似てしまう二人は、お互いの顔を見合わせて小さく笑う。

同じ格好、同じ顔、同じ声。

「出れば満足するのか」

「まあ、されるんじゃないかな」

はい、これ衣装ね。そう言って渡された紙袋の中は、略式の夜会服だ。

格式高いとはいえ、仮面舞踏会自体がそこまで正式な夜会ではない。どちらかといえば、出会いを求める男女の夜会だ。

……寮生活の男子学生が行くものではない、とアルは勝手に決め付けて眉をきりと寄せた。元々この手のものに関心がない上、どちらかと言えば苦手だった。

紙袋に入っているものが正式な礼服ではないのは、少し青っぽい生地が示している。

洒落者なら許されるだろうが、格式高いものならば眉を顰められるだろう。入っている装飾品もどちらかと言えば格式よりも全体のバランスが優先されているようだ。

つまり、格式高いとはいえそれは仮面舞踏会の中では、という前置きが必須だということだ。

「このシャツは……お前ならいいかもしれないな、レオン」

「嫌だな、君のだよ。こういうのも着てみれば意外にいいものだよ」
薄い青色のフリルシャツは、甘い顔立ちのレオンには似合っても、自分には似合わないだろうとアルは思う。

実際はそんなに変わらない顔立ちなわけだから、本人が気にするような違いは見れないのだが、本人はそう思い込んでいた。

「ま、これも仕事だと思って割り切ってよ。実は面白いと思うよ」

「そうだろうか、俺には分からないよ」

ぽつりとアルが呟いて、そろそろ暗くなり始めた空を見上げた。茜色だった空は紺のベールをかけたように少しずつ色を変えていく。その中で一つ二つと明るい輝きが現れ始め、辺りが闇で覆われた。ある意味昼よりも長い夜の訪れを知ると、アルは眉を曇らせた。

仮面舞踏会とはいえ、正体がばれないわけではない。よく知る人物に会えば自然と噂を広がるだろう。

「難しいことは何も考えなくていいよ。ただ楽しく話せばいい。美味いものを食べて、話の上手な後腐れのない人たちと話をして、日頃の鬱憤なんか晴らしちゃえばいい。僕たちの顔が見えるわけでもないし」

案外楽天的に語った後、レオンは再び生真面目な顔を作ってアルを見返す。

それから遅れがちになっているアルの手を掴み、ゆっくり引っ張りながら歩いた。『この年で手を繋ぐのはないな』と笑いながら。

「男と手を繋ぐなんて、はあ、明日には変な噂が広がるんだ」
「変？」

「僕はまだしも、君は有名だからね」

女性に靡かない、興味ない、何も感じない。

その三拍子が揃って噂されないわけないだろう、とレオンは少しだけ嫌な顔をしながら答える。

一方のアルはその噂の渦中であるにも拘らず、自分がどんな噂のネタにされているのか予想もできなかった。

一体誰に、どんな目的でどのような噂を立てられるというのか、と首を傾げながらレオンの手に従った。

「君ね、そんなに女性が好きじゃないの？」

「いや、嫌いじゃない」

ただ、とアルは前置いてから小さくため息をついて、レオンの疑問に答えようと口を開く。

「面倒なんだ、色々と考えたら。だから別にいらないんじゃないか

って思う。特に必要だと感じたことがないから」

年若い少年の言葉とは思いがたいそれに、レオンは心底嫌そうな顔をして、それから呆れたようにため息をついた。

よく知っているはずの友人を、まるで理解できない怪物を見るような目で見て、そつとアルの頭を叩く。

慰めているというよりは、むしろ叱責しているようなそれに、アルは髪を整えなおすことで抗議する。

「必要性なんてありはしない。愛にも、まして恋なんかにもね。だけれどそれでも人間はそんなものに縋るんだよ」

「意味が、分らない」

「情緒教育の一環だと思えばいいんじゃない？」

知ったかぶってそういうレオンは小さく笑いながら、学校側が用意した馬車に乗り込んだ。

【閑話】 仮面に隠すは 1 (後書き)

そしてアルにあらぬ噂が降りかかるわけです。10・5話のあとがきでの会話は、こういう下地があつてこそその発言なわけでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3689v/>

竜胆の東屋

2011年12月28日15時54分発行